



社団法人日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2009

地球のいのち、つないでいこう



生物多様性

目次

開催趣意	1
スケジュール	2
開会式・1日目全体会	3
開会式	4
全体会・旗揚げアンケート	7
基調講演「生物多様性を如何に広めるか？」	8
基調講演「企業は生物多様性にどう取り組んでいるか？」	10
基調講演「生物多様性と環境教育」	13
事例紹介「生態教育としての解説とは」	18
事例紹介「映像で伝える“生物多様性”」	20
事例紹介「生き物とのつながりの自分化から社会化へのフローを」	21
全体ディスカッション	23
2日目ワークショップ	25
2日目夜 JEEFの集い	45
オプションプログラム	53
3日目全体会・閉会式	61
全員参加型パネルディスカッション	62
閉会挨拶	66

開 催 趣 意

今年で通算 23 回目となる「社団法人日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2009」を、今年も 11 月 14 日(土)～16 日(月)の 3 日間にわたり、財団法人キープ協会清泉寮・山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターを主会場に開催いたします。

ますます深刻になりつつある環境問題を解決する取り組みの一環として環境教育があります。環境問題を解決し、住みやすい社会にしていくためには、まず、諸問題を知り、気づき、関心を持ち、問題意識を共有することが大切です。

そして、自然はさまざまな分野と密接につながっていることから、それぞれの分野に携わる人と人(または団体)がつながりを持ち、共に手を携えていくことが必要です。

全国各地から研究・教育・行政・企業・NGO・NPOなど環境教育の現場で働く人々同士のつながり=ネットワークを大切にし、継続的に育んでいくことが社会を動かしていく力の源になると考えております。

そのために、お互いの活動を理解し、認め合い、共に考え、力を合わせていける場の基盤づくりを目的として、このミーティングを開催いたします。

特徴

清里ミーティングの最大の特徴は、参加者の皆様が“主役”であることです。

どんなことについて話し合い、共有し合うのか、参加者主体でつくり上げていくという性格を持っています。

テーマ

このミーティングは、主に下記の 2 点を全体のテーマとしています。

1. 参加者同士のネットワークの構築
2. それぞれの環境教育活動を再確認し、理念や意識を共有する場
～人と人、思いと思いが出会うことで、新しいことが動きはじめます～

今年の特徴

通算23回目となる今年のメインテーマは「生物多様性」～環境教育の役割～。

2010年10月に愛知県で開催されるCOP10(生物多様性条約第10回締約国会議)に向けて、日本の各地で「生物多様性」に関する会合・イベント等が行われています。「生物多様性」…わかっているような、よくわからないような、この捉えどころのむずかしい言葉。「生物多様性」を社会に浸透させるために環境教育はどのように役割を果たすことが出来るのかを、具体的に考えてゆきます。

全体会では「生物多様性とは何か?」について環境省・企業・NPO・自然学校の方からそれぞれ基調講演をいただきます。その後「生物多様性 私はこう伝える」について数名の方から事例紹介をしていただき、参加者全員で生物多様性について話し合い、考えていただきます。

2日目には、生物多様性に関係した3.5時間ワークショップの実施もいたします。

また、「環境教育プレゼンテーション」では、たっぷり時間をとって、皆様から活動の最新情報を発表していただきます。各地で環境教育を実施している企業や行政や自然学校の中で、今何を最も大事な環境教育のテーマとしているのか、どんな課題、新しい挑戦があるのかを発表しあい、共有しましょう。

そして、それぞれの活動を理解し、刺激を受け合いながら、これからの環境教育活動につなげていただきたいと思います。

スケジュール

1日目：11月14日(土)

10:30～	受付開始
11:30～12:15	ちょっと早めに到着された方のための先取り交流企画(自由参加)
13:00～16:30	開会式 全体会「生物多様性をどう伝える」 基調講演「生物多様性とは何か? 行政・企業・NGO から 事例紹介「生物多様性 私はこう伝える」
16:30～17:30	休憩・チェックイン
17:30～18:15	環境教育プレゼンテーション
18:30～20:00	夕食
20:30～22:30	環境教育プレゼンテーション 情報交換会
21:30～22:30	JEEF 理事の何でも相談所

2日目：11月15日(日)

7:00～ 8:00	早朝ワークショップ(自由参加)
7:30～ 8:30	朝食
8:30～ 9:00	休憩・移動
9:00～13:00	3.5時間ワークショップ(昼食含む)
13:00～13:30	休憩・移動
13:30～17:00	3.5時間ワークショップ
17:00～17:30	移動・休憩
17:30～18:30	JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
19:00～20:30	夕食
20:30～21:00	休憩・移動
21:00～22:30	環境教育プレゼンテーション JEEF 理事の何でも相談所 情報交換会

3日目：11月16日(月)

7:00～ 8:00	早朝ワークショップ(自由参加)
7:30～ 8:30	朝食
8:30～ 9:00	チェックアウト
9:00～11:30	当日募集ワークショップ
11:45～12:30	全体会・閉会式
12:45～13:45	さよならパーティ
14:00～	清泉寮新館見学ツアー(自由参加) キープ自然学校見学ツアー(自由参加)

1 日目

開会式・全体会

開会式

司 会 : (社)日本環境教育フォーラム理事 河原塚達樹

開会挨拶 : (社)日本環境教育フォーラム会長 北野日出男

来賓挨拶 : 環境省自然環境局総務課自然ふれあい推進室自然教育係長 柘植規江氏

全体会 テーマ「生物多様性」 ~環境教育の役割~

司 会 : (社)日本環境教育フォーラム理事 中野民夫・若林千賀子

< 基調講演 > 「生物多様性とは何か? 行政・企業・NGO から」

生物多様性を如何に広めるか? 環境省自然環境局生物多様性地球戦略企画室長 鳥居敏男氏

企業は生物多様性にどう取り組んでいるか? 日経 BP 社 日経エコロジー 藤田 香氏

生物多様性と環境教育 (社)日本環境教育フォーラム理事 / (財)日本野鳥の会 安西英明

< 事例紹介 > 「生物多様性 私はこう伝える」

生態教育としての解説とは (社)日本環境教育フォーラム理事 / NPO 法人生態教育センター 小河原孝生

映像で伝える“生物多様性” (株)Green TV Japan 代表 水野雅弘氏

生き物とのつながりの「自分化」から「社会化」へのフローを ~生態系ネットワークの「アニマル

パスウェイ」の事例も含めて~ (財)キープ協会 やまねミュージアム館長 湊 秋作氏

< 全体ディスカッション >

開会挨拶

(社)日本環境教育フォーラム会長 北野日出男

皆さん、清里ミーティング2009へようこそ。193名のご参加がございましたそうで、本当にありがとうございます。本当に楽しい2泊3日だと思いますが、今日はご来賓として、環境省の自然ふれあい推進室から柘植係長がお見えになっております。後ほどご挨拶いただけるかと思ひます。

それから、この集いにご後援いただいている環境省はじめ各省庁と山梨県、日本環境教育学会、それからさらに、会の運営に毎年、多大なお力添えをいただいているキープ協会及び山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターの皆様にご主催者を代表して、厚くお礼申し上げます。特にキープ協会さんには、この春公開されました清泉寮のアネックス新館、これを全面的に開放していただいたことを、改めて重ねて厚くお礼申し上げます。

日本環境教育フォーラム(JEEF)は、おかげ様で様々な環境教育の普及に向けて、事業を実施することができました。ですが、いくつかの課題も抱えております。挨拶の代わりにお願いみたいな言い方で申し訳ないのですが、実は会員数が相当激減してしまっています。昨年に比べると23%くらい減ってしまっております。実際の数字を申し上げますと、平成20年3月31日現在では1,104名おられたのですが、今年21年3月31日ですと843名になってしまっております。いろいろな社会経済的な事情もあるかと思いますが、特に学生会員さんが減っているのは、非常に残念に思ひます。お聞きするところによると、年間の6,000円(学生は3,000円)の会費が、生活に関わるような重さをもってきているというお話をお聞きして本当に申し訳なく、且つ、残念に思ひます。それでともかく、今回初めて参加した方は今日から自動的に会員になるわけですね。ところが、ここ3、4年くらいまではずっとそのまま会員を継続しておられたのですが、ここ2、3年は次の年になるとおやめになってしまうのです。継続して下さい。

これは非常に大きな問題で、JEEFは一つの理念というか、夢を持って、自然体験を通して環境教育を世の中に広める。そ



うして日本、もっと言えば世界の持続可能な社会をつくるのに燃えているわけです。一種の社会的使命感を持っているのですが、その使命感だけでは食べていられないわけですので、会員の皆様にごどのようなメリットを差し上げたならば、会にずっと存続していただけるか、理事はじめ考えています。ですので、ぜひとも、皆様方の忌憚りの無いご意見を、理事の諸氏にごこの2泊3日の中で口頭でお話していただきたいと思ひます。

それから次に、もう1つ申し上げたいことは、今年の6月の総会で、このJEEFが新公益社団法人への申請を年内に行うことが承認されました。この件については、事務局の今泉さんが、会報「地球の子ども」6月号に新公益社団法人移行に向けてとして紹介しておりますので、ぜひご一読いただきたいと思ひます。

最後になりますが、これまで平成12年から10年間、JEEFの事務局長を勤めて下さっていた大黒栄二さんが、定年でこの9月末日にお辞めになりました。新しく林田悦弘さんが事務局長としてお見えになったので、宜しくお願ひしたいと思ひます。

皆様には、この2泊3日、いろいろな方にお会いできるかと思ひます。ここでいろいろな学びを手に入れて、今後の皆様方のご活躍の糧にさせていただけることをお願ひして、ご挨拶にかえたいと思ひます。どうもありがとうございました。

司会

(社)日本環境教育フォーラム理事 河原塚達樹

このミーティングは、1987年に『清里フォーラム』として始まりました。翌年から『清里環境教育フォーラム』として開催されるようになり、1992年に日本環境教育フォーラムができてから『清里ミーティング』と呼ばれるようになりました。1987年の1回目から数えて今回で通算23回目の開催となります。

日本環境教育フォーラムは現在、環境省の所管の社団法人でございます。今回、環境省自然環境局総務課自然ふれあい推進室の自然教育係長、柘植規江様にご参加いただいております。一言ご挨拶をいただければと思ひます。よろしくお願ひします。



来賓挨拶

環境省自然環境局総務課自然ふれあい推進室自然教育係長 柘植規江氏

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、環境省自然ふれあい推進室の柘植と申します。よろしくお願いいたします。

通算 23 回目ということで、本当におめでとうございます。今回の環境教育ミーティングの全体会では、「生物多様性」をテーマにするということを伺っておりまして、これは世論調査等では、まだ言葉としても認知度が低いような状況です。ましてや、その大切さを理解するとか、実感するところまでは、まだまだの状況です。環境省としましても取り組んでいるところなのですが、是非みなさんと一緒に、頑張っていきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

今回、私は3日間参加させていただく予定ですので、皆さんの活動の状況など、たくさんお伺いしたいと思います。すごく楽しみにしております。

短いですが、皆様にとって今回の環境教育ミーティングがとても有意義なものとなりますように祈念いたします。まして、挨拶とかえさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。



JEEF 理事の紹介・挨拶

司会(河原塚) :

それではここで日本環境教育フォーラム理事、フォーラム事務局、そしてミーティング開催現地事務局、さらにボランティアのみなさんをご紹介させていただきたいと思っております。理事から一言ずつご挨拶をいたします。

村上千里理事 :

こんにちは。ESD - J の事務局をしております、JEEF の理事の中では最年少と申し上げて、早些年経っておりますけれども、村上千里と申します。「持続可能な開発のための教育」というのをキーワードに活動しているので、ぜひ声をかけて下さい。今回どうぞお楽しみ下さい。

若林千賀子理事 :

若林と申します。若林環境教育事務所というのを主宰しております。今回また新しい方、20代の方にたくさん参加いただいておりますので、ぜひ実りの多い3日間にできればなと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

岡田康彦理事 :

副会長を仰せつかっております岡田康彦です。私自身は一応労働金庫というところの団体、協会と連合会の理事長をしております。そこで辛うじて「ろうきん森の学校」なるものをささやかにやらせていただいております、何がしかの参加資格があるかなと思っておりますが、元環境事務次官ということで、この日本環境教育フォーラムにも長く関与させてもらった関係で参加させていただいております。よろしくお願いいたします。

広瀬敏通理事 :

20年前は、ホールアース自然学校代表ということで参加して

いたのですが、現在は日本エコソリズムセンターということで参加しております。ここに並んでいる人、若い方もいますが、おじさんとおばさんばかりで、かつては青雲の志を持ってみんな集まって、今も志は消えないですが、歳とっちゃいました。ということでぜひ、今日が初参加と手を挙げた方々が、来年理事になって下さい。このJEEFの発展が、イコール日本の環境教育、世界の環境教育の発展だと思って、一緒にやりましょう。よろしくお願いいたします。

北野日出男理事 :

先程ご挨拶したので細かいことは抜きますが、おじさんとおばさんばかり・・・私、おじいさん、昭和一桁は私だけかな？おじいさんも頑張っています。よろしく。

小河原孝生理事 :

皆さんこんにちは。生態教育センターの小河原です。私も実23回目の連続参加というわけですが、ただ一人かもしれない。当時は35歳でした。若かった。本当に当時20代・30代の若者がこのJEEFを始めたんだということで、ぜひ皆さんにその跡を継いでいただきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

安西英明理事 :

安西です。よろしくお願いいたします。

徳永豊理事 :

山口県周南市からやってきました徳永豊と申します。実は型破りですけども、市の職員をしております、こういうところに私は17年目になりますが、しつこく通ってきています。どうぞよろしくお願いいたします。

中野民夫理事：

中野民夫と言います。博報堂という広告会社に勤めながら、いろいろなことをやっています。ワークショップとかファシリテーションとか参加型の場作りみたいなことにこだわったりしてきています。この新しい新館で初めての清里ミーティング、また新たな出会いが起こることを楽しみにしています。

佐藤初穂理事：

国際自然大学の佐藤と申します。私も広瀬さん同様、長いこと自然学校を運営していますが、今年から自然体験活動推進協議会なる長い名前の団体の代表を務めることになりましたので、そちらの方もよろしくお願いいたします。

小澤紀美子理事：

おざわではなく、ござわといひます。前は一人だったので受けていたのですが、環境大臣まで小沢さんになっちゃったので……。ござわといひますが、出身は北海道です。この3月で無事、日本環境教育学会の会長を終わり、今は東海大学にお世話になりながら、NPO 法人子ども環境活動支援協会の代表理事をしております。そしてまた子ども環境学会の副会長をしております。みなさん若い方から、エネルギーを頂いて帰りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



川嶋直理事：

こちらで働いておりますキープ協会の川嶋です。よろしくお願ひします。後ほどちょっと短めにお話します。

河原塚達樹理事：

日本レクリエーション協会の河原塚と申します。理事の皆さんには、今回のミーティングのどこかでワークショップや全体会等々、皆さんの前に立ってお話をさせていただく、あるいは司会進行をさせていただくという役目を必ずもつということになっております。私はその一番バッターということで、ただいま司会をさせていただいておりますが、理事も一生懸命動きまでするので、どうぞよろしくお願いいたします。

3日間あつという間でございますけれども、日本環境教育フォーラム理事、主催事務局、開催事務局、キープ協会の方々共々、皆さんのよりよい交流が行われるよう頑張りますので、今年もこの場から多くのコラボレーション、そしてネットワークが生まれることをお祈りしたいと思います。

それでは、この後引き続き全体会に入りますが、このミーティングは様々な方のご支援ご協力の上に成り立っております。今回新しい会場に適した光の強力なプロジェクターをエプソン様より拝借いただいております。エプソン様ありがとうございます。



歓迎の挨拶

(社)日本環境教育フォーラム専務理事 川嶋直

皆さん、本当によろこそ清里においで下さいましてありがとうございます。

会長の挨拶の中にもありましたけど、この施設はこの春、4月にオープンしたばかりの施設です。日本全国たくさんの方からのご寄付をいただいて、建てることができました。会場の中にもご寄付をいただいた方がいらしていますが、本当にありがとうございました。おかげさまで何とかここまでやってこれることができました。いろいろな細かい問題がまだありまして、プロジェクターもその都度借りないと大きいのが無いというような状態ですが、頑張ってやってきたいと思ひます。

先ほど通算23回目と言ひましたが、新施設をメイン会場

にして行うのは初めてですので、僕らも少しドキドキしております。食事の提供のことなど、いろいろ不手際があるかもしれませんが、何か困ったことがあれば、青か白のスタッフジャンパーを着ている人か、あるいはピンクの名札の人を捕まえて、遠慮しないで聞いていただければと思います。

それでは、今回のテーマが「生物多様性」というお話を何度かしてありましたが、僕たちが環境教育にどんな役割が果たすことができるのだろうかということを、この後休憩を挟みまして、16:30くらいまでここで過ごそうと思ひております。この時間の進行は理事の中野さんと若林さんをお願いすることになっております。それではここでバトンタッチをします。

全体会 テーマ「生物多様性」 ～環境教育の役割～

司会

(社)日本環境教育フォーラム理事 中野民夫・若林千賀子

司会(中野) :

皆さん、こんにちは。司会進行を務めます中野です。よろしくお祈りします。16:30まで「生物多様性」というテーマに取り組んで、6人のゲストの方をお招きしております。今なぜ、生物多様性なのでしょう？若林さんどう思いますか？

司会(若林) :

後で環境省の鳥居室長からご説明がありますが、いろいろな意味で地球温暖化だとか様々な問題を皆さん、うすうす感じてらっしゃると思います。ここにこうやって集まっているのも、何か環境の変化がおかしいぞとか、身の回りの自然だとか、自然体験活動をしている中でこの間までいた生きものがいない、宅地になってあの木はなくなってしまったなど、いろいろなことが起きている。そのいろいろな現象の、とどのつまり、いろいろな意味で生物の豊かさが無くなってきている。それは一重に私たちの命の長さや豊かさをついばむことになっている、ということがようやく世界中で共通認識ができてきて、人間は他の生きものの言葉をなかなか上手に理解して会話することができないので、人間としてどうしたらいいのかということを考えなければいけない、ということだと思います。

司会(中野) :

このタイミングにというのは、やはり来年COP10というのが名古屋であるからと思っているのですが、デンマークでCOP15というのもありますね。その違いはというと、COPとはConference of the Partiesの略、締約国会議なので、今年デンマークであるCOP15は気候変動枠組み条約のCOPで、来年のCOP10は生物多様性のCOPで、本当は両方すごく大事な問題ですが、日本ではかなり温暖化の方に関心が偏っていた。だからやはり来年の名古屋でのCOP10は、日本は議長国だし、次の目標を決めるし、大変な時なので、日本でもっとこの理解を進めていこうという流れがあるのだらうと思っています。

今日、前半の3人のゲストの方を迎える前に、どんな方がここに参加しているのか、先ほど半分は新しい方、初めての方だということになりました。本当にその方々のためにこの場があります。たくさんの経験を積んできた人もみんな仲間ですので、ぜひ捕まえて、いろいろなことを聞いたりつながったりしていただきたいと思います。

最初に、どういう人がいるか、清里ミーティング恒例の旗揚げセッションをします。いくつかの質問をしますので、該当する番号を選んで、お手元のカードをさっと掲げて下さいね。

恒例！旗揚げアンケート

質問1：あなたのことを教えてください

会社員 52人=37%
行政関係 7人=5%
学生(院生も含む) 24人=17%
NPO・NGO・フリーランス 58人=41%

質問2：私は・・・(環境教育との関わり具合)

環境教育の実践者・研究者・担当者=専従です 33人=23%
環境教育の実践者・研究者・担当者=自分の半分以上の専業 9人=6%
環境教育の実践者・研究者・担当者=自分の半分以下の専業 40人=27%
興味がある・勉強中 65人=44%

質問3：生物多様性について理解度・関わり

今回初めて聞いた 5人=4%
言葉は聞いたことはあるが、中身は知らない 32人=28%
言葉は大体理解しており、関連する活動をしている 78人=68%



< 基調講演 > 「生物多様性とは何か？ 行政・企業・NGO から」

生物多様性を如何に広めるか？

環境省自然環境局生物多様性地球戦略企画室長 鳥居敏男氏

皆さん、こんにちは。ご紹介に預かりました、環境省の生物多様性地球戦略企画室の鳥居でございます。私と清里ミーティングとの関わりからまずは入らせていただきますが、ちょうど私が役所に入ってしばらくしてからです。まだ、清里フォーラムといていた頃、私が妙高高原で国立公園のレンジャーをしていた時にこちらに寄らせていただき、その後も何回か通勤先からも来させていだいたことがございます。

今日はそういうある意味、慣れといえますか親しみということで、最初ご紹介に預かりました、生物多様性とは何かという話、業務の話もしようかなと思ったのですが、むしろ短い限られた時間、日ごろ思っていることをお話ししたいと思います。たぶん生物多様性とは何かということは、この後いろいろの方がお話しになると思いますので、私からは冒頭の問題提起という意味から、簡単な話をさせていただきたいと思っております。

今年度(平成 21 年度)、内閣府が全国 20 歳以上の 3,000 人の方を対象に「生物多様性という言葉を知っていますか？」という調査を行いました。その結果、2,000 人弱の方から回答をいただき、「聞いたこともない」という方が約 6 割以上、つまり世の中の 6 割以上の方は生物多様性なんて聞いたこともない、いわんや意味を知っていると言う方は 1 割弱だったと記憶しています。地域的なデータということもあったため、地域別にまとめさせていただきましたが、来年、愛知県名古屋市で生物多様性の国際会議があるということで、特に東海・関東は 4 割前後、北海道もなぜか非常にパーセンテージが高いですね。ところが、東北地方は 27.3%、長野・岐阜・山梨の 3 県を併せて東山地方というらしいのですがこれが 26.7%と、キープ協会には頑張っていたかと思っておりますが、西日本も 3 割ちょっとということで、まだまだ認知度が少ないということが分かりました。ちなみに環境省が独自に平成 16 年度に、やはり 2,000 人くらいの方にアンケート調査を行ったところ、当時は確か 30.2%の人が聞いたことがありまして、6.2 ポイント確かに増えたことは増えた。5 年間で 6.2 ポイント増えたということですが、まだまだ少ないという状況です。

来年大きな国際会議、全世界から、それから国内からもたくさんの NGO がいらっしゃいますが、COP10 は 10 月 18 日から 2 週間、それからその前の 11 日からカルタヘナ議定書といえます遺伝子組み換え生物の締約国会合が 1 週間ございまして、計 3 週間の長丁場の会議があります。そういうこともあって、最近ようやく新聞でも、「多様性」という言葉が出てこない日がないくらいに報道されるようになって参りました。ぜひこれを機会として、生物多様性ということを広めていきたいと思っております。

じゃあ広めたいことは一体何なのでしょうか？という所からまず入りたいと思います。

では「生物多様性」という言葉を聞いたことがあると言ってもくれるのが嬉しいのか、ということですね。そういう言葉を知ってもらうことももちろん大事です。大事なのですが、本当に重要なことはそれだけではないと思います。まず多様性



という言葉の意味を正しく、知識として知っている、ということが重要だと思います。その上で生物多様性というのが我々の日々の暮らしとどう関係しているのか、ということを知って理解して知る。そしてそれが損なわれたときに、私たちの暮らしが一体どうなるんだということを知る。そういうことを知ること、それが一つの重要性、意義の理解だと思います。

敢えて多様性について簡単に紹介しますと、条約上は生物多様性というものを、生態系の多様性、種の多様性、遺伝子のレベルの多様性(種内の多様性といっています)の3段階に分けて定義をしています。また、生物多様性条約の目的は、生物多様性の保全と、持続可能な利用と、それから遺伝資源の利用による利益を公正かつ公平に分配すること。何か難しい言葉が並んでいますが、途上国と先進国の利益の再配分みたいなことも書いてあるわけです。今日はその部分はちょっと置いておきますが、人との関わりにおいて、先程3つのレベルの多様性の話をしましたけれど、私たちが先程お昼ごはん食べても生きものであります。今吸っている空気も植物が出してくれる酸素を吸っているわけです。そういうことを考えると、生物というものがなくては、我々は生きていけないわけですね。地球が確か46億年前に誕生して、生命が誕生して38億年くらいということを考えると、ずっとそういう進化の歴史の結果として、今、我々が存在して、あるいは我々以外の生き物が地球上に存在している。そして、その生命のつながりというのが、例えば種が絶滅してしまうと、そこから生まれないで途絶えてしまうわけですから、そのつながりは切れます。あるいは、食物連鎖でつながりが表現されることもありますし、渡り鳥が、南半球から北半球まで飛んでいくという地域的なつながりというものもあると思います。そういうつながりが、生息地の破壊や種の絶滅、開発によってどんどん切れている、というのが今一番問題となっているわけですね。少々切れるくらいであれば、自然は自分の力で回復していき、また自分の力でつながりを戻し

ていくこともあり得るのですが、今の人間の活動は、その回復力をはるかに超える力で、脅威で、つながりの破壊が進んでいるということだと思います。その破壊が進むとどうなっていくかということが、正直わからないですね。いつ何時、例えば伝染病が蔓延するとか、あるいは気候変動による災害によって大きなダメージを受けて、そこからなかなか回復できないとか、いろいろな恐れがあるわけですが、そういうことが十分にわからない以上、今、最善を尽くしておく必要がある。それは予防的措置と呼ばれています。そういうことをやっていこうということです。

そういう保全や、持続可能なありようのための行動と、最終的にはその言葉の意味も知っていただき、重要性を理解していただき、そして、今自分達が何をやるのか、そのための行動を起こしていただくということが究極の目的ではないかと思います。

それでは、一般の人になかなか広まらない、というのはどうしてなんだろうかということを考えたいと思います。

1つは、言葉が馴染めないのですね。「生物多様性」、五文字漢字が続くと、もうなかなかよくわからない。私も環境省に入った当時、「生物多様性」という言葉は知りませんでした。これは条約ができたのが1992年のリオの地球サミットの時ですから、その前にもバイオロジカル・ダイバーシティという言葉がありました。日本語で「生物多様性」というふうに訳されることはその頃はあまりありませんでした。同じ1992年に気候変動枠組条約というのがある、リオの地球サミットで署名が始まりました。ところが、向こうは気候変動枠組条約と言っていますが、世の中では“温暖化”という、この3つの言葉で非常に一般の方々にも理解されるようになったのではないかと思います。正確に言えば、温暖化だけではなくて、気候変動ですから、ちょっと寒くなったり乾燥したりと、いろいろなケースがあるのですが、そこは、誰がこれ考えたのか、凄いなあと思いますね。

それでは「生物多様性」という言葉を誰か良い言葉でぜひ置き換えていただきたいと思うのですが、例えば、自然共生を何と言ったらいいのかも悩ましいですが、スポッとこぼれる言葉がなかなか見つからない。そういう難しさもあって、言葉が馴染めないということがあがると思います。

それから先程も言いましたように、暮らしとの関わりがいまいちよくわからない、ということ。何か北極の方で氷が解けている映像がTVで流れますけれど、あれとは暮らしとどう関係があるかわからないとか、ホッキョクグマが絶滅したら我々の暮らしとどう関わるのかよくわからない、ということがあがると思います。

どうすればいいのか、保全や持続可能な利用のための行動につなげていこうといっても、じゃあどうすればいいのか？温暖化であれば、例えば省エネとか、3Rを進めていくということがあがるかもしれませんが、生物多様性を保全するためにはどういう行動を起こしていけばいいのかなあというのがよくわからない。

こういったところが広まらない理由ではないのかなと思います。そういう状況を打破するために、どうしたらいいのかということを考えてみますと、これは行政の立場として“各セクターへの働きかけ”と書かせていただきましたが、地方公共団体、企

業さんを含む事業者の方々、教育関係者の方々、そういった方々への働きかけをしていくということが重要だと思っています。国の方では、生物多様性国家戦略というものを作って、国としての生物多様性の保全と、それから持続可能な利用に向けた戦略を作っております。その中に4つの基本戦略というものが掲げられているのですが、1番最初に「生物多様性を社会に浸透させる」という項目が挙げられていて、それに沿って今いろいろなことをやっております。例えば地方公共団体への働きかけといたしましては、昨年、生物多様性基本法という法律ができ、条約に基づく国家戦略は、もう第1次、第2次、第3次の戦略となっておりますが、その法律に基づいて国家戦略というものを今、改定しようとしています。法律の中では、国だけではなくて、地方公共団体、都道府県や市町村が地域版の保全戦略を作りましょう、生物多様性戦略を作って下さい、ということを推奨しています。例えばそういう手引きを作って、自治体に働きかけたり、いろいろな会議の場で働きかけたりということをさせていただいております。

それから次に事業者ですが、特に企業。今日このあと企業さんのお話があると思いますが、実は企業活動というのはすごく生物多様性との関わりがあるということです。一番わかりやすいのは、例えば製造業とか、まさに1次産業というのも直接自然と関わり合いますが、そうでない業種でも、実はどこかで生物多様性と関わっているということがあります。それをいわゆる社会貢献として、例えば社員の方が植林をする、あるいは寄付をするというのものもあるかもしれませんが、日頃の企業活動の中で、例えば材料の調達のところから生物多様性に配慮するにはどうしたらいいのか、というようなことを考えていただくきっかけの「民間参画ガイドライン」というものをこの8月に作りました。これはNGOの方にも入っていただき、企業さんにも入っていただき、学識経験者の方にも入っていただいてみんなで議論しながら作ったものが、民間参画ガイドラインというものです。

さらに教育機関です。文科省にも協議をしながら働きかけて、学校教育の中に入力込んでいくのか、という部分をやってありますが、なかなか今の学校の状況というものが難しい状況にあります。先生方の中には、生物多様性というものに関心をもっていただいて、自分の勤めている学校で反映させていきたいという先生方もいらっしゃいます。まさにこういう場でもって、どうして広めていっていいのか、ということを考えていっていただければと思います。

それから国民各層への働きかけということで、子ども、青年、サラリーマン、消費者、高齢者、いろいろな切り口でいろいろな人が生物多様性に何らかの関心を持っていただく。全く関心がないという方ももちろんいらっしゃいますが、そこをちょっときっかけをつかんで、例えば今あなたが食べているもの、着ているもの、吸っている空気、そういうところからアプローチすることによって、そういうことだったのかと気づいていただく、気づき、というものがあるのではないかと思います。

今日最後にお話したいのは、“壁を越える”というテーマにしました。生物や科学に縁遠い人々へのアプローチです。つまり、こういう場に来られている方は、きっと「生物多様性」という今

年のテーマを見て、何だろうとか、面白そうだなとか、自分との関わりがあるな、ということでこのミーティングに参加されたのだと思いますが、本当に伝えなきゃいけない層というのか、もっとこれを社会の中で浸透させていく、主流化させていくということについては、全く関心の無い人に対して、どのように伝えるのか、ということが重要だと思います。私もそうでしたが、関心のある人に対して伝えるというのは、ある意味楽といえますが、やはり同じ問題意識を持っている人ですので、話しやすいということがあると思いますが、そうでない方にはどうしても自分から壁を作ってしまうということがあると思います。バカの壁という本がありましたが、むしろ苦手だけれど、全く関心のない人たちにもアプローチして、まさに裾野を広げていくこと。多様性というのは、実は自分に求められているのではないのかなと、感じます。自ら同じような興味を持った人に、アプローチしていくだけではなくて、人間も多様ですから、もっと多様な人にアプローチしていくということが大事ではないかということ。これを私からの今日の問題提起とさせていただきます、私の話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

司会(中野)：

鳥居さん、どうもありがとございました。温暖化だと、CO2 が温室効果ガスという敵がはっきりしているから取り組みやすいですが、生物多様性はなかなか何をどうしたらどうなるんだというのが見えにくくて、難しいことかもしれません。本当におっしゃっていたように、息を吸っているこの空気も、着ているものや食べるものも、みんな自然の恵みでできていて、それが急速に今失われていて、まずいことになっているということだと思います。

次のゲストは、日経エコロジーの藤田さんです。企業で、生物多様性を少しでもかじっていて、藤田さんを知らない人はモグリというくらい凄い人ですよ。僕も会社で生物多様性の大切さを社内で広めるためのレポート作成やセミナーをしますが、全部タネ本はこの「生物多様性読本」。ここからいただいています。本当に早くからこのテーマを中心に、特に企業と生物多様性の関わり、ビジネスとの関わりということで、多くの取材、いろいろな研究の成果を使って記事を書いて下さっていて、僕は本当にありがたいなと思っています。今日はその現場から、企業は生物多様性はどう取り組んでいるかということをお聞かせいただけると、楽しみにしております。では、藤田さんよろしくお願いたします。

企業は生物多様性に取り組んでいるか？

日経 BP 社 日経エコロジー編集 藤田 香氏

皆さん、こんにちは。日経エコロジーの藤田です。今日はよろしくお願いたします。私はこの清里ミーティング、実は2回目の参加です。1回目は5年前に参加しました。その時は日経エコロジーにいましたが、その前にナショナルジオグラフィック日本版という雑誌にありまして、そちらの雑誌は、バリバリ自然とか冒険とか、そういう現場での話を写真と科学をベースにして報道するような、そういう雑誌でした。日経エコロジーに移ったのですが、エコロジーとつくから生態系かなと思っていたら、こちらはなんと企業の環境部の人を読むような雑誌でして、生物多様性をどのくらいみんなわかってくれるかなと思っていたら、ISO だったり、廃棄物処理とか、そういう話が中心で、生態系や生物多様性と私が言っても、あまり企業の方もピンときて下さっていないような時代でした。ただ、この5年間で状況はずいぶん変わりました。今、企業はけっこう生物多様性といろいろ言っていますが、「何でなの？」と皆さんも思うかと思います。それから今日ご参加の NGO の方々や教育関係者にとって、企業とどういう接点があるのかということをお知りになりたいかと思しますので、その点についてお話ししたいと思います。

まず、企業で最近いろいろ動きがあります。企業とか経済団体では、例えば今年だけでも、この3月に日本経団連が「生物多様性宣言」というものを出しました。これは経営者が自ら陣頭指揮をとって、生物多様性の保全や、持続可能な利用を頑張らせて下さ

いねというようなことが書き込まれています。それから地方の経済団体で、滋賀経済同友会というところ、ここは琵琶湖を擁している中小企業が入っているものですから、4月に「琵琶湖いきものイニシアティブ宣言」というものを出しました。また個々の企業でも、トヨタ自動車、リコー、鹿島などが、「生物多様性ガイドライン」

「生物多様性方針」を続々と出し始めています。

先ほど鳥居様からもお話がありましたが、環境省でもこういう民間企業が生物多様性に取り組んだらいいかという指針を示した「生物多様性民間参画ガイドライン」というものを、今年の8月に策定されています。地方公共団体でも、千葉県、兵庫県、愛知県などが自分の県の「生物多様性戦略」というものを作られています。

では、企業がなぜ生物多様性なのか？5年前から社会貢献活動のようなことで生物多様性に取り組むということはありません。例えば自然系や環境系の NGO に寄付をしたり、週末に社員の方がボランティアで植林活動に行ったり、そんなことはやっています



た。それと今はどう違うのでしょうか？実は企業の取り組みは、この5年間でガラリと変わっています。社会貢献だった時代から、今は本業で生物多様性に取り組みなければいけないような時代に変わっています。

本業というのは何を指すのかと言いますと、かつて本業といえば、企業にとってはいろいろな環境法があるわけです。モノを作ると大気も水も土壌も汚すということで、環境省の方で環境法というものが50も100もあるわけで、これらに則って、企業の皆さんは環境規制をクリアしながら生産活動をしていました。これはもともとは公害対策から出てきたものなのですね。ですから生産活動の下流でその副産物として出てきたものが、生態系や人体に被害を及ぼさないように、という取り組みでした。ところが、最近の本業での生物多様性という、これを指しません。モノを作るときに、原材料が最終製品になるまでずっとサプライチェーンが長いことあるわけですが、例えば携帯電話であれば鉱物資源を採掘して作っていき、家であれば木材を調達して作る、この下流ではなくて上流の原材料調達のところで、生物多様性をちゃんと配慮して原材料を調達しましょうというのが、企業の皆さんが取り組み始められている新しい動きです。

なぜこのようになってきたかという、まず一つは、法律違反のリスクというものがここ5年くらいで出てきました。例えば家具や家などによく使われている南洋のラミン材という木材ですが、これがワシントン条約で規制がかかるようになりました。それから環境法にグリーン購入法というものがある、国や自治体や企業が環境配慮製品の購入を促進するような法律なのですが、これが2006年4月に改正されて、例えば紙や文房具や家具などの木材製品を購入するときに、ちゃんとその木が合法である証明をつけて購入して下さいということが改正されました。合法性を証明するということはつまり、例えばその国、インドネシアとかマレーシアで違法に伐採されていない、原生林とかそういうものではないということを証明しなければいけないものです。それは生態系に配慮しているということを意味します。それから外来生物法が2005年6月に施行されました。それによって、例えば特定外来生物に指定されていたような動植物を輸入したり、飼育したり、勝手に捨てたりすれば、法人の場合は1億円という罰則規定がかかることになってきて、企業としては、法律違反のリスクというものがすごく増えてしまいました。

では、こういう法律に関わるのは特殊な企業だけなのでしょうか？と思われるかもしれませんが、そうではなくて、どんな企業も必ず生物資源と関係があります。生物資源を使っているか、あるいは生物資源に負荷をかけて原材料を調達しています。例えば製紙メーカー、住宅メーカー、家具メーカーであれば、先程のように森林資源を使っていますし、あとは小売スーパー、イオンやヨーカドーのようなスーパー、食品メーカーとか、農業水産業関係でも、農林水産資源を使っているいろいろな販売しているわけです。電気電子機器、例えば携帯電話やパソコンなどは生物資源と全然関係ないじゃないかと思われると思いますが、鉱物資源のレアメタルを使っています、それが豊富な所というのは、何故か知らないですが熱帯雨林の大体ど真ん中だったりするわけですね。そ

うすると、熱帯雨林を伐採して採掘に行くということになって、そういう伐採をしてまで採っているの？というようなNGOの批判に相当さらされることになります。それから医薬品や化粧品などは熱帯雨林の微生物や遺伝子資源を使って作っている場合もあります。

そういうことで企業にとって生物多様性を守らないと、まず一つは法律違反のリスクが出てきたということ、それから原材料を持続可能に調達できなくなってくる、資源を調達できないということですね。あるいは法律に違反してなくても、先程のようにNGOや消費者団体からの評判が悪くなったりブランド価値が下がったりというふうに、評判リスクにさらされるようになってきて、結局は持続可能な企業活動ができないというような時代になってきました。つまり経営者としては経営リスクにさらされるというように変わってきました。

ここから一つ具体例を紹介しようと思います。今年、セイヨウミツバチが大量失踪して大騒ぎになりました。春頃に大騒ぎしてマスコミもたくさん書いていたと思うのですが、実はセイヨウミツバチは、スイカやメロンやイチゴを受粉してくれるハチで、それも西洋とつくだけあって外来種です。同じようにセイヨウオオマルハナバチ、こちらはトマトやナスを受粉してくれています。こちらの外来種の方は、環境省で特定外来生物に指定されています。というのも、このハチが入ってきたのは1991年頃で、それまでホルモン剤でトマトやナスは受粉していたのですが、農家の人がとても大変で労力がかかる。それでこのハチを導入することで、ハチを飛ばせば省力化できるし、それから受粉してくれたトマトが凄くおいしくなるのですね。桃太郎のようなジューシーな美味しいトマトができるということで、一気に日本に入ってきたのですが、ハウスから逃げたハチ、生態系をかく乱するようになった。在来のハチを追い詰めたり、あるいはハチに蜜を依存していた植物生態系が破壊されたりということで、2006年にセイヨウオオマルハナバチというのは外来生物法で規制されました。その結果、このハチをずっとこの15年間使ってきた農家が、法律違反のリスクにさらされるようになりました。

この日本には在来のクロマルハナバチというのがいるのですが、何故これを使ってこなかったのかと言いますと、日本人と西洋人と似ているのですが、体が小さくて、おとなしくて、すごく受粉率が悪いらしいのですね。なかなか効率よくトマトなどを作ってくれないということで、ずっとこのセイヨウオオマルハナバチの方が使われてきたのですが、外来生物法の法律違反になるのであればということで、例えば、頑張った企業としてカゴメがあります。カゴメはトマトジュースなどで有名ですが、こくみというブランドの生鮮トマトも作っています、セイヨウオオマルハナバチが外来生物法に指定されるということが大体見えてきた時点で、いち早く、クロマルハナバチを使って、なんとか受粉率を上げてトマトを生産しようということを、ハチメーカーと相当頑張った、技術を確認しました。その結果、この技術をいろいろなトマト栽培の方が使うようになって、今ではクロマルハナバチも、まだ3~4割ですが、セイヨウオオマルハナバチに置き換わってきています。

それから、もう一つ面白い例がこのパーム油です。実は現在の植物油で一番使われているのはパーム油です。2005年に大豆油や菜種油を抜いて、世界一消費量の多い植物油になりました。パーム油はおそらく皆さんが毎日どこかで使っていると思うのですが、チョコレート、カップめん、マックで食べるようなフライドポテト、こういうところにはみんなパーム油が使われています。それから台所洗剤、洗濯用洗剤、この海綿活性剤にもパーム油が使われています。ただこのパーム油、実は生産されているのが9割がマレーシアやインドネシアで、ボルネオ島の熱帯雨林を伐採して栽培されているのです。伐採によって、ボルネオ象やオラウータンなどの絶滅危惧種が、もう完璧に生息地を分断され、生息地を行き来できなくなって、相当数を減らしています。

洗剤では、サラヤ株式会社、ヤシノミ洗剤、有名なところではライオンのトップという洗剤、私もよく使いますが、そこも界面活性剤にパーム油を使っています。そのことを知った消費者やNGOから、とにかく熱帯雨林の破壊につながるから生産をやめてほしいという抗議が、サラヤなどには殺到して、一時期それこそ不買運動が起きるのではないかと思うくらいの危機感をサラヤという会社は持たれました。この会社が取った対応は、そういう評判リスクのマイナスを何とかプラスに変えられないかということで、まずは社長がすぐにボルネオ島に視察に行き、それから現地の政府と一緒にトラストのNGOを作って、パーム農園に全部進出されないように土地を買い上げて、生きものの緑の回廊を作ったり、アニマルパスウェイのような川を渡る吊り橋を作ったりというような活動をされています。それから製品の売り上げの1%をボルネオの熱帯雨林を保全することに使っていて、それをパッケージにも明記しています。

リスクではなくてむしろ生物多様性配慮を前面に打ち出してそれを逆に商機にしよう、チャンスにできるのではないかという動きもいろいろ出てきています。例えば最近お聞きになっているかと思いますが、FSC認証の紙や木材製品についているマークを見たことのある方もおそらくいらっしゃるのではないかと思います。それから喫茶店に行くと、レインフォレスト・アライアンス認証のコーヒーと時々書いてあったりしますよね。そういう第三者によって、生物多様性に配慮していますよという印象を受けるような製品が少しずつですが出てきています。

イオンや生協の共同購入などでは、MSC認証のお魚を販売しています。このMSC認証というのは海の生態系に配慮して、持続可能な漁業で獲っていますよということを第三者が認証するというような制度で、少しずつですが日本にも入ってきています。それから先程言った、紙や家具ではFSC認証というものも相当出回り始めています。

コーヒーではこのレインフォレスト・アライアンスコーヒー。UCCが2003年から発売を始めましたが、2008年には800トンに伸びて、けっこうな伸びだとおっしゃっていました。スターバックスも、別のタイプのサステナブル・コーヒーというのを出しています。また、今年の7月にリプトン紅茶が、やはりレインフォレスト・アライアンスのリプトン紅茶というのを出しました。このレインフォレスト・アライアンスというのは、緑のカエルマ

ークが特徴ですが、ユニリーバによれば、2015年までにリプトンイエローベルの紅茶は全てレインフォレスト・アライアンス認証の茶葉に変えますと書いてあります。一応ユニリーバとしてはそれほどの意気込みをもって、この認証の紅茶に変えていこうと思っているようです。

この他、有名なところでは、兵庫県豊岡市のコウノトリ米というのを皆さんもお聞きになったことがあると思いますが、官民一体のコウノトリを復帰させる活動では、復帰させるためには無農薬あるいは減農薬の栽培の田んぼにしなくてははいけないということで、地元の農家の方はやはり手間がかかりますので相当涙ぐましい努力をして、最初誰も理解をして下さらなかったそうです。ところが、だんだんコウノトリが戻ってくるようになると、農家の方々も、今日うちの田んぼにコウノトリが降りた、ということとを競うようになったらしくて、農薬が無くて、環境に配慮している良い田んぼかどうかは、コウノトリが決めてくれるということとを、いみじくも農家の方がおっしゃってありました。この米はすごくて、2年間で販売が2倍に増えています。

生物多様性は田舎や熱帯雨林みたいな遠いところの話かというところでもなくて、都会でもいろいろあります。例えば芝浦アイランドの高層マンションは、生物多様性に配慮したマンションというふうに言われています。何をやったかというところ、三井不動産が開発、施工は鹿島ですが、東京の運河というのは今まではどぶ川だったのですね、臭くて、今まではだいたい運河沿いには倉庫しか並んでなくて、みんな窓や入り口は向こう側でだいたい運河に背中を向けている。そこを三井不動産がなんとか綺麗にして、おしゃれなマンションに変えたいという戦略をもって、干潟をいっぱい作って、そこどころにカニやドジョウが冬眠できたりできるような構造になっているカニパネルというものを設置しました。潮が満ちると干潟に水が入って浄化されるという形的设计にして、このマンションは相当人気を博してたくさんの方が入られたということです。

来年COP10が名古屋であります。国際社会でも企業の参画というのが、生物多様性の保全には重要だということが決議されています。まず2006年のCOP8で企業の参画を決議しています。2008年のCOP9では、ドイツ政府が議長国でしたが、「ビジネスと生物多様性イニシアチブ」というものを作りました。日本企業も9社が生物多様性に配慮しますよということで社長名でリーダーシップ宣言というのをしています。閣僚級会合でお披露目しています。来年のCOP10では、条約事務局長によれば、世界の企業のCEOを招待して、世界の環境大臣との対談を実現させて、それを閣僚級会合でお披露目したいとおっしゃっていました。ですので、企業の役割というのはこれからも大きくなっていくだろうと思われま

す。最後に、じゃあ環境教育で生物多様性のどんなことを伝えたらいいのだろう、なのですが、これまで感性で伝え、五感で自然の素晴らしさを伝えるということはいろいろやってきていると思います。それからサイエンスで伝えるということ、例えば生態系がどれだけ重要かということとを科学で伝えるということも、いろいろやってきていると思いますが、私がナショナルジオグラフィ

ックにいた時代はそういう記事をよく書いていました。一方で生態系サービスという伝え方というのがあるのかなと最近感じています。今、話したように、私たちの衣食住の全てが生物多様性とどう関わっているのかということ、例えばサプライチェーンの最上流が原材料調達の現場だとすれば、最下流が消費者であり、一般市民のところですね。その間に企業活動というのがある。でもその最上流と最下流があまりにも離れているので、みんな自分の暮らしが生物多様性と関係があるというふうには思わないわけです。だけど、ここをつないであげる。都会に暮らしながら、今日使っているこの紙や、この机は、今日着ているこの洋服は、あるいはこの家は、どこから原材料がきているの？というところを、何かこうビビッドに実感させていただけるような新しい環境教育があると、私も楽しいなと思っていて、プロの皆様にもそういうプログラムを作っていたらいいなと思っております。それで今日はいくつかの企業の事例を紹介しましたが、この本(生物

多様性読本)にはもっともっとたくさんの企業の事例が 50 くらい出てきますので、ご興味がありましたら手に取ってみてください。ご静聴ありがとうございました。

司会(中野) :

藤田さんどうもありがとうございます。この「生物多様性読本」、本当にぎっしり情報満載です。最後に提案してくださいましたね、なかなかわかりにくい生物多様性。あらゆる商品、サービス、一番上流に行ったら何があるの？ということ。その辺をわかりやすく環境教育で展開してくれると、もっと皆が生物多様性と無縁じゃないということがわかる、ということ提案して下さいました。ありがとうございます。

3 人目は日本野鳥の会の安西さんです。安西さんは、やはり自然の現場でずっとインタープリターなど、活躍してきた方です。

生物多様性と環境教育

(社)日本環境教育フォーラム理事 / (財)日本野鳥の会 安西英明

まずもって皆様の貴重なお時間を拝借いたしますことを感謝申し上げます。

私は、生物多様性に関する資料を以下 4 つお手元に用意させていただきました。

日本野鳥の会の会報「野鳥」(生物多様性特集の号)

「マナーを守ってバードウォッチングを楽しもう」パンフ

「ヒナを拾わないでキャンペーン」ポスター

私が書いた「野鳥 eco 図鑑」という本からの抜粋

それでは少し資料の説明から参ります。COP10 の話がございましたが、生物多様性条約について、日本野鳥の会の会報「野鳥」には、COP10 をめぐる日本、そして世界の動きというものがございます。そこに生物多様性条約の本質的なところが触れられていて、包括性にあるということが書いてあります。ESD も同じでございます、文明的に細分化してきたことの反省で、総合性とか包括化みたいなことが言われて、ESD もそういう概念なのですが、生物多様性というのは言葉的にも、例えば条約的にもラムサール条約とかワシントン条約とかいろいろ生きものを守るという条約がそれぞれあったわけです。それらを包括すべく、生物多様性という言葉や条約ができていうことで、生物多様性条約の本質については包括性にあるみたいなことがインタビューの中で触れられています。条約の目的は鳥居さんがお話しされたので省略いたします。この資料の中には、日本の生物多様性の現状ということで、環境省の施策である国家戦略に見る 3 つの危機について触れています。それから今日は NGO の立場ということもありましたので、WWF ジャパンや日本自然保護協会など、たくさんの NGO が生物多様性に向けて頑張っておられますが、

本野鳥の会としての生物多様性保全の取り組みといったことが、ちらちらと出ています。詳しいところは是非お読みいただければ幸いです。

2 つ目が「マナーを守ってバードウォッチングを楽しもう」パンフレットは、やさしいきもち、というフィールドマナーでございます。これも読んでいただくこととして、解説を加えさせていただきますが、日本野鳥の会の創設は 1934 年です。昭和 9 年、鳥という当時はせいぜい獲って飼うとか、食べるとかいう時代です。野の鳥に親しむという平安文化みたいなものはあったのですが、我々一般庶民は獲って食べたり、せいぜい少し余裕があれば飼ったりという時代に、あるがままに親しむべきだということで、野の鳥、野鳥という言葉と、野鳥の会を作ったのが中西悟堂だと言われてます。生物多様性あるいは環境教育の取り組みとしては例えば、獲る、食べる、養う、育てる、いろいろなアプローチがあってよしいかと思いますが、私たち日本野鳥の会という立場からすると、あるがままに親しむところから、あるがままを知る、そしてあるがままを損なわないように守っていこう、というような運動として続けて今に至っております。

そもそも私がこの道に入った数十年前は、まず「親しむ」という人を増やそう。親しむ人が増えれば、「知る」人が増えるだろう。いろいろな人が知ってくると、それが「守る」という行動に結び



つくだろうということで、日本野鳥の会とか日本自然保護協会では、当時は自然保護教育と言っていた「親しむ」「知る」「守る」という3つの目標設定を概念的には考えていました。親しむ人を増やす中で、知っている人を増やす、その中から守っていく、行動していく人を増やしていこう、ということを経年やっていきます。

その後は1975年にベオグラード憲章が採択されて、そこでは6つの目的があげられています。関心「知る」というところについて、ベオグラード憲章においては「認識」「知識」「態度」「技能」「評価能力」と、私たちが言っていた「守る」というのは「参加」という言葉で6つの目標設定にされています。

この「親しむ」「知る」「守る」という3つのステップで考えると、私は今の環境教育や多様性に少し混乱しているなという問題意識を持っています。その中の1つの現状分析からすると、まず日本野鳥の会としては野鳥や自然のあるがままに親しむ人を増やして、知る人を増やして、実際に守っていける人を増やそうということをしていたのですが、現状はどうかというと、「守る」

「親しむ」「知る」ということで、「守る」から始まってしまっています。それは時代の緊急性や社会の趨勢という意味で、やむないこともあります。しかし、「守る」というところから、突然メニューがドンとくるわけです。いろいろなNGOや企業や国さえもどんどん施策としてメニューを提示しています。ですが、本当にそれでいいのかな？というところについては、あるがままを知ろうということやずっとやってきて、あるがままがいかにかわかっていないか、よくわかっているつもりなので、この「守る」から入っていった時の問題点を、少しお話できたらと思います。

もう一つは個別化の反省から、総合化とか包括化というのは良い流れだと思います。多様性もESDも同じ意味で包括的だという概念としてはいいのですが、包括的だからこそ何かややこしく難しい、そこに持ってきているいろいろな主体やメニューが関わってきたので、環境教育を進めている側でも結構な混乱や誤解があったりするのではないかと、いうふうに思います。例えば、私はもう40年間スズメやカラスを調べていますが、スズメやカラスがわかっていない人がいかに多いかを、よくわかっています。スズメが減った、カラスが増えたなどというマスコミレベルの嘘八百に踊って、それを環境教育の軸にしてプログラムを組んだりしている人がどうも見受けられるように思うわけです。

では、「知る」とはということなのかについてですが、資料の「ヒナを拾わないでキャンペーン」ポスターをご覧ください。これは10年以上続けているキャンペーンです。鳥の繁殖期というのは、春になって新芽が出てきて、新芽を餌に虫が活動を始めると、その虫を餌に小鳥達が子育てに入ります。スズメですら、春夏しか繁殖しないのは何故かという、たくさんの虫が必要だからです。虫のたくさんいる時期になって小鳥の繁殖が始まると、ヒナが無事巣立ちます。巣立ち直後はボケっとしています。鳥と哺乳類は学習能力があるので、例えばだんだん人に追われて逃げるようになっていくのですが、巣立ち直後の子どもというのは、スズメで約10日間、普通の小鳥で約1ヶ月、カラスはよくわかっていますが半年~1年くらい、親にくっついていて、自ら、これは

食べられるとか、これは危ないという学習をしながら自立していく力を持っています。学習しながら技術を持っていきます。その学習の前の段階、巣立った段階でボケっとしている時に、かわいそうだと、迷子だと言って、持ってきてしまう人がたくさんいます。「親しむ」「知る」「守る」から言うと、これは「守る」になりますね。野鳥のヒナが迷子だ、かわいそうだと手を出す、いいのでしょうか？ということですね。それは親が見守っているべき段階なわけです。よく電話で、「ヒナが落ちていて拾ったので取りに来い」と怒られるので言うのですが、人が見ていると親の鳥は警戒して来ないです。だから鳥の子どもが学習して自立していく過程を知らないと、ボケっとしている赤ちゃんが迷子のように見えてしまうのです。それで、やさしい気持ちで何とかしてあげようということが悲劇を生んで、結局「誘拐」してしまうのです。誘拐した上で、動物病院に持って行ってどうにもできません。優しい気持ちで「誘拐」になって混乱になっているという事例が、ずっと続きます。ポスターの裏に、手を出す前に知る、ヒナがなぜすぐに巣立つのか、ということが書いてあります。まさに私たちがあるがままから学んできたことを還元したいと思っているところが書いてあります。

ちなみにいつもやっているクイズですが、スズメは何個の卵を産むか知っていますか？わかりません、5個くらい産むのではないかと図鑑には書いてありますが、私は「スズメの少子化」という本を書いていて、もっと少子化していると思います。仮に5個生んだとします。その5個目から抱卵に入って、何日でヒナが育つと思いますか？約2週間ですね。わずか2週間で親と同じサイズになって羽根が生え揃って巣立つわけです。わずか2週間です。これを女性の方々、お母様方によく講演で話すと、楽ねとかいいわねえと言っていますが、この2週間でどれだけ大変か！その2週間で虫を運ぶ回数を調べた佐野先生によると、なんと4,200回でした。1日平均300回、お父さんお母さんが虫を見つけて捕まえて、運んでヒナに与えて、ウンチの世話や安全管理までやるわけです。そうやって2週間で巣立つということを考えてみると、小鳥の存在はいかに虫に支えられているか、ということがわかるかだと思います。

毎年さえずって、ペアを作って、子育てして、どんどん子どもが生産されるということは、いかに生存率が低いかということの裏返しでもあります。ここでスズメの寿命分かる方？知っているようで知らないですね。まだわかっていません。平均寿命で1年3ヶ月というデータがあります。飼っている例で14年生きたメスが2羽くらいいるので、おそらく飼育すると10年20年は生きる能力を持っていると思いますが、若造のほとんどが冬の間に死にますので、結局は平均寿命からすると、ものすごく短い。ツバメも1.1ヶ月といういろいろなデータがありますが、私が一番知っているツバメのデータですと、平均寿命が0.9年ですね。

要するに残るのが少ないというのが自然の現実なのですが、私たちは何かこう、生き延びて当たり前という文明からスタートしているんですね。そこから問題を考えたりするから、全然根本に至っていないという気がするのですが、生き延びて当たり前というのは地球の常識だ、ということは少し本に書きました。私た

ちは衣食住があって当たり前とか、生き延びて当たり前とか、もっとひどいことを言う人だと、景気が良くなって当たり前くらいに思っていますからね。これがどれだけ素晴らしいことか、また危ういことか、ということを考えないと、原点が見られないのかなというふうに考える次第です。

その手のことが「野鳥 eco 図鑑」に書いていたことの一部です。この後に生物多様性とは何か、ESD とは何か、日本野鳥の会の取り組みなど、いろいろ続くのですが、生物多様性の基礎の部分だけコピーしてきました。「エコライフの基礎」というタイトルで、自然体験活動推進協議会(CONE)の共通カリキュラムに「2. 自然の理解」というのがありますが、そこを私が担当させてもらったので、そのさわりの部分を紹介しています。1番は「地球とヒトの歴史」ということで、命とか、あるいはつながりですね。様々なつながりということを考える時に、時間の軸が必要だろうということで、時間軸から見て、私たちが今どこにいてどこに向かおうとするのか、簡単に書いてあります。

2番が空間軸です。私たちの周りに視野を広げてみるとどうなっているかということで、「自然のしくみ」というのを、「共存と循環」という言い方にしています。私は1981年から生物多様性を「いのちのさまざまなつながり」という言葉でずっと言っているのですが、それでもなかなか包括的総合的でわかりにくいかもしれませんので、これから少し補足いたします。その裏面のページに「私たちは何者か?」「私たちはどこからどこへ?」ということを書いてありますが、これが時間軸や空間軸で考えたところの補足でございます。例えば「私たちは何者か?」という中で、ヒトという分類は皆様わかりましょうか? まず生きものというのは、どこで分類されるかですが、環境教育でいうと例えば植物とか鳥の名前を見つけて、それをわかることが大事だと思っている方がいると思うのですが、分類の基本は「種」ではないのです。「界」と言います。動物界とか植物界といいますが、私たちは哺乳類ですが、どの界にいるかという動物界です。動物界と植物界と菌界くらいは知っておいた方がいいと思いますが、あらゆる生物をだいたい5つの界に分けていて、我々は動物界という「消費者」のレベルにいます。それはなぜ消費者かという、我々動物、動くということは、自らは食べないと生きていけないから、動く物、動物ということで、食べるという意味の消費者です。

動物界とは全然違うのが植物界です。植物界はこの太陽光線で栄養を作れることから「生産者」と言われていまして、生産者のもとに全ての動物界があるわけです。生産者と動物界のこのバランス、生産消費のバランスだけで、この持続可能な地球の我々を含めた命の仕組みがあるわけではなくて、もう一つ菌界というところに「分解者」がいます。それがとても大事な役割をしているのですが、ともするとそこがちよっと抜け落ちます。「エコライフの基礎」のところに、生産、消費、分解(廃棄)の循環をピラミッドのような簡単な模式図で書いてございます。よくこれは理科の勉強でやりますが、これで人がどこに位置するか、分解者がどういう役割を果たしているか、あるいは星とのつながりみたいなこと、我々の動物であるところの全ての元なる生産者を養う太陽というところも含めて、いろいろ繋がりを考えたいと思うわけです。

例えば私、天文講座やキノコ講座など、いろいろ好きでやるのですが、秋になるとよくキノコ講座をします。そうすると、これは食べられますか?という、そんな話ばかりですね。それも先程の話ではなくて、生態系サービスといった意味では良いアプローチなのですが、キノコの何が大事かという、これですよね。硬い菌類というのがあって初めて、この材質が分解されるわけで、生産と消費と廃棄分解という中の「分解者」としてキノコがなければ、木材はいつまでたっても木材なわけですね。あるいはバクテリアがいるから落ち葉がこの時期積もっても、落ち葉だらけになることはない。「分解者」がいるということ、持続可能な自然のしくみの中ではしっかり考えるべきかなあと思っております。

私たちのお腹の中にも分解者がいっぱいいますね。腸内細菌の話を書こうと思ったら書けなかったです、わかっていないから。実は我々が葉っぱのサラダを食べられるのは、お腹の中にいっぱい腸内細菌がいるからです。命が大事だ!という人は多いのですが、お腹の中の細菌のことを考えたことがありますか?ということですよ。腸内細菌は、総量としては何兆といえるそうです。腸内細菌がいてくれるから、我々は葉っぱのサラダを食べられるわけですが、何種類くらいの腸内細菌がどういう役割で、何がどこでどこまで分解しているかは、わかっていないそうです。

そういった中で考えた時、「私たちは何者か?」というところを少し補足します。我々は、動物界の中の脊椎動物門の哺乳類の中の霊長目という、約200種いるサルの中のヒト科ホモ属の中にホモ・サピエンスとしております。ホモエレクタスとか、ホモなんとかがいっぱいいたわけですが、今はただ一種のホモ・サピエンスです。種とは何か、というのもよくわからないで生物多様性を語っている人がたくさんいるので、困っているところです。アヒルとマガモが同じ種ってわかりますか? 犬は全部1種ってわかりますか? 交雑可能性という単位で種と言っているのですが、その辺も例えば、今、約200万種の生物が地球上にいますと言われているが、熱帯の虫だけで3,000万とも言われていますから、何種類かさえよくわかってないという事態の中で、私たちはどこからどこへ向かうのか、ということも書いてございます。

それでは、私の得意なスズメとカラスをいかにわかっていないか、というお話を1つずつします。スズメが水を飲むところを見たことありますか? スズメが水を飲むとき、必ず首を上に向けます。我々がゴクンと飲めるのは実は哺乳類だからでして、おっぱいを吸うために得た哺乳類の能力です。スズメが水を飲むときはゴクンとできません。カラスがわかってない人が多くて、カラスの子別れがわかっていないのです。スズメで約1週間~10日、シジュウカラなどの小鳥で約1ヶ月、カラスは半年だったり1年だったりするのですが、少なくともペアが一生涯続くということはわかってきたので、夕方2羽でつるんでいたら、カラスの夫婦だと思ってやって下さい。

私がこれまで言ってきたことを、結びの言葉にいたします。最初にフォーラムで言ったことは、地球は危ないという環境教育はまずやめよう、ということです。地球は危ないよりも先に、いかに不思議か、いかに凄いか、楽しいか、面白いか、美しいか、ということから伝えていこうとお話してきました。それから、持

続可能な自然の素晴らしさと共に厳しさを知るべきだと。それと同時に、文明のありがたさと共に、危うさを感じよう。またこの資料には、日ごろ見過ごしている出会いやドラマに気づいて、あるがままを楽しむことで本質を知ろう。本質を知った上でエネルギー消費を減らしたいということを書いています。

最後は、あるがままに親しむ、ということ。あるがままの楽しみの中で、今、私がつくづく思うのは、東京の街中と違って、ここ清里は登ってくる最中、紅葉がすごくよかったです。あるがままの季節の懐かしさと確かさ。私たちが会おう命というのは、実は生き延びた一部でしかないわけです。我々が景色と呼んでいる中に、彼らの住処があって、先輩としての命がたくさん暮らしている。我々は景色と言っただけ眺めているだけですが、景色というのはいろいろな先輩達の住処であります。そこには日々いろいろなドラマが展開していて、その様々となつなかり、というところに目を向けていただくことは、例えば皆さんの家のお庭でもできると思います。私は自宅のコケを調べてみました。5種類あって、まだわからないです。自宅でクモを調べたら23種類いました。自慢しようと思ったら、クモの先生に「うちには35種類いるよ」と

言われてがっかりしました。そうやっていつでもどこでも、楽しめるはず。みなさんの身の回り、通勤通学、買い物、散歩の途中でも、命のさまざまへつなかりというものは見えないのだけれど、在る、感じるができるものだと思いますので、命のさまざまとなつなかりを感じていただくことが、環境教育の第一歩かなと感じております。

司会(中野) :

安西さんどうもありがとうございました。面白かったですね。自然に関する知識がぎっしり詰まっていた、もっともっと聞きたくなりました。スズメのことも知らなかったですし、生物多様性も菌類ですね。最初、キンカイとは何かと思いましたが、分解者としての菌界のお話でした。

ここまで行政、企業、NPO・NGO、3つの立場から今、生物多様性の問題にどんなふうに取り組んで、何が起きているのかいろいろお話を聞きました。この後、前半を締めくくる前に、周りの方とも少しお話を、感想や質問などをいただきたいと思います。

Q&A タイム

質問1：来年のCOP10で具体的にどんな目標(数値目標とか)が決まりそうですか？

高沢達也さん(コスモ石油)より

回答者：環境省生物多様性地球戦略企画室長：鳥居敏男氏

ご質問ありがとうございます。COP10での主要な議題というのはいくつかあるのですが、ご質問に沿った議題といえますのは、ポスト2010年目標と言っています。COP6、2002年にオランダのハーグで生物多様性条約2010年目標というのが採択されました。それはどういうものかと言うと、2010年までに生物多様性の損失速度を顕著に減少させるというミッションが採択されました。これを次のCOP10では、達成状況の評価をして、さらに次のポスト2010年目標というのを定めるということになってございます。この目標は非常に曖昧であるとか、わかりづらいとか、どうやって測るのか、という問題提起があります。またこの評価は実はGB0(Global Biodiversity Outlook)というのがありまして、今、GB02というのが出ております。それは生物多様性条約事務局が各国から出されるデータを基に、生物多様性の状況は世界中でどうなっているのかという評価をしています。来年5月を目途に今度はGB03というのが発表されることになってございますが、そのドラフトというのが一部ネットなどで発表されております。それによりますと2010年までの達成はもうほぼ無理ということがはっきり言われております。なおかつ次の目標の方向性として、これはGB0が言っているわけではないのですが、前回のCOPで「野心的でなおかつ現実的」「測定可能でわかりやすい」「行動志向的で前向きに取り組めそう」という非常に難しい注文がついてございます。ただ現在の2010年目標というのが非常にわかりにくいとか、達成状況

をどうやって測るのだという課題があって、次の名古屋の会議では、これも1つの大きな課題になっています。日本も議長国ということで、是非提案をしようということで、政府でもいろいろポスト2010年目標に対する日本からの提案の素案というものをパブリックコメントに付していますので、環境省HPなどで見ていただけますと、10月30日から約1ヶ月間のパブリックコメントをやっております。それによりますと、ポスト2010年目標では、まず2050年までの中長期目標というものを盛り込んでいます。その次に2020年までの短期目標、それからそれを達成するための個別の目標というものを作っております。

2050年までの中長期目標では、人と自然の共生を進めながら生物多様性の損失を2050年までに止めて、現状より豊かなものにしましょうと、これも非常に抽象的ですが、そういう案に今なっています。つまり先ほどのGB03でも言われていますが、今でも生物多様性の損失というのはまだまだ、むしろ加速していると言われておりますが、それをどこかで止めて、今度は上向きな状態にして、現状よりも(現状というのは来年のGB03が出る2010年を想定しています)上向きに回復させていくという目標を設定しています。じゃあそれをどうやって測るのだとか、そもそも種というものは一旦絶滅したら二度と回復しないのに豊かになるのかとか、そういったこともあるかと思えます。ある意味確かに抽象的なのですが、例えば、森林を回復させることによる、あるいは絶滅の恐れのある種の保護増殖を一生懸命やるということで少しずつ生態系のレベル、それから種のレベル、遺伝子のレベル、そういったものでトータルに考えていって2010年よりも豊かなものに40年かけて回復させていこうというのが中長期目標でございます。

短期目標は、また 9 項目くらいありますし、さらにそれを実現させるための個別の目標というのが 32 項目並んでおります。それぞれの到達を測るためのものさしになる指標が約 17 分野にわたって示されています。例えば、レッドリストに掲載されている種の数とか、保護地域の面積の総計とか、いろいろありますが、是非環境省の HP からそういう目標を見ていただければと思います。

これが今後どうなるかといいますと、日本提案はパブリックコメントを踏まえて、12 月にさらに東京でアジアの途上国も含めた国々に集まっていたいて、これに関するワークショップを開きます。途上国からの意見も踏まえまして、年末に条約事務局に提出する予定をしております。それを受けた条約事務局は、来年 5 月にケニアのナイロビで COP10 の準備会合のようなものがあるのですが、そこに条約事務局としての案を提示して議論をして、そして COP10 につなげていくというものです。

質問 2：自然保護と生物多様性の保全とは、どう違うのですか？

司会者 中野民夫より

回答者：JEEF 理事/(財)日本野鳥の会：安西英明

例えば、さっきそこにたくさん小鳥の群れがいましたが、地球上の鳥類、鳥って約 1 万種類いるのですが、その 5 千種類以上が小鳥です。スズメ目という、小さい系の鳥が多いですね。小鳥の中に嘴が 2 パターンあって、ピンセット型とペンチ型と言っていますが、どちらの嘴が地球上の小鳥の中で多いかというところ、ほとんど小鳥は嘴がピンセット型なのです。これがとても大事で、持続可能な自然の仕組みを話すときによく申し上げるのですが、小鳥は主に虫を食べていますので、虫をつまみやすいピンセット型嘴が多いのです。だけど、今だんだん虫がいなくなってきた、彼らはどうするかと言うと、木の実を食べるわけですが、木の実を食べる時に、ペンチ型は硬い種の部分はかじってしましますが、ピンセット型のこの子達は丸呑みして糞で出すのです。だから地球上で嘴が細い小鳥が多いということは、虫の増えすぎを押さえ、植物の種の散布に役立っているというつながりがあるわけです。

私たちは最初、野鳥の保護ということで鳥を守ろうということを考えていた。鳥を守るということは、実は小鳥が守られるには、虫がたくさんいなければいけない。虫がたくさんいるには植物が大事、あるいは土壌が大事、分解者の菌類が大事、水が大事、空気が大事、ということで野鳥保護が自然の保護というふうに概念的に広がっていきました。だから自然保護だということを一時言っていたわけです。だけど、自然を守るためには、我々も自然の一部として自然と関わってきているから、環境保全をしななければいけないということで、定義の話ではなく、考え方からすると、野鳥保護から出発して、自然保護になった。それから環境保全になっていった。環境保全していく時には例えば南北問題とか、人種差別の問題とか、多文化も大事だということになって、ESD という概念が入ってきている。生物多様性も同じです。

だから自然保護と生物多様性の保全とは何が違うかというところ、

時代が違ってきて、私たちは自然保護をやっている、だんだん環境保全になった。だんだんそれが生物多様性保全なのだ、というふうに今思っているわけですが、要するにこれは、生物多様性の私は非常に難しいところだと思っております。包括性があるから難しいのです。ですが、自然保護も文化の問題も含めて多様性であり、ESD とみんなつながっているんだな、というふうな解釈の仕方をすればよしいのかなと思います。

生物多様性の中で不快動物とか、危険動物とかいるじゃないですか。それを含めてどうするのかという話は、自然保護だけだと解決できなかったわけです。逆に生物多様性というのはそれもひっくるめて考えなければいけないことなので、つまり包括的総合的に取り組もうということで、ただ、その一分野として、自然保護があるということです。

質問 3：一言で「なんで生物多様性が必要なのか、大切なのか？」をわかりやすくお聞きしたいと思います。

柴崎文一さん(明治大学)より

回答者：鳥居敏男氏

一言で私なりに、「人類が絶滅しないため」です。

回答者：藤田香氏

私も多分一緒に、地質でよく化石に、この時代にいたそれを指標とする化石を示準化石というのですが、人類が示準化石になってしまうのであれば、別にこれまで 5 度、大絶滅の危機ありましたので、絶滅していいということであれば、全然人類が特に生き延びる必要がなければ、このままでいいのだと思うのです。しかし、たぶん今の生物多様性というところの考え方の中には、やはり人類が生き延びるために生物資源とどう共存するかという考え方がすごくあるのだと思います。ですので、たぶん鳥居さんと同じ考え、答えになるのですが、「人類が絶滅しないため」ということになります。

回答者：安西英明

私は一言で言うなら、「楽しいから」ですね。いろいろなやつがいて、いろいろな格好をしていて、それぞれ生き残ってきたわけがあるわけなので、命にわけあり、暮らしに歴史ありということで、いろいろな奴がいることを楽しいと思いませんか？

司会(若林)：

ありがとうございました。生物多様性は本当に奥が深いことですから、この時間だけでは理解しきれないと思いますので、これからまたちょっと 1 時間、引き続きコメンテーターの方からお話を聞いて、またみなさんからご意見を頂戴したいと思います。

前半の部分のゲストの方には、生物多様性とは何かということを中心に、ご自身の活動していることをお話いただきました。後半は、私は具体的にこう活動しています、ということを中心に各 10 分でお話いただきます。後半のゲストは、小河原孝生さん(NPO 法人生態教育センター理事長)、水野雅弘さん(Green TV Japan 代表)、湊秋作さん(やまねミュージアム館長)でございます。

< 事例紹介 > 「生物多様性 私はこう伝える」

生態教育としての解説とは

～ 自然系環境教育は、生物多様性をどのように伝えてきたのか？ ～

(社)日本環境教育フォーラム理事/NPO 法人生態教育センター 小河原孝生

皆さん、こんにちは。先程ご挨拶をしました、生態教育センターの小河原です。最初に、このような立派なホールが完成したことをお祝い申し上げたいと思います。30年前くらいになると思いますが、川嶋さんとこちらで出会って、この清里を環境教育のメッカにしようではないかと言った頃のキープ協会とは考えられないような素晴らしい施設が出来ましたね。ただ、この施設が空間としてあるだけでは意味ないですね。まさにここでこういったミーティングが開かれていること、それによってこの場が意味を持つのだろうと私はいつも思っています。この30年間、あるいはそれ以上前からこんなことを考えてきて、では実際我々は、生物多様性をどのように伝えてきたのだろうか？という、やはり少し反省を込めてレビューをしていきたいと思えます。

「生物多様性」とはそんなに難しい話ではなくて、考えてみれば別に進化生物学という、要はダーウィンの種の起源あたりから始まるわけです。それは例えば1970年代、私らの大学や高校の教科書である、培風館の「系統と進化の生物学」には、ちゃんと生物の多様性という言葉、あるいは種の多様性という言葉が当然出てくるわけです。先程、自然保護と生物多様性は違うの？という話がありましたが、自然保護というのはある意味で対症療法です。公害対策と同じで、極端に言うと、開発行為を止める行動、それを自然保護と私などは細かく見ますが、そういった自然を保護しなければいけない1970年代。

そこからさらに1980年代に入っていくと、安西さんがおっしゃったように、今度はもっと包括的に生態系そのものを保全していかなければいけない。だけど、生態系というのはもっとわかりにくい。これはシステムですから、見えません。それをもう少し見えるような形にしていこうということで、私はたぶん多様性という言葉に注目をしていったという流れがあるのだろうなと思っています。

そして、1992年生物多様性条約というものが発効するのですが、なんと時の経団連でしたが、自然保護なんかというグループで、確か生物の多様性保全戦略という1992年頃の翻訳をされています。既にそのときに日本にはそういう概念というものはしっかり入ってきているわけですね。あるいは1992年にE.O.ウィルソンが「生命の多様性」という本を出していて、1995年にはそれがこうしてしっかり翻訳されています。我々にとってはやはり、この辺がそもそものスタート地点になるのだろうと思っています。

日本ではなんと1992年よりも前、1991年にNACS-J(日本自然保護協会)さんが40周年記念大会ということで国際シンポジウ

ムを開催しております。ちゃんと小冊子もできています。1992年に現・東大の教授、武内さんという方と一緒に「環境創造・維持管理・復元技術集成ランドスケープエコロジー編」という1冊5万円くらいする本を作っていますが、その中に生物の多様性というのが明確に入っております。1992年、日本環境教育フォーラムは、日本型環境教育の提案という本を出しました。その中で唯一、人づくり編339頁の生物環境論というところに、生物の多様性とか、そういう概念が出てきます。それ以外の頁には皆無です。

1993年環境基本法ができます。3本柱の1つは生物多様性の確保というのが入っています。その年に同じようにNACS-Jさんが「かんさつからはじまる自然保護」という本を出していますが、生物多様性という言葉は確認できません。手前味噌ですが、1993年に出した「生物多様性を確保するための計画と技術」という造園系の雑誌ですが、ここは基本的な考え方、技術論などの基本はほぼここで出てきています。だけど、その後10年間、生物多様性は冬眠します。私が冬眠したわけではなくて、環境教育という分野ではほとんどこの10年、使われてきませんでした。環境省生物多様性センターができて、そして2002年に生物多様性国家戦略というものが打ち上げられ、ここでようやく日の目を見るという歴史だったのではないかと考えています。

それでは本当にどう扱ってきたのか、ということなのですが、私も含めて、名前にこだわらない自然観察会というのは、自然観察の方法論にこだわっています。“生態系の説明に個々の種名は必要ない”と言い切っています。ほとんど今でも言い切っています。それで本当に生物多様性を伝えられたのだろうか？自然の講義をする自然観察会は、どうしても目の前にある個体レベルの観察、あるいはその種の説明に終始していく。あっても自然の仕組み教室で終わってしまう。感性に訴える自然体験活動。体験を分かち合う。

日本環境教育フォーラムに戻りますと、2001年から「ティーチャーズガイド」を出されていますが、その中には一切、生物多様性という言葉は入ってきません。体系的な概念というものを伝えてきたのだろうかという、そういう反省があります。そしてこれ



は手前味噌ですが、私も 2002～2003 年この頃には多様性、そういうものが明確に入ってきています。各地の現場ではこういう流れはあったのですが、日本環境教育学会は 2007 年、2006 年と皆無ですよ。今年に入ってやっとタイトル 4 本、口頭発表です。キーワードが 3 個くらいしか出てこない、つまりそれくらい環境教育の世界でもまだまだ実は自然系は弱くて、その中でも「生物多様性」という概念を我々はしっかりと、やはり伝えてはきていなかったのではないだろうか、そういう反省にあるわけです。

そして、観察できることというのは、実は現状の追認でしかない。目の前にある物事をただ追認しているだけ。でもインタープリテーションというのは、その意味を解き明かすことです。先程の安西さんの嘴の形のお話は、まさにそういう意味を解き明かしている。でもそれが、個体・個体群の生活行動の理解、ただ、この嘴が何を食べやすいですよと終わってしまったらおしまいですね。そのことと他の生きものとの繋がり。安西さんのおっしゃった、小鳥が種子を飲み込んでお尻から出すから種子散布ができる、という繋がりの世界、そういうところへ繋がっていく、それを群集構造と言います。そうするとこれが初めて共生という概念あるいは進化適応の世界というものにつながっていくわけです。ですから、バッタのオリンピックとしてバッタがどれだけ飛んだかとか、クモの絵のイラストを見せて間違い探しをしているというだけでは、この進化適応の生物多様性には迫れなかったのではないかと考えています。

これは地球の子ども 11 月号に書いた話です。葉っぱつきのドングリが落ちていて、よく見ると、綺麗に切れていて穴が開いているところがある。今までですと、割ってみて中に虫がいて、犯人は誰だと犯人探しをするところまで普通は終わっている。これは要するに個体レベルの観察ということですね。そして、犯人は誰だと見てみると、どうもいや私ですとハイロチョッキリがいたり、いや実は私ですとコナラシギゾウムシがいたりします。ハイロチョッキリというのは、口の先端に小さな鋏をもっていて、プチプチと切って落とすのです。ただコナラシギゾウムシというのは落とせない。これはキリのように穴をあけて、そこに卵を産むというタイプですが、落とせない。落とすのがいて、なぜ落とさないのがあるのだろうか、というその疑問にたどりつく気づきのレベル。どうして落ちたかという理解をしようとする。落とす犯人は誰だ。幼虫が独占するためだと今までは言っていたのですが、実は、産む前に周りを見てから産みます。これは種の同定とか種内競争と言いますが、コナラシギゾウムシはなぜ切れないのだろうかという、この「なぜ」から始まる科学というものを書いています。コナラは防御のためにタンニンという毒素を生産します。渋皮と言うのはそのためです。それで、種間競争というものが始まるわけですが、実はコナラシギゾウムシが切れないということは、卵や幼虫はタンニンに耐えられるようになってきているという、自然選択による適応という能力をふまえてきた。結果としていろいろな種が世界中にいるわけです。そして、落ちた小枝が清掃されてしまって、東京の公園ではとても生きていけないだろうという公園管理の問題に対して、我々どう扱えばいいのだという評価のレベルがあり、虫のために私たちができることは何

だろうかという行動のレベルに入っていく。こういう様々な群集構造の世界へ入り、そして気づきから行動へという世界へ入っていく。こういったプログラムというものが、もっともっと本当は進化して作れたのではないかと思うわけです。

それを、全体像を調べていくと、実はこういった遺伝子から景観までこういう階層構造になっていて、それぞれのそのキーワードがありますが、こういった考え方というものの世界の中には実は今、我々が生きている。そして一つの物事を改正しようとするときに、この上の部分から、全体像から下位概念というのを見ていく必要もあるのではないかという具合に思っています。科学的体系化を分かち合うということで終わってしまったのは困るわけで、実際に日常の体験から得た知恵というものを、科学法則による体系化を進めていくというフィードバックが大切です。これは 2005 年に書いていますが、この体験学習の理論で概念化と言わずに、これを仮説化といった形、あれは構造科学の論理です。概念化するためには、ここに経験則を概念として法則性を見出す、そういう仕組みの中に取り込まなければいけない。ここが我々はミスしていたかなという具合に考えています。

この映像は 20 年前に山梨の早川でネイチャーキッズスクールをやっている時に、子どもたちとアレチマツヨイグサが咲くのを見ているところです。蚊にさされても必死になって見っていますが、この瞬間子どもの心は開いています。生命の感動に溢れています。ここで一言、「なぜ夜に咲くの？」と声をかけてあげると、子どもなりに考えます。ただ花が昆虫を選んでいるのだ、という概念には子どもは辿り着かないです。それはやはり我々の側がサポートしてあげなければいけない。そうすることによって、この子ども達はひとたび、自然界の中では花の方が虫を選んでいる、そういう共進化してきたのだということに気づいてしまうと、次から花を見る目が変わります。自然界を見る目が変わっていく。それは大きい生命の理解につながり、そして本当の意味の、この地球上で私たちが全ての生きもの達と棲んでいくための、未来を作る力になっていくのだらうと考えています。今、まさにここから地域へ、そして日本から世界へ、この全ての生きもの達と棲める世界というものを、我々は目指していこうではありませんか。

司会(若林) :

ありがとうございました。自然系環境教育は生物多様性をどのように伝えてきたのか、というまさにご自身の活動そのものから振り返っていただきまして、本当に短い時間でたくさんのお話をありがとうございました。

続きましては、少し視点を変えます。メディアの立場からの生物多様性の取り上げということで、水野雅弘さんにお話をいただきます。先程も簡単に紹介しましたが、Green TV Japan 代表ということで、もともとイギリスが発祥だと伺いました。まだ Green TV を見てない方も、特に年配の方はご存知ないかもしれませんが、ぜひ、その辺の背景も含めてよろしくお願ひします。

映像で伝える“生物多様性”

(株)Green TV Japan 代表 水野雅弘氏

Green TV の水野と申します。この素晴らしいホールで、また環境意識のすごく高い皆様方の前でお話をさせていただくことを大変感謝しております。限られた 10 分というお話ですので、「映像で伝える生物多様性」というテーマでこれからお話させていただきます。今ちょうど司会者の方からご質問いただきましたが、ちょうど半年ほど前、キープ協会さんにお邪魔した時、ほとんどの方が Green TV のことをご存知なかったので、1 分程だけ Green TV のご紹介をさせていただきます。

Green TV は 2006 年にイギリスで始まりまして、今はドイツと我々日本と 3 カ国が連携しながら、いわゆる映像を使って環境の問題、課題また取り組み、もしくは素晴らしさを伝えていこうということで始めております。これはインターネットの世界で、どなたでもインターネット、ブロードバンドが繋がれば、視聴することは可能ですので、ぜひご覧下さい。生物多様性に関しますと、日本におきましては、私が立ち上げた 2007 年からずっと毎週毎週コンテンツを作ってまいりまして、現在 400 本のうち、約 70~80 本は生物多様性に関わるコンテンツを配信しております。当然、海外の翻訳のものもありますし、日本のものもコンテンツとして入っております。

先程、環境省の鳥居室長からもお話がありましたが、本当にもともと Green TV の目的という目標は、いかに環境意識の無い方に伝えていくかです。映像の力を使って、世界がどうなっているのか、もしくは身近である日本の地域はどうなっているのか、という様々な現状を伝えるために行ってまいりました。この「生物多様性」に関しますと、もっと知らないです。内閣府が認知度の調査をしましたデータは、もしかしてかなり甘いのではないかと、いうほど、渋谷の町を歩いている仮に数千人に「COP10 を知っているか」という質問をしたら、ほとんどの方が知らない。知っている人は恐らく 1000 人に 1 人 2 人いるかないかではないかと思えます。来年 COP10 が日本で開催される、またそれがいかに重要な世界会議であるかということ、をご存知ない方が大半ではないかと思っております。

そんな中で Green TV としましては、これまで映像で伝えていくというコンテンツを作ってまいりましたので、エネルギーでは地球温暖化、また食の問題、様々な角度からコンテンツ作っておりますが、あまりにもコンテンツが多いもので、生物多様性だけをもっとわかりやすく伝えようと思ひまして、9 月 9 日に COP10.com という、「映像で伝える生物多様性」というサイトを立ち上げました。ここで苦労したのは、どういうメニューにして、どのように伝えていくのかということです。難しい言葉は、子どもからシニアの方々まで伝えるのはなかなか難しいので、あえて生きものをつながり、森の生きもの、水の生きものと、あまり抽象的なことをせずに、ストレートにメニュー組みをしています。そして生物多様性と言ひしても、ゾウだ、トラだ、サイだ、という絶

滅だけの話ではなくて、ホットスポットであるこの日本における生物多様性が、いかに身近であるかということについて、日本の森・里・海というメニューで里山を中心に映像で紹介しております。

日経エコロジーの藤田さんがご紹介されましたが、やはり今後は、来年の COP10 のテーマでもあります、企業と生物の関わり、特に経済と生物の関わり、生物多様性との関わりということ、どのように映像で伝えていくのかということ、5 つのチャンネルの中に 1 つ「生物多様性とビジネス」という骨子でまとめた専門的なプログラムを組んでおります。これはドイツの COP9 の時に立ち上がりまして、B&B(ビジネスと生物多様性)イニシアティブというところと提携いたしました。これも企業の大半のところは生物多様性にどうやって取り組んでいくのか、先程リスクのお話もありましたが、他社の事例はどういうことを現実的に行っているのかということを紹介しています。これはやはり企業のトップや環境部署の方がわかりまして、一般の従業員の方たちがどこまでその意識になるのか、ということ伝えるためにも、映像で世界中の国の約 40 企業が参加しておりますが、その B&B イニシアティブと映像化をふまえて進めていこうと考えております。

ここで重要なテーマは、やはり「暮らしとのつながり」をどう伝えるか、ということに取り組んでまいりました。これは携帯電話の素材の話ですとか、もしくは食の問題で乱獲していく漁業の話ですとか、そうしたことを映像で伝えておりますが、じゃあどうやって映像で伝えるのか。これもポイントがございまして、まずは普通の子供も達、小学校 5、6 年になりますと、ずいぶんインターネットで映像を見ております。そこで、生きもの動き、その表情、もしくは辛い話ですが、絶命していくような動き、また人間がどれほど乱獲して魚達が消えているのかといったことを映像で、その命を感じさせるということ、五感に訴求することで注意しています。

もう一方、生きもの海外の話がありましたが、コリドーのような、なかなか言葉で聞いてもわかりにくいもの、また科学的にこの数十年の間に急速に千倍にも伸びている絶滅種の加速度というものは、データをグラフや数値の動きで見せていく、ということに注意しながら作り上げてきています。

映像といひますと、動的なものやビジュアルだけではなく、音声がありますので、やはり鳥の声ですとか、虫の声ですとか、同じ家庭にいたとしましても、なるべく自然を感じるように、自



然の音を取り入れて、耳から聴覚にその重要性を訴求しようという考えで作ってまいりました。

4 点目はやはり生きものが身近であるということ。ずっと離れたボルネオやスマトラという熱帯雨林の現象から生きものが我々に与えているものというお話も重要ですが、我々の都心の公園においても、もしくは身近な棚田や田んぼの世界からも、生物多様性が私たちにどう影響をもたらしているのか、ということなるべく身近な生きものから伝えようということに取り組んできました。

5 点目はやはり、Green TV は環境関連の皆様方のような専門家ではございませんので、そうした語りができる方、NPO・NGOの方、そういう方達がわかりやすく伝えるということていろいろと取材をさせていただきながら、そのコメントを活用させていただいてコンテンツにしております。

最後になりますが、映像を使いながら環境教育を推進していくということて、ちょうど環境省さんが民間から政策提言を募集するという機会がありまして、我々とNHKエンタープライズさん

と連携して申請させていただいたところ、今年21年度の優秀に準ずるというところで採択いただきました。Green TV としまして、環境教育の専門家でいらっしゃる皆様方と一緒に、この映像をフィールドの一つの補完のツールとして、ご活用いただきながら推進していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。機会がありましたらぜひサイトをご覧ください。

URL : <http://www.japangreen.tv/>

司会(若林) :

映像の訴える力ってすごいと思います。皆さんこれを機会にぜひ、サイトにアクセスしていただきたいと思います。水野さんありがとうございました。

最後になりました。今度はまさに行動実践をされている例ということで、湊秋作さんです。やまねミュージアムの館長さんでいらっしゃいます。

生き物とのつながりの「自分化」から「社会化」へのフローを

～生態系ネットワークの「アニマルパスウェイ」の事例も含めて～

(財)キープ協会 やまねミュージアム館長 湊秋作氏

こんにちは。やまねミュージアム、キープ環境教育事業部の湊です。今日は、生き物とのつながりの「自分化」から「組織化」について、生態系ネットワークのアニマルパスウェイの事例も含めてお話をしたいと思います。まず僕の紹介ですが、僕はこここのキープ協会の仕事と、それから小学校の教師を24年間しながら環境教育を、五感を使いながらやってきました。現在はヨハネ保育園というところで子ども達を田んぼへ1年間に5、6回連れて行って環境教育をしています。また経団連さんとも企業研修を昨年からやっています、ベネッセさんや大成建設さん等の社員の皆さんに環境教育をしています。また、2週間前はここで田んぼの国際会議を環境教育の場にしようではないか、多様性の場にしようではないか、自然観を大事にしようではないか、というビジョンのもとで行ったばかりでございます。そういう僕が、今日はいろいろ自分のやってきたことなどを事例紹介しながら、お話していきたいと思ひます。

環境対策の大きな柱は、僕自身は環境保全つまり、「多様性の保全」と「環境教育」と思っています。その共通のキーワードが、僕は社会化、つまり誰でもが環境保全に、どこでも環境教育に取り組まない限り、地球は守れないではないかと思う。「社会化」が僕にとってのキーワードです。

昨年ボンでCOP9がありました。7千人が集まったそうです。日本からも200人も行ったそうですね。経団連や行政からもたくさ

ん行きました。フォルクスワーゲンにはエコパスというのを留意して、ドイツ中で環境教育をあのバスを使って行ったそうです。一方、日本で最近では2007年、環境省が第3次生物多様性国家戦略を出しました。その中に「生態系ネットワークの推進」というのがあります。なぜこれが大事かという、動物にとって移動が、繁殖が、休息が、分散するところが大事だから、生態系圏の確保をしましようということて。そこで出てくるのが僕の麗しいヤマネさんですね。ヤマネというのは、森という環境の象徴種です。枝が道です。枝がなくてはエサを食べに行けません。木がなくては、森がなくては、生きていけない動物です。

ところが、1996年、この清里で森を分断する有料道路の工事がありました。環境省、文化庁に抗議をしまして、県に抗議をしまして、ついにできたのが世界で初めての樹上動物のためのヤマネブリッジ、簡単に言うと歩道橋ですね。これが2,000万円でした。高いですね。社会化するには、誰でもどこでもするにはどうしようということて、一生懸命、経団連さんの支援をもらいながら、大成建設、清水建設、経団連さん達と共に作ったのが、アニマル



パスウェイです。歩いてここから5、6分のところに設置してあります。1996年から材料研究や構造研究から始まって、我々が作ったパスウェイの下を車が通るわけですね。そこに設置したモニターを見ると、昼間はリスが通っています。夜は、予想もしなかった動物が通りました。びっくりしましたね、テンでした。ですから日本の森の樹上を使う動物達のほとんどすべてがここを通る、ということがわかりました。僕らはこれを来年、名古屋のCOP10で、世界中で作りませんかという提案をしようかと思えます。それから、実はこれ、何時何分何秒に何が通るのかを見るのが大変なのです。ですから、あなたも調査員というふうにインターネットで呼びかけたら、都会のお宅の人も私も環境に参加できるという、そんなシステムもできれば作りたい。それも環境教育だなと思っています。

誰でもできるヤマネブリッジ、先程のパスウェイは200万円。10年前より10分の1にコストダウンしました。これは無償のヤマネブリッジ。実は人間が一人歩く山道も動物にとっては分断されて困っていますので、その辺にある枝を道にひょっとかけたら、この写真ではヒメネズミが通っていますね。これなら誰でもできるヤマネブリッジ、こういう形でも環境教育で生物多様性ができるかなと思ってきました。

一方、ヤマネから離れた環境教育で生物多様性をどう伝えるか、というときに基本的な姿勢、自然観、生き物観、少し難しく言うところ哲学ということが、やはり大事だろうなと思いました。4つほど僕は思っています。

1つ目は、「種」。それぞれの種のダイナミックなストーリーがあるのです。アカガエルは冬に産卵します。卵は黒いです。なぜ冬に産卵するかというと、5、6月までにオタマジャクシが育って、それからトノサマガエルなどがきて、時間的な棲み分けをする。なぜ卵が黒なのかというと、冬は寒いから黒にすることによって、太陽光の熱をより吸収できるから黒にしているわけです。それ一つをとってみても生態、行動、遺伝、生理、生活史が詰まっています。微生物一つとっても田んぼに水が入ったら一斉にミジンコが湧きます。水が入らないと湧きません。そういうダイナミックなそれぞれの種のストーリー、物語にまず注目をしましょうと思っています。

2つ目は、それぞれの「生き物間のつながり」、経緯ですね。経緯も非常に重要だと思っています。森では、腐養土層に落ち葉があって、微生物があって、そこには水と鉄分があって、滝となって流れて海へ行って、植物プランクトンがそれで体を作っていく、そういう経緯も非常に重要。

3つ目は、最近僕が特に思っているのですが、「生き物と人間とが同一の位置にある生き物観・自然観」が大事なのではなからうか。キリスト教では、神があって人があって自然がある。そういう上・中・下ではなくて、同じようであろうという自然観が大事で、そういうのは日本には昔からありました。以前、僕が小学校の教師の時代に、生き物に手紙を書こうということをしました。例えば、「シオカラトンボさんに手紙書きましょう」とすると、「さん」と付くだけで子ども達は、採って殺す虫ではなくて、シオカラトンボと同じ視点になる。そういう同一の位置というのを小さ

い頃から育んでいくのは大事だと思っています。

4つ目には、科学。科学的視点というのが当然、大事です。

では、そのような基本的な考えを基に、どのような方法で多様性を教えていけばいいのかということ、僕自身はやはりまず、五感体験。体験ということが重要だと思っています。体験しないと、イタドリあの酸っぱさはわからない。体験・五感体験が人を大きく変えていきます。それから、観察で生き物を知ること。写真の男性は経団連の研修で、切り株の本数を数えているところです。企業の方にこんなバカなことをやらせると思いませんか？「何本ですか」と言ったら、「35本」「こちらは40本」。じゃあ数ヶ月前、田植えをしたとき何本だったと思いますかと言ったら、「2本です」。それが今、35本もありますよ。なにこれ、と皆びっくりするわけですね。このような簡単な観察ですが、それだけで稲の持つダイナミックさというものを皆さん知るわけです。

そうすると、生き物への不思議・驚きを感じてきて、生き物への知識の理解をさせる。こういうのが、保育園レベルから大人レベルまでの観察方法で、いろいろな方法があると思います。それが自然遊びですね。これは子どもも大好きですし、大人の研修でもこれが一番、人を変えていくことでした。去年、経団連で6回の研修後、何が一番楽しかったですか？と聞いたら、稲株の投げ合いが一番楽しかった、と言っていました。それで皆が変わっていくのです。やはり体験というものは、非常に大きな力があります。

それから体験後は表現をする、ということが非常に重要と思っています。これは表現することで自分の中の知的なことを整理して、画面の俳画にあるように、情意を深めてそれを伝えるということで相互理解。人同士が、この生物と人同士が理解し合える。そういうのが表現というものにあると思います。

以上のことは、自分が田んぼや森や庭などで体験できることですが、間接体験という「他の世界を学ぶ」ことも必要と思います。例えば、今よく言われている生態系サービスにはどんなものがあるのか。海からは、森林からは、川や湖沼からは、農地からは、それぞれどんなサービスを受けているのか、そういうことも学んでいきます。

そして、僕が重要だと思うのは、特に自分の「生物多様性の役立ち感」です。生物多様性が、自分にとってどういう関係があるのか、弊社にとってはどんな価値があるのか、家庭にとって、行政にとって、そういう関係付けをきちんとそれぞれに位置づけていくというのが重要だと思っています。

ですから、そういうことを考えたときに、学びのフローというのはいずれ、「生き物の自分化」というのは体験・五感活動・観察活動でします。その次に「体験の加工化」があって、そして「他の世界から学ぶ」活動があって、「組織化」という、こういうプロセスがあるのかなと、自分自身では考えています。以上です。終わります。

司会(若林)：

湊先生はとても幅広い活動をされていらっしゃるの、ヤマネのこと以外にも、たくさんのお話ありがとうございました。

全体ディスカッション

司会(若林) :

これで今日の全体会 6 人の方の講演を全て終了しました。これまでのところで、質問あるいは意見でも結構ですし、何でも言える場にしたいなと思いますが、いかがでしょうか？

財部憲治さん :

明治大学の柴崎ゼミで勉強しています財部憲治と申します。先程前半の 3 人の方が終わった後の「何で生物多様性が大切なのか」という質問で、2 人の方から「人類が絶滅しないため」という答えをいただきました。そこですごく、何かこうじっくりこないような、結局人間中心なの？というところを素直に思いました。この 3 日間で自分なりの答えが出したいなと思った、という感想です。

司会(若林) :

明後日までにいろいろな方に聞いてみて下さい。先程、湊さんから自分化するという、とてもシンプルでいい言葉をいただいたので、自分だったら生物多様性の保全のために何がどうできるのかという、自分化する何か一つのきっかけを、この 3 日間でゲットしていただけたらすごく嬉しいなと思います。他にはいかがですか？

村井孝一さん :

グリーンウッド自然体験教育センターの村井と申します。お話を聞いて、アイデアが浮かびましたので、手を挙げさせていただきました。

最初の鳥居さんのお話の中で、温暖化は敵がはっきりしているからわかりやすいという言葉があったと思いますが、温暖化と生物多様性の共通の言葉は、敵という考え方もできるかなと思いました。温暖化は非常に社会化されていて広まっている。それなら生物多様性もうまくその中に入り口として、組み込むことができれば面白いのではないかと、伝えやすいのではないかなというアイデアが浮かびました。

例えば、気候が変わって大きい台風が来て大変だ、海面が上がって島が沈むと大変だ、それだけではなくて、生き物達もどんどん棲処を奪われてしまうよねというようなお話も加えることができるのではないかと思います。

先程の湊先生の話にもありましたが、自分化から社会化。それなら、ある程度社会化されているところに、この多様性という考え方をうまく話をつなげて組み込むことができれば、より広めやすいのではないかなというのが、今の時間、6 名の方の話を聞いて浮かんだ僕の意見です。

司会(中野) :

もともと 1992 年のリオのサミットでは両方が双子の条約みたいにしてできたと聞いていますが、本当にせっかく温暖化がこれだけ広まっているので、その影響は生物多様性にも大きいし、つ

ながっているというところからいけると、より広まるのかなと僕も思います。

鈴木さとみさん :

日本生協連の鈴木と申します。最後の湊さんのお話の中に、それぞれ私にとっての生物多様性の価値は何だろう、自治体にとっての生物多様性の価値は何だろう、とその価値の明確化が必要ですよというお話があったかと思います。生物多様性という言葉をご存知なかった方に、例えば、衣食住以外の我が家にとっての価値って何だろうと考えた時に、出てくる答えは何かというのをできれば知りたいなと思いました。

(回答者)濃秋作さん :

衣食住以外で、つまり人間の基本的な生存条件、動物もそうですが、それ以外であるならば、僕が今思うのでは、まず我が家の庭に蝶を呼ぼうと思います。エノキがあるのですが、そうするとタテハチョウが産卵にきます。ああ、いいなあと思います。そういう生き物がいてくれると、あるいはきれいな日没を見ていると、いいなあと思います。とても人の心を豊かにしてくれるというか、人生を豊かにしてくれるというか、そういう面が僕はとてもあると思います。例えば江戸時代は、花見と冬の枯野を見に行くというのがあったそうですね。そういうのを見る感性、人生がとても豊かになることも、衣食住以外では、僕は非常に大切だなと思っています。

また、衣食住とは関係ないことで、実際に子どもを教えていると、カエルを触るとニコニコしますよね。どろんこになると嬉しそうですね。生き物というのは、僕は子どもを育てる大きな力があると思いますから、人間をも育ててくれる。心も育ててくれる。そういう力があると思います。だからモンシロチョウがあり、タテハチョウがあり、いろいろな生き物がいるということは、いろいろな先生がいっぱいいるということだと思う。子どもを育てる先生がたくさんあればあるほど、子どもにとっては、つまり人間にとってはいいもんだなと思います。

翠田文さん :

東京ガスの翠田と申します。直接生物多様性ではなくて、環境教育について小河原先生にご質問したいです。最後の方で体験から概念化という話があったと思うのですが、企業の出前授業等でお子さん達に体験する機会を提供することはできるのですが、それが後で、学校でどのように概念化されているのか、継続的になされているのかというところが、気になっています。私も今年から担当になったので、あまり実態は見えていないのですが、企業としては体験機会を提供して、それを継続的に学校の活動なり、先生方のノウハウにはどのくらい生かされているのか、こんな活動されているという事例がありましたら教えていただければと思います。

(回答者)小河原孝生：

どういう体験をされているかによってだいぶ難しいですけど。どう表現していくかということは非常に大切です。例えば学校教育においては、今、非常に先生は余裕がないですから、体験したことがどの教科のどの単元に役に立つのだろうかというところに、ものすごく関心はあります。そういう時に、例えば、その生き物同士のつながりの話であるとか、あるいは、それがどういう環境に適應してきた結果、今のその形があるのだろうか、そういう生活をしているのだろうか、そういったところへ落とし込む。それを概念化という言い方をしていますが、その役割はやはり仕掛ける側、我々の側が、常にねらいとして明確に持たなければいけないと思っています。

ですから、テーマとかキャッチコピーというタイトルを格好良くやったとしても、要するに、そこであなたが何を伝えたいのか？そこがはっきりしない限り、学習活動として成果というものは評価できないわけですね。本当にそれが子ども達に落とし込まれたのだろうか、というそんな気がしています。

先程、自分にとっての生物多様性の価値とは何かという話がありました。今うちの NPO ではお庭の生き物調査というのを始めています。これは 5 年前の愛知博にもお庭のエコロジー館というのを出しているように、ずっとより身近な、より誰もが庭にいる生き物達に目を向けていけるような、湊先生がおっしゃったみたいな話ですが、私もまさにそうです。先週の土日に、家の庭にやっどジョウビタキという鳥のオスが来ましたが、二羽で喧嘩しました。今年はその鳥は定着しません。去年も定着しなかった。それは多分、家の庭の周りは新宿の近くですが、それだけの食物が無い、やはり鳥が、環境を評価してくれているのです。今年、とうとう庭からクモの巣が消えました。クモが生きていけるだけの小さな昆虫がいらない。かろうじてハラビロカマキリは生きています。これは都会で生きているのですね。サルビアの花に、アオスジアゲハが蜜を吸いに来ている、突然アオスジアゲハがひっくり返りました。どうしたのだらうと思ったら、ハラビロカマキリに食われたのです。もう一つ、サングラスをかけたみたいなおアズチグモという待ち受け型のクモが、家のオミナエシの上に止まっていて、それがヤマトシジミを食べた瞬間を見てしまった。そういう瞬間を小さな庭でも見る事ができるわけですね。

私は科学的なことばかり言っていますが、湊先生と同じで、そういうものを見ることによって、本質的にはそれがまさに人生の喜びである。庭に生き物がいて、そうしたものを見た瞬間、私の庭は地球とつながっていくわけですね。オープンな世界で、いろいろな生き物同士の中で、地球とつながっていくという、そういうことを実感できる。それはまさに人生の喜びである。つまり、庭にいる生き物を愛でる楽しみ、というのが原点である。でも、そこに終わってしまうと、日本の自然観の情緒的な自然観の中に押し込んでいくことになってしまいます。日本人というのは、どうしても情緒的に自然というものを見るという民族性を持っています。もう一方で、ぜひ客観的に、自然というものを見る目を持つ努力もしなければいけないのだ、というふうに思っています。

そして、まさにそういう瞬間に立ち会って、そういうつながり

の中にいるのだという実感をもつ。要するに、そういったことを実際に仕掛ける側が、常に用意しておく必要があるのだらうと思います。

司会(若林)：

ありがとうございました。今日初日のまだ始まったばかりですので、ぜひ、この全体会の 6 人の方のお話をきっかけに、明日からのワークショップや夜の部の中で皆さんのいろいろな価値観を育む、あるいはこの清里ミーティングが終わった後の行動化につながる何かを見つけてもらえれば嬉しいなと思います。

司会(中野)：

来年の 10 月に行われる COP10 に向けて、あるいは来年 2010 年は国際生物多様性年ということで、いろいろなロゴやスローガンが出ています。ロゴやスローガンなどからも、生き物も人間も幸せになる仕組みを作ろうっていうかたちで今、動き始めています。

こういういろいろなことが、今後メディアや様々な媒体を通じて、皆さんも触れてくることになると思いますが、この 3 日間、生物多様性について詳しい方いっぱいいますので、ぜひ知見を深めながら、そしてまた知っていることはお互いに交換し合いながら深めていきたいなと思います。皆さんありがとうございました。



2 日目

ワークショップ

【午前の部】

1. 自然体験型環境教育基礎講座
2. 多様な生物の声を聴く～全生命の集いワークショップ～
3. 科学的な視点を活かした環境教育のプログラム作り
4. 企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
5. 社会人大学院生&興味ある人集まれ！Part2
6. 風が吹けば桶屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
7. 川遊びを始めよう！～川の安全管理トレーニング～
8. パーマカルチャーと環境教育
9. 幼児～小2 に伝える生物多様性～生物多様性の形を探る～
10. ビジターセンターを運営側から考え創る方法

【午後の部】

11. あなたにとって、生物多様性って何？
12. 生物多様性に焦点を当てたプロジェクト・ワイルド体験
13. 人間界に多様性は確保されているか
14. 日本の森林環境教育と Project Learning Tree
15. どうプログラム化しよう？自然学校の「エネルギー」
16. 風が吹けば桶屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
17. 日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
18. エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part2
19. 事故防止～注意を促すだけでいいの？実践的予防安全法
20. トランジションタウンとは何か？都留での試み

の印は、主催者企画ワークショップ

(注)7. 川遊びを始めよう！～川の安全管理トレーニング～は、都合により中止となりました。

自然体験型環境教育基礎講座

実施者:川嶋 直(財団法人キープ協会)、高田 研(都留文科大学)-



【開催意図】

清里ミーティングに参加される方のうち、環境教育というものにこれまであまり接点がなかった方向けに、短い体験と簡単なレクチャーとディスカッションで構成し、自然体験を通じた環境教育の概要を理解していただくことを目的とした。

【導入(アイスブレイク)】 40min

デートゲーム/月～金曜日の5日間、毎日別の人とデートするという設定での自己紹介。

「名前」「所属」「職業」と「思い出すと嬉しくなる場所の絵」「講座に求めているもの」「今の心境」などをそれぞれ共有。

【野外アクティビティ】 1h

野外活動に向けた今日のテーマの発表。

「よく見よう」「違った見方で見てみよう」そうすると「違ったものが見えてくる」

・よく見る訓練

普段何気なく見ているものでも、変化を見つけてくださいと言えば、必死になって見ようとするもの。見ようとするから見えるものがある。

・ポークピッツが見えますか？

両手をかざし、うまく視線をずらすことによって、手の中心にポークピッツ(小さなウインナー)が見える。柔軟に見方を変えられるかどうかポイント。

「めだまっち」: 丸いシールに目玉を書き加えて、木や岩

や葉などに貼り付ける。森の中の友達に出会える。目玉の描き方によって、いろいろな表情を作り出せる。穏やかな顔をしたくじら岩や、驚いた顔をした木などが表れた。(CES 杉本幸子さんオリジナル)

「スキヤキハイク」: 鏡を鼻先にくっつけて、鏡の中に映る空の風景を見ながら歩く。樹木の枝ぶりが、見上げるのとは違って見えるのが新鮮。空間を切り取り、暗い地面に映

し出すことによって、よりくっきりと空が見えてくる。上を向いて歩こう ということ。「スキヤキ」ハイク。ハマリ過ぎて、他の人や枝などにぶつからないように注意が必要。

「森の万華鏡」: 合わせ鏡の真ん中に、好きなものを置いて、万華鏡のような芸術を楽しむ。参加者は皆アーティスト。石を使って城を表現したものや、笹の葉で見事な八角形を描いたものなどが人気があった。

【紙芝居プレゼンテーション】 1h

紙芝居プレゼンテーション(KP)とは、A4用紙に手書きの文字で大事なポイントを、1枚につき1つ書いておき、それを紙芝居のように順番に見せていく(ホワイトボードなどに貼っていく)プレゼンテーションの手法。

「伝えると云うこと」「教育とは」「環境問題解決のための3つの方法」「環境教育3つの入口」「環境教育をすすめるにあたって、なぜ自然体験が必要なのか」「子供たちに対する環境教育を考えるとき」「エコフォビア」「学んだら行動するか」などの題目でプレゼンテーション。

環境教育とは、こういった背景や目的、方向性を持ったものなのかをわかりやすく解説した。

【振りかえり・落とし込み】 30min

参加者3～4人でグループになり、今日の講座で学んだことを振り返り、お互いの感じたことや思ったことを共有。

【参加者の声】

- ・「環境教育」とは何かの答えを求めて講座を受けに来たが、決まりきった答えがあるわけではなく、改めて自分の中にあるものしか伝えられないということを感じた。
- ・つながりが見えると、わかることがあると感じた。
- ・環境教育において自然の良いところを伝えるのは良いが、環境破壊等のマイナスの部分伝えるのは難しいことだと感じた。

多様な生物の声を聴く ～全生命の集いワークショップ～

実施者: 中野民夫(ワークショップ企画プロデューサー)

【全体の流れ】

- 9:00 体操、一人一言自己紹介、全体の流れの説明
 9:35 グループごとに話し合う、話を聞く時間(室内)
 自然や環境に関する強烈な出会いや思い出
 自然や環境に関する、まずい、つらい、痛い体験や思い出
 10:00 前の時間の について嘆き悲しむ時間(室内)
 10:28 「地球の声を聴く」朗読(室内)
 10:50 自然と、あらゆる生命とふれあう時間(野外)
 11:30 お面作り(室内)
 12:00 全生命の集い(野外)
 12:45 人間界へ / 昼食・グループごとにふりかえり
 13:05 「ふるさと」合唱・終了

【はじめに】

簡単なアイスブレイクとして体操をした後、一人一言自己紹介を行った。それぞれが「地球の上で好きなもの・こと」、「このワークショップに対する期待など」を順に話す。「森の中でいろんな生物に会えるのを楽しみにしている」、「何をやるのか?期待している」、「中野さんのワークショップに参加したくて」、「生物多様性について知りたい」、「生物多様性をどうしたら実感できるか?」などの意見があった。

その後、アルネ・ネスが提唱した Deep Ecology について、また仏教・社会活動家のジョアンナ・メイシーと熱帯雨林保全家のジョン・シードの出会いについての話。

【スピリチュアルなワークショップ】

生物多様性を保つために多様な生命の声を聞こうという試みのワークショップ。森の中で自分の時間を過ごす間に何か語りかけてくる。その生物に選ばれてお面をつけ、その生物の立場から語り合う。動物などのお面をつけて語り合うのは子供でも出来そうだが、それがただの芝居の場にならないように、心から真剣に語り合う場へ持っていくために、導入には様々な仕掛けを施した。

普段の生活上、自ら麻痺させている感覚を解き、周りの環境を受け止め素直に嘆き悲しむこと、「地球の声を聴く」(Thinking Like a Mountain)の朗読をリラックスして聴くことで、人間も生態系の一部であること、更に生態系の中にあるつながりを思い出して、選ばれた生物の立場から語り合う準備とした。

【全生命の集い】

キノコ: こんな時に喜びを感じるという話は?
 大地: 森の葉が落ちてきたので私に太陽の光が当たるようになった。葉っぱのベッドも暖かい。
 太古の爬虫類: 川で魚を待っていると何とも良い匂いがした...メスの匂いだった!
 クモ: 子供が自分を嫌わずに肩に乗せたまま歩いてくれた。
 枯れ枝: 最近拾ってくれる人間が減ったが、残されて森でのんびりするの也不错い。などなど...

キノコ: 最近の問題点は? 11月だというのにこんなに暖かいのはどう思うか? 台風が減った気がする。台風によって森がリフレッシュしていた気がするが?

ミズナラ: 周りを見渡したらみんな歳をとっている気がする。

古木: ヤマネ達が冬なのか春なのかわからず飛び出して来るのではないかと心配。

木: 鹿がやりたい放題。オオカミもいなくなったし。などなど...

キノコ: 人間は人間のことしか考えていない。彼らへ愛のこもったメッセージやアドバイスをしようじゃないか!

水の精: 人間達も川なんだ! 身体の中には無数の川が流れているんだ!

ヤマガラ: 人間は怖いものを感じていない。

キツネ: 今日の体験を仲間に伝えて。

キノコ: 世界は人間だけのものではないと気付いて、責任を持って私達の言葉を代弁して。

小川: もっと環境について勉強して、フォーラムなどにも参加して! などなど...

【まとめ】

導入に力を入れたことで、メインの「全生命の集い」では誰もが熱く語る事ができていた。今回は環境に対する意識の高い参加者が多かったため、様々な意見が出てきたが、対象が違っていたら、彼らにはどのような生命が降り立ち、どのような声を聴くことが出来ただろうか。

科学的な視点を活かした環境教育のプログラム作り

実施者：小河原孝生(NPO 法人生態教育センター)

河原塚達樹(財団法人日本レクリエーション協会)

北野日出男(社団法人日本環境教育フォーラム)

佐藤 敬一(東京農工大学農学部)、湊秋作(財団法人キープ協会)

【概要】

『科学的な視点を環境教育に活かすことは、一層、感性に深く訴えることにつながり、個人の行動変容を促す。そして、科学的な視点無くしては環境問題解決につながる生活や社会制度の見直しは困難である。』このワークショップでは、こうした「観点」に立ち、まず、3人の科学者から冬ごもり・冬越しを共通テーマとして、昆虫、樹木、ほ乳類(ヤマネ)の生き方を科学的な視点から解説する。それらを踏まえて、参加者はわかりやすく環境問題意識を高めるような、インタープリテーション・プログラムを企画し、発表しあうという内容で実施した。

【解説&観察(グループワーク)】

まず、このワークショップの目的を共有するために、小河原より、本ミーティングでの科学と環境教育ワークショップのこれまでの経緯及び成果について発表した。

続いて、北野、佐藤、湊から、昆虫、樹木、ほ乳動物(ヤマネ)について、どんな内容を扱うか、簡単なプレゼンを行い、参加者はそれを受けて、どれか一つの解説を選んだ。大きく3つに分かれ、以下のテーマで解説を聞いた。

昆虫グループ(北野): 昆虫がどのように越冬するかについて

哺乳類グループ(湊): ヤマネの冬越しについて

樹木グループ(佐藤): 木の休眠について

< 昆虫グループ >

スライドで昆虫に限らず、さまざまな生き物の冬越しについて学んだ後、実際に野外に出て冬越ししている昆虫を探し、観察を行った。実施者の北野も実物を初めて見た、非常に原始的なヤマトハサミコムシを発見するなど、予想外の成果もあるほど、熱心に観察を行っていた。

< 哺乳類グループ >

ヤマネミュージアムに行き、実際に生きたヤマネを観察。湊より、ヤマネの冬越しと生態についての解説をした。

< 樹木グループ >

樹木にとっての幹の必要性や、樹木の休眠のしくみについての解説を行った。質疑応答が活発に行われ、参加者にとって多くの発見が生まれた時間となった様子であった。-

【プログラム企画】

その後、各グループ内でさらに2つのチームに分かれ、計6つのチームでそれぞれプログラム作りに取り掛かった。前の時間まででインプットしたことをもとに4~6人で活発な議論を行い、1時間後、その成果を模造紙一枚にまとめた。

【企画プログラムの発表】

ワークショップの結びとして、各チームから、プログラム内容のプレゼンテーションを行った。そのいくつかを紹介しよう。

< 昆虫チーム2 >

「虫の気分で冬ごもり」というタイトルで虫の多様性をテーマとしたプログラムを考案。まず、自分たちで虫ならばどんな冬ごもりをするのか、各自で工夫。続いて野外で冬ごもりの虫探し。その仕方により虫たちに名前をつけ、分類。冬の虫図鑑を作る内容とした。

< ほ乳類チーム2 >

もしも、自分の町が道路で分断されたら?という問いかけから、ヤマネの暮らしと参加者(小学校高学年)の暮らしを比べることで、ヤマネにとって生息域が分断されることの意味を感じてもらおうプログラムを考案。ヤマネ観察会や現在行われている解決策の紹介を行う内容とした。

< 樹木チーム1 >

「木の生きる力」動かないように見える、木の生きる力を知ることをテーマにしたプログラムを考案。動物の食痕を探す、実際に木をかじるなどの体験の後、木のしくみについての解説を聞き、木の冬支度や更新など、一層、樹木についての発見を促す内容とした。

【まとめ】

各チームの発表を受け、実施者から以下のようなアドバイスをし、結びとした。

より踏み込んだ科学的な視点をプログラムに組み込むと、更にもっといいものができる。

一つの種に注目していくことで、よりクオリティの高い事実がつかめることもある。

五感を使うこと、観察する姿勢を大切に!

企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える

実施者：鶴ヶ谷優子(社団法人日本環境教育フォーラム)



【はじめに】

社団法人日本環境教育フォーラム（JEEF）はコスモ石油エコカード基金から支援を受け、「コスモ石油エコカード基金 学校の環境教育支援プロジェクト（以下、当プロジェクト）」を行っています。このワークショップで当プロジェクトに参加する全国の小中学校、参加校のプログラムを企画・実施しているNPO、コスモ石油及び JEEF の担当者が集まり交流の機会にするとともに、学校における環境教育や企業が支援する環境教育について興味のある他の清里ミーティング参加者にもご参加いただき、意見交換などを行いました。

【プログラム】

- 9:00～ WS 開始の挨拶、「コスモ石油エコカード基金 学校の環境教育支援プロジェクト」についての説明、WS の流れの説明
- 9:15～ 各校（8地域9校）の活動発表
- 10:20～ 先生、実施NPOからの一言
（参加して良かったこと・大変だったことなど）
- 10:50～ グループワーキングのためのグループ分け
- 11:00～ 意見交換会（自己紹介・意見交換）
- 12:00～ グループ発表
- 12:25～ まとめ（今後の展望についてなど）

【各校の活動発表、先生、NPOからのひとこと】

各校の活動を発表後、参加校の先生及びプログラムを実施したNPOから、当プロジェクトに参加しての感想を発表してもらいました。参加して良かったこととしては、連続性・資金・学校との距離・挑戦など。参加して大変だったこととしては、日程調整・連絡手段・生活につなげることなどの意見をいただきました。また、こんな仕組みがあればという質問に対し、継続した助成・広報・横のつながりといった意見が多く、より発展的で包容力のある支援を求められていることがわかりました。

【グループワーキング】

参加校の先生を中心とした5～6名のグループに分かれて以下の4つのテーマについて話し合っていました。

今年度参加校の2年目の活動案（学校が主体で行うための仕組みの提案）

学校で環境の授業を行うためには何が必要か

（・学校が外部に望むもの・学校と連携するときに、学校にお願いしたいこと）

学校、NPO、企業が連携するための仕組み案

学校で取り組んでほしい環境活動。

あるグループでは、実際にプログラムに取り組んだ先生の意見を聞きながら話し合いを進められていました。先生から「学校側は環境教育についての知識がほとんど無く、環境教育のカリキュラムや教科書がほしい。小学校教育で大切にしている「聞く」「話す」という教育と環境教育を束ねたようなものがあれば良い」という意見が述べられ、教育の現場にいる先生の実情を知る良い機会になったと参加者から感想をいただきました。

【まとめ】

最後にグループで話し合われた内容を発表し、意見を共有しました。「環境教育はまだ学校主体にまでは至っておらず、一歩ずつ環境教育の位置づけを上げていかなければ」、「環境教育を学校の行事サイクルに合わせ、内容を深化させて長期的に行いたい」、「環境教育モデル校を支援するのはどうか」、「企業、NPO、学校それぞれの関係性を明確にし、費用分担をはっきりさせる」といった様々な意見をいただきました。清里ミーティングでワークショップを開催したことで、当プロジェクト関係者の交流だけでなく、企業、NPO、学校が連携する際のメリットや課題、当プロジェクトの改善案など、さまざまな立場の方から意見を伺うことができました。このワークショップが今後連携を望む学校、NPO、企業の参考になれば幸いです。

社会人大学院生 & 興味ある人集まれ！ Part2

実施者：西村仁志(同志社大学大学院総合政策科学研究科)

西村和代(環境共育事務所カラーズ)

【概要】

「社会人大学院生というのは何故・何のために存在するのか」「社会人大学院生という学び方というのはどういったものなのか」といった主催者自身の疑問を始め、今・昔・そしてこれから先の社会人大学院生や社会人大学院生に興味がある人が集まり、それぞれの思い・考え・疑問・経験を共有する場とした。ワークショップというよりもサロンに近い雰囲気の情報交換・交流の時間となった。

【ワークショップの流れ】

1. 自己紹介

紙を四つに区切ったものを使って、以下4項目を書き、それぞれ発表。

名前と所属

このワークショップに参加した理由

このワークショップに期待すること

「社会人大学院生」について思うことなど自由に

2. 情報交換

それぞれが持ち回りで自己紹介に触れたよりも、もう少し踏み込んで各自の経験を話し、同時に他の参加者に聞いてみたいことなどを挙げ、意見を出し合う。

3. まとめ

【自己紹介】

実施者を含め今回のワークショップに参加した方々は、それぞれ異なった経歴をお持ちである。違った背景を持ちながらも社会人大学院生という共通の興味・関心は同じ。社会人大学院生を経験している人、まだ経験していない人、それぞれ興味を持ったきっかけは、以下のようであった。

社会人大学院生を経験している人からは、実践活動において“行き詰った時のような感覚”を共有しているようである。

一方、社会人大学院生を経験していない人からは、進むべきライフステージという意味で“もやもや感”を抱えており、(社会人)大学院生に興味をお持ちであるようだった。

いずれにしても、社会人大学院生という在り方になんらかの可能性を感じている点では同じであったと思う。

【情報交換】

各人が今までにやってきたこととそれについて思うことを率

直に語り合い、各人にとって良い刺激になったのではないかなと思う。以下のような疑問・意見が出され、有意義な時間となった。

- ・ 仕事と大学院を両立するにはどうしたらよいのか？
- ・ 研究をどのように進めた(ている)か？
- ・ どの学会に所属しているか？
- ・ 何故研究をしようと思ったのか？
- ・ どの大学院が良いか？
- ・ 実践から理論を得るにはどうしたらよいのか？
- ・ 社会人大学院生の役割とは何か？
- ・ 学部卒業生との違いは何か？

特に社会人大学院生の意味・役割・可能性について参加者それぞれの経験から以下のように議論が深まっていった。

- ・ それまでやってきたことを整理し、次に進むための期間
- ・ 実践的研究者或いは研究的実践者
- ・ 社会と学問をつなぐ存在

など、一つの言葉にまとまりこそしなかったが、参加者それぞれが自身の言葉で社会人大学院生という在り方に理解と自信を深めたと感じた。いずれの表現にしろ、自分を実践者として捉えながら自分自身の理論の必要性をいたく感じていらっしやるのだらうと報告者は感じた。

さらに、参加者の一人の研究分野であった「食」の話題から、実施者の構想した大学連携の話、そしてそこから各参加者の経験知という流れで、これから実践活動をしていくには誰かと繋がるということが重要であるという結論にも至った。

今回のワークショップも人と繋がる良い機会の一つとなった。

【参加者のまとめ】

- ・ 自分のやっていることの背景をしっかりと知って活動するとそれがより良いものとなる。専門家・革新家はどの分野でも必要。
- ・ 新しい人とつながって今やっていることを整理できた。
- ・ 大学院というものがどんなものであるかというのは、自分が入ってみないと本当の意味ではわからない。
- ・ 一度自分の人生を振り返って次に進む時が来る。社会人大学院生というのはそんな節目みたいなもの。
- ・ 一つのことをじっくり考えてみないと実践者・研究者にはなれない。
- ・ いろいろな考えに触れられてよかった。

風が吹けば桶屋が儲かる 生物多様性ゲームトライアル

実施者: 赤松良彦(株式会社アーバン・コミュニケーションズ)

京極 徹(社団法人日本環境教育フォーラム)

【ワークショップの目的、ねらい】

本ワークショップは、生物多様性を身近に感じ、いかに日常生活に密接に関わっているかに目を向けるきっかけとなる環境教育ツール(ゲーム)の試行会です。ツールは地球環境基金の助成によって制作されています。試行会ということもあり、今回のワークショップを経て、プログラム参加者からのフィードバックを元に更にブラッシュアップする計画となっています。

このゲームは、人間が自然から受けている恩恵(生態系サービス)を中心に、一人一人がどのように生態系や生き物と関わっているかを確認し、その相互関係について考えるきっかけとなることをねらいとしています。

【アイスブレイク】

参加者は12名、学生、自然観察に携わる人、企業の環境部に所属している人など様々な職種の方が集まりました。まず、4人1組のグループを作り各グループ内で、このワークショップに参加した理由を踏まえた自己紹介から始めました。生物多様性を分かりやすく勉強するために参加した方、仕事と関わりがあり環境教育として良い参考になる情報集めに来た方など、各グループが個性溢れる方々ばかりで会場は始まってすぐに笑い声が絶えない雰囲気でした。

【生物多様性の例題カードを使用したゲーム】

まず、「風が吹けば桶屋が儲かる」ストーリーを6つのイラストに表現した紙を一人ずつ配布しました。参加者には6つのイラストから想起するストーリーを考え、そのイラストの順番とイラストのキャプションを書く、というウォーミングアップから始めました。ストーリーが完成したらグループ内で一人ずつ、発表していきま。農作物がなかなか実らず、相撲取りがお腹を空かせている話、猫が大量に増えて人の生活が荒らされる話など、6つのイラストだけで想像もつかないストーリーがいくつも誕生しました。

その後、実施者から「風が吹けば桶屋が儲かる」ストーリーの一例の発表があり、ワークショップのタイトルにも使われている「風が吹けば桶屋が儲かる」の意味を伝えました。

【生物多様性カードゲームの試作品実践】

ウォーミングアップの後はいよいよ本題のカードゲームです。進め方は、風が吹けば桶屋が儲かると同じ。イラストをつなげて

ストーリー展開を行うものです。生態系サービスにまつわるような、水、農作物、人、文化、森、DNA、薬などが写真・イラストで表わした計48枚のカードを使ってグループで進めます。

手始めに個人でランダムに引いていただいた一枚を元に残った40枚の中から2枚をつなげた計3枚のストーリーを作りました。

その後、テーマを決めてグループワークを行いました。まずは「医療」、2回目は「文化」を表現したキーカードを提示し、各グループとも同じキーカードからつなげるゲームを行いました。カードの使用枚数は7枚と制限しました。

各グループは、提示されたキーワードのカードの他に6枚のカードを厳選し、どのような繋がりがあるか模索し、ストーリーを考え、最初に完成したグループから順番にプレゼンを行いました。

「医療」をキーワードにした発表では、地域の病気が地域にある自然を利用して治癒していた歴史があり、様々な病気を治すためあらゆる種類の薬草や資源を調査して作られるが、その原料は里山や森といった自然にしかないという内容や、主人公が不治の病にかかってしまうが、ある水を飲むと病気が治り、その原因はミツバチにあったという、オリジナルストーリー風に作成したグループもありました。

「文化」をキーワードにした発表では、日本には、森や稲などは神と深く関係し御供えする文化があり、その文化が日本の自然観を形成しており、文化と自然は繋がっている事を表した内容や、自動車や先端技術などにより新しい文化を開拓していく中で、環境破壊が行われているため、持続可能な社会が必要であることを示す繋がりを表現しました。

締めくくりのワークとして生命の源「海」のカードをお題とし、海カードを基点に残る全カードを使用してつなげるワークを行いました。発表では、人類の始まりは海からであり、そこから衣食住へと文明が進んでいくストーリーや、海から生まれた生態系により自然が形成され、人は自然に感動する気持ちや生活での支えとなっており、海からの恩恵を示す内容などが生まれました。

ゲームが終わった後は、一人ずつ振り返りシートにワークショップに対する感想や意見、改善点などを記入しました。土壌中に生息している虫は、土壌の栄養分を分解する役目を担い、人が支えられていること知り、虫に対する見方が変わったという意見や、カードを両面使用して、片面は人にとって望ましい様子を表し、裏面は現状を表すようにしたら良いといったアドバイスを出していました。

パーマカルチャーと環境教育

実施者: 梅崎靖志 (安曇野パーマカルチャー塾)



【概要】

自然と調和した暮らしそのものを扱うパーマカルチャーは、日常生活に直接つながる環境教育の切り口として、非常に有効であると考えられる。このワークショップでは、パーマカルチャー的なアプローチからどのような環境教育が開けるかについて考えた。

ワークショップの前半でパーマカルチャーに関する基本的な紹介を行い、後半では参加者の感想を生かしながら「2050年における理想の暮らし方」と「その暮らし方を伝えるための方法および視点」について、3グループに分かれてディスカッションを実施した。

【前半】(9:00～10:45)

始めに実施者から、環境教育とパーマカルチャーの接点について説明を行った後、円になって1人ずつ自己紹介と自分の関心について話をした。

その後、パーマカルチャーの基本的な考え方についての資料説明を行うとともに、パーマカルチャーのイメージをつかむために海外事例を紹介する映像の上映を行った。

さらに、日本国内での取り組み事例として実施者が運営にかかわっている「安曇野パーマカルチャー塾」の活動を紹介した。

【後半】(11:00～13:00)

休憩の後、前半の内容に関する意見交換と感想を全員で話し合った。パーマカルチャーの取り組みに魅力を感じる一方で、いざ自分がやるとなるとためらってしまうという感想や、現在の教育で覚える知識は、実践で生かせるものになっていないのではないか、という意見が出された。

その後、実施者から現在の日本の食料・エネルギー事情に関する情報提供を行った。それを踏まえて「2050年における自分が送りたい理想の暮らし方」と「その暮らし方を伝えて

ていくための方法及び視点」について3グループに分かれて話し合った。話し合いで出された主な意見は以下の通り。

「2050年における理想の暮らし方」話し合いで出た主な意見

- ・自分の専門を生かしつつ、コミュニティや衣、食、住づくりに関わりたい。
- ・自分達の理想の追求から一歩踏みこんで、後世に伝える何かを残したい。
- ・様々な形で「農」に関わりたい。
- ・日本の気候や風土に合った暮らし。
- ・面倒くさいものを楽しむ。
- ・暮らしの中に「好きなこと」を生かすことが大切。
- ・田舎暮らしには「地域の輪」が大切になる。
- ・次の世代の人(子ども)に何を伝えていくかが大切。

「理想の暮らし方を伝えるための方法及び視点」話し合いで出された主な意見

視点

- ・一次産業と私達の暮らし等、現在見えにくくなっているつながりを、学校教育を通じて可視化していけないか。
- ・多様つながりを構築することで、多様な居場所を作る。
それらを包括的に体現しているものとして日本文化を見直す。
- ・気軽に参加できる事が大切。
- ・家族力・地域力を生かす。
- ・問題意識を持っている人がたくさんいるので、そういう人たちから周りに広げていくことができれば、変わっていくのではないか。
- ・皆が共通して知っていることから広げていくことが大切。その積み重ねが大きいものになっていくのではないか。
- ・家族ぐるみなど幅広い人が一緒に取り組めるような活動も必要。

方法

- ・通学路沿いに畑を設置するなど容易に観察できる仕組みを作る。
- ・学校林を復活させて、その活動が学校を通じて広がりを作っていく。
- ・一歩を踏み出せない人に対して、きっかけとなる情報提供を行う場を作る。
- ・自分にできることから周りを巻き込みながらやっつけていく小さな場作りをしていく。
- ・興味はあるけどどうしたらいいかわからないという都会の人に、いろいろな生き方の選択肢があることを伝える場を作っていく。
- ・手本となるような生き方を実践し価値あるものとして提示していく。
- ・場所に関わらず問題意識を持っている人に対して働きかけられるような活動を行う。
- ・多様な立場から、活動を進めていく。

幼児～小2に伝える生物多様性 ～生物多様性の形を探る～

実施者：島貫 陽(自然教育研究センター)、小澤紀美子(東海大学)

【WS実施の経緯】

日本の環境教育の現場では、幼児から小学校低学年の子どもたちを対象に、生物多様性をテーマとしたプログラムを実施することは多くないと思います。おそらく、言葉で説明しても、それを理解することができないからでしょう。しかし、生物多様性のイメージだけなら伝えることができるのではないのでしょうか。また、幼児期という早い段階から伝えることで、その後の成長に良い影響を与えたり、将来的に環境問題への意識が高くなったりすることもあると思います。このWSはそんな漠然とした思いから始まりました。

【教育現場の事例紹介】

参加者の飯沼慶一氏と小澤紀美子氏に教育現場での実践事例を紹介していただきました。

・飯沼氏

教育者としては子ども一人一人が興味を持ったことに個別に対応していく必要があります。また、子どもははじめ、蜂を怖がらずに近づいていきますが、危険だという経験を繰り返し、次第に蜂に近づかなくなります。こういった経験の時間をしっかり確保することが必要です。

・小澤氏

子どもは言語化できませんが、知らないだけで、感覚・経験的に『わかっています』。某保育園の子ども達からは、食物連鎖という言葉は知らずとも経験からわかっていることが伺える意見が出たこともあります。また、某小学校では、地域の方が子ども達に自然学習を行った際、まずは公園で遊ばせ、次に草花を採取・観察させ、そして写真と名前を確認しながら学習していったところ、3回の学習で公園内にある200種類のうち50種類の草花を同定できるようになりました。『遊びまねる 学ぶ』という3段階のプロセスを踏むことで、『遊び』から『学び』につなげられ、さらに同定や絵を通じて、子どもの『学び』と『教え』の一体化も見込めます。

【個人ワーク】

『幼児～小2に生物多様性をわかりやすく伝える方法』をA4用紙に書いてもらいました。ホワイトボードを使って、全員でディスカッションしながら、『観察』『五感』『教材の使用』『本能』などに分類しました。

【グループワーク】

分類した参加者の意見を基にして、子どもに生物多様性を伝える手法やフローを3グループに分かれて模造紙にまとめ、最

後に発表しました。

・グループA

『季節』『場所』『生物』『五感』を使い、『人と生き物』『生き物同士』の関わりを学び、生物多様性とまではいかなくとも『生き物の違い』だけでも感じる、知る。ステージも子ども家庭 学校 地域へと広げていくことによって、大勢に伝えることができます。

・グループB

『どういう大人になってほしいか』『(そのためには)どういう体験をすればいいか』『(体験から落とし込むには)具体的にどんな言葉が必要か』を細かくわけて、年齢別にまとめました。幼稚園年中までに言語化や表現の共感、年長～小1で違い、多様性に気づき、小2で生物のつながりに目を向ける。すべては『違いのわかる大人になること』につながっています。すぐに使えるアクティビティ集となりました。

・グループC

親子でプログラムを行い、子どもには『生物がいる いろいろな生物がいる』こと(原体験づくり)まで、親にはその先の『生物がつながっている』こと(生物多様性)まで気づかせます。親が触媒になって、子どもを気づきに導きます。大人を巻き込む手法です。

【まとめ】

幼い子どもにとっては感性を引き出し、気づかせることが重要です。子どもが生物多様性という概念を理解するための土作りがまずは先決でしょう。(小澤先生に参考資料『幼児～小2に伝える生物多様性 自然体験と環境教育』の解説をしていただきましたが、省略させていただきます。)

【最後に】

今回詳しく触れることはできませんでしたが、web上の2次資料から子どもの発達段階をまとめた表を配布しました。『心の理論』を基にした伝え方は、今後考えていきたいと思っています。WS実施の経緯は前述しましたが、『WS実施の訓練』という個人的な動機もありました。清里ミーティングは様々な熟練度の人が集まる場です。多くの人たちからフィードバックを得る、またない機会でもあります。清里ミーティングのWSの本来のねらいを無視した意見がもしもれませんが、WS実施初心者が訓練をする場にするのも良いと思います。最後に、WS実施のアドバイスをいただいた小澤先生と日本環境教育フォーラムの金久保優子さんに深く感謝いたします。

ビジターセンターを運営側から考え創る方法

実施者: 吉永一休(Eco - Navi 研究所)、柳川克己(京王電鉄)

若林正浩(財団法人キープ協会)

【概要】

1. ワークショップの趣旨説明
2. アイスブレイク(お互いを知る時間)
3. 事例紹介 「高尾の森わくわくビレッジ」
4. 施設調査「八ヶ岳自然ふれあいセンターを調査しよう」
5. 施設調査「調査結果のシェアリング」
6. 事例紹介 「他施設の事例」
7. 意見交換
8. まとめ

【内容】

本ワークショップの多くの参加者は、自然誌系展示施設の現場の方であった。展示に対するアイデアやヒントを、このワークショップに求めていると感じられた。

まず始めに、環境教育施設の運営の役割と、来館者へのメッセージがどのようなものであるかを、確認と共有を行った。「高尾の森わくわくビレッジ」の事例紹介では、最初の展示企画案とコンセプトを決めることに多くの時間をさき、施設改修を行ったことが報告された。コンセプトを明確にしておくことで、情報の展開や手法、方向性のぶれない展示を可能にし、また一方で施設の社会的役割について常に意識することが重要であることが示された。

この事例紹介を踏まえ、会場でもある「八ヶ岳自然ふれあいセンター」の展示物の良い点、悪い点について評価をWS参加者(=評価者)が行った。良い展示だと思えば黄色のポストイットを、改善したほうがよいと思えば赤色のポストイットをコメントともに展示物に貼り、感じたことを共有した。(表参照)

共通して良いと感じられた展示は、評価者のコメントが運営側のコンセプトと合致しているものであった。コンセプトが来館者にうまく伝わるような見せ方、設え、体験ができるものであることが分かった。一方で、共通して改善したほうがよいと感じられた展示は、趣旨の伝わり難さや、コンセプトが曖昧なものが多いと感じられた。運営側が表現したい内容と来館者との間に、コミュニケーション成立が難しいものであると考えられた。この両者にも当てはまらない、良いと感じた意見、改善したほうがよいという意見が拮抗した展示は、展示としては面白く「へえ～」と思いたくなるものであるが、その目的やメッセージが曖昧であるものである。展示のメッセージが明確にならず、運営制作側の意図と評価者のコメントが一致していないことが分かった。

「八ヶ岳自然ふれあいセンター」の展示を見ていく中で、施設全体のコンセプトがスタッフや来館者に対して明確であることが重要であることと同時に、コンセプトがスタッフ間で共有されていることで、新規展示制作時、改善改良時にも方向性がぶれないために重要であることが示された。

最後に参加者の事例紹介が行われた。「せら夢公園」、「五色台ビジターセンター」、「水元公園」、「柏崎・夢の森公園」などの諸団体の方から、現在の活動や、改善へのアイデアの募集、困っていることなどを紹介していただき、様々な話題やその現場をシェアすることができた。

このワークショップでは、核となるコンセプトの重要性が一貫したテーマの展示施設の姿として提案した。コンセプトがスタッフ間で共有し認識、理解されていることで、明確な展示やプログラムを提供できる。まずは各自現場のコンセプトを見直し確認し再評価すると良いのではないかというコメントで閉会した。

評価まとめ	良い	悪い	コメント
風除室の白い砂利	3	4	新鮮・受け皿があると石が白いまま?・目立たない・何ですか?
スマレの根	6	-	興味もてる・根まで見える・ディスプレイ方法が美しい・誘導の仕方・根っこ!!
ひとりプラネタリウム	4	4	楽しい!!・かぶりました・でも近すぎてわかんない・東西南北があるのもっとお得・ハンドメイドに可能性を感じる・写真すばらしい・中にも星座の印がほしい・good だけど、外ではなく中に星座名があれば良い
ヘビの背比べ	9	2	いろんな動物たちと比べられたら楽しそう・ヘビとの関わりもあつたら尚良い・こうすれば良かったんだ!!・長さ比べになつた方がもっと良かった・背を比べてどうしたい?・その向こう側は?
自然こよみ	2	5	自然の時間の流れに戻りたい・タイムリーに更新は難しいか?・もう少し活気(記入)がほしい・規範作りが必要か・内容がうすい
障子展示	11	-	心理学的で素晴らしい・面白い、でも目的が不明な感触・ステキ!文化を知ることできる。エコ・穴をあけていいのが good・障子の役割あると効果絶大・自分の家で実験中・楽しい!!穴をあけたし。文化も伝えられますね。
花札展示	8	3	大人は思わず立ち止まる・大人が喜ぶ・渋くていいと思うが、子供には分からないような・テーマが面白い・花札をとりあげて「日本の自然」という切口が気に入った・文化と組み合わせているのがいい・ルビが少ない・花札と展示の関連性?・花札を裏返すのはなぜ?
骨	5	-	うちの子、めっちゃ興味もってました・組み立てさせると、更に面白い

評価表(一部抜粋)

あなたにとって、生物多様性って何？

実施者：徳永 豊(スリーヒルズ・アソシエイツ代表)

浜本奈鼓(くすの木自然館)



【今回の趣旨】

生物多様性について、これまで2年間取り組んできました。1回目では、根本の生物多様性について考えました。2回目では、各地域の現状報告をいただきました。3回目(最終章)の今回は、一人ひとりの日々の生活や、仕事の中にそのテーマはあり、それに気づくことが必要であり、そして、気づいた後にどんなアクションを起こせるのかを参加者の皆さんに聞いてみたいと思います。それらを集めて、整理してみたいということ趣旨として今回のワークショップを企画しました。

【スケジュール】

13:35～13:50 自己紹介
 13:50～15:35 グループワーク「生物多様性 ～私の1日～」
 15:35～15:45 補足
 15:45～16:00 発表
 16:05～17:00 ふりかえり

【グループワーク「生物多様性 ～私の1日～」】

まず、2つのグループに分かれてグループワークを行います。グループ分けは、以下のようになりました。

Aグループ：4人 モデル：埼玉在住Aさん女性

Bグループ：3人 モデル：広島在住Iさん男性

グループの中からそれぞれモデルになる人を選び、その人の1日の生活のできごとを時間軸にそって追っていきます。同時にその日常生活と生物多様性の関わりを考えるというものです。模造紙を横書きで真ん中に時間軸の線を引き、朝起きて～寝るまで(寝ている最中も)24時間について、グループ全員で話し合って思いつくままに書いていきます。

ある日の「私の1日」の行動が成り立つために、生物がどう関わっているのか、関係しているのかを書き続けていきます。



【ふりかえり(意見交換)】

このWSで、何気ない日常のどんな行動にも生物との多様な関わり合いがあり、その上で私達の生活が成り立っている事に気づいてほしいという想いで企画したわけですが、いよいよ模造紙に書き出した「私の1日」を見ながら、その中にどんな生き物がどれくらい関わっているのか、話し合いました。

皆さんからの気づき・意見・感想を以下に抜粋します。

自分たちの1日の生活が生き物との関わりの中で成り立っている。

自分の1日の生活でやったことを立ち止まってみると、石油系エネルギーが多く関わっている。

普段見えないことが多く、見えないつながりなので自分に関係している事とは考えられない。書き出すことによって見えてきて、自分にとっての生物多様性を自分の事として考えられる。直接見ている生き物がいかに少ないかがわかった。

2グループの出来上がったものを比べると、共通しているものが多い(石油とか)。

どんなものでも海外から輸送すると化石燃料が関わってくる。たくさんの生物にお世話になっている。

ペット、野生動物、家畜に分類できるとすると、人間はほとんど家畜に世話になっている。

初めての人がこのアクティビティを体験することで、生物多様性に何かが関係してくるのか、自分たちの生活はすべて関わっているということを知り、自分たちが無関係でない事に気がつくことが最初である。

生態系サービスなど一日の中に総合化されている。

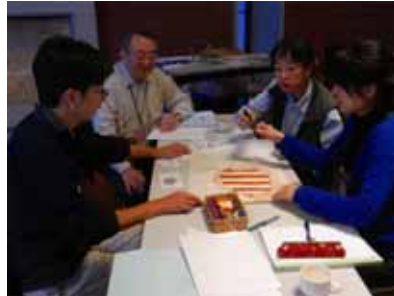
直接的に生き物と関わっていることよりも、見えない所で生き物と関わっている。

私たちに何ができるの？

調べ学習で終わらずに行動化までやるのが大切。

生物多様性に焦点を当てたプロジェクト・ワイルド体験

実施者：小河原孝生(NPO法人生態教育センター)



今回は、主催者からの基調報告の後、遺伝子レベルから生態系まで、生物多様性教育の視点からいくつかのアクティビティをアレンジし、体系的な概念と多様な手法を参加者に体験してもらった。

【体験内容】

1. 自己紹介「つながりを見つけよう！」/生態系のつながり

まず、参加者一人ひとり名前だけの自己紹介と同時に、好きな野生動物を1種類答えてもらった。そして、1グループ5~6人に別れ、1種類の種名を1枚のカードに写し取り、野生動物同士の関係性を模造紙に展開し、班ごとに発表した。「食物網の関係」や「生息地の関係」など様々な関係性が挙げられた。

また、それぞれの両手を関係する種類の人とつなぎ合い、錯綜したつなぎ手を回転してほどこいていくと……一つの大きな輪/生態系になった瞬間、驚きの声が出た。

2. 「私は誰でしょう？」/種の多様性

2列に分かれて並び、1列には生物の「親」のカードを、もう1列には生物の「子」のカードを1枚ずつ配る。スタートの合図で一斉に親は子を、子は親を探して見つかったペアからもう一度並んでいく。親子が似ているペアは先に並ぶことができ、難しいペアはなかなか見つけられず、結局最後までわからなかったペアもいた。水生昆虫など水域の生物は親と子の姿が違うことを通じて、種の多様性について理解を深めた。

3. 野外体験「つながり発見！生息地」

/生息地と必須要素の基本概念

参加者に野生動物にとっての必須要素「水」「食物」「隠れ場所」「生活空間」を上げてもらい、その4つの要素に分かれてもらう。4つの要素から1名ずつが前に出て手をつなぐと「生息地」ができる。この「生息地」同士が集まって一つの大きな円をつくった後、輪を縮めて人間イスの要領でタイミングよく座ると……みんなが一つの輪になって座ることができた。

次いで、一つの要素がはずれるとバランスが崩れ、転ぶ人も出てしまった。この体験を通じて、生物に必要な生息地と要素のバランス関係を知ることができた。

4. 野外体験「オー・ディア！発展系」/個体群の変動、種間関係

参加者は、「鹿」と「水」「食物」「隠れ場所」の要素に別れ、鹿も要素も反対向きに3種類のポーズのうち一つをする。合図で一斉に向き合い、鹿は同じポーズの要素を捕まえに行き、鹿を増やす。同じポーズの要素がいなければ、鹿は死んで要素に戻ってしまう。これを7回ほど行った後「オオカミ」が出現する。オオカミは鹿を食べ、オオカミを増やそうとするが、鹿を捕まえられなかったオオカミは死んで要素に戻る。全部で12回行って1回ごとにそれぞれの個体数を記録に取り、ふりかえりの最後に解説した。大人でも真剣になる生き残りを掛けたシミュレーションゲーム(模擬体験)を通じて、野生動物の個体数は絶えず変動していること、捕食圧が個体数を制限することなどが学べることを体得した。

5. 「魚をつくろう！」/進化適応、種多様性

5~6人のグループに、体型や口の形など4つの特徴ごとに魚のカードを配り、その特徴を生かした新種の魚を描いてもらった。それぞれユニークな魚が発表され、お絵かき遊び(?)を通じて、生物の適応進化とその結果の種多様性について学べることを理解した。

6. 「ニホンザリガニの未来」/遺伝子の多様性

カラフルなビーズを遺伝子情報にたとえ、各グループにボトルネックの瓶からビーズを配ると、色(遺伝子情報)が不足することを通じて、配られた遺伝子を持った自分たちのニホンザリガニは、ある生息地で生き抜けるかどうかを考えてもらった。このように孤立した(ボトルネックに陥った)個体群は遺伝子情報が不足しており、絶滅危惧種が生き抜くためには、個体群の規模=遺伝子の多様性が重要なことがわかった。

7. 「アライグマ・トラブル」/外来種と生物多様性の危機

外来種のアライグマが10匹逃げ出し、制限要因が掛からないと仮定したとき、個体数の変化はどうかを、データを元に検証してもらった。計算の結果、10年後には9,760匹になることを知り、個体数は指数関数的に増加することに驚くとともに、沖縄のマングースなど、外来種による生物多様性への影響の大きさを実感できた。

人間界に多様性は確保されているか

実施者: 広瀬敏通(NPO 法人日本エコツアーリズムセンター) -



【導入】

参加者全員の自己紹介と合わせて、このWSを選んだ動機を尋ねた。その解答として、「今年の清里ミーティングのテーマが「生物多様性」であるのに、「人間界」という切り口に興味を持った」、「ピピッときた」、「逆説的な問いに惹かれた」など。また、「性的マイノリティの友人がいて人権や差別といったことに興味があった」、「海外の人と接して又は海外に行って考えたこと」、「少年院での仕事を通して子供たちのいろいろな面を見たこと」など、それぞれ多様な理由があった。

【「人間界に多様性はあるか」についての各人の思い】

参加者からは「市民参加ということに多様性を実感している」、「学生が多様である」、「仕事のチームにいろいろな人がいると広がりができる」という多様性はあるという意見。或いは、いろいろな人がいるということはどういうことなのだろうか、日本の建物は皆コンクリートのビルになっている、一人ひとり思考回路は違うはずなのに一緒にしてしまう教育、という意見も挙がった。

今の世の中クローン人間は存在しないということは、多様性は在り得るのではないか。我々は「違う」ことに敏感になっている。それが、喜ぶことになるならば良いかもしれないが、排斥になってしまうと苦しいのではないか。昔はその土地のものや必要なものを扱っていた全国の「よろずや」がなくなり、今ではコンビニエンスストアになってしまったことから、全国どこでも同じものが手に入るのである。

次に、人間界の多様性とは？について思いをつま述べていった。人種、言葉、年齢、性別、出身地、価値観、文化、環境、宗教、家族構成、民族、嗜好、興味、血液、職業、思考回路、属性、外見、住まい、ライフスタイル、衣服、食べ物、センス、貧富、国家、生活史、寿命、恋愛、時間概念、性格、個性、能力etc...

これだけの多様性が出た後、「人間界に多様性はなぜ必要なのか」について、グループに分かれて10個理由を考えて、それらの優先順位を決めてからそれぞれ発表した。

- ・ 自分がある個性があるというのはかっこいい
- ・ ダイナミズムがある
- ・ 生き方が多様になる
- ・ 発想が豊かになる
- ・ 環境に適応するため
- ・ 間違いを正すため
- ・ 可能性が広がるから
- ・ 共通するものもあるがもともと違うから

これらに対する疑問や質問から、以下のような考えも出てきた。

- ・ 変わらないものと多様性を認めることが大切である
- ・ 他の生物から見たら人間は画一的であるのかもしれない
- ・ 多様にならざるを得ないが同じ行動をとろうとする、つまり意識しないと多様性はないのではないか

そして、「生物多様性の課題と人間界の多様性の確保はどのようにリンクできるのか」について、フリートークを行った。まず、オオカミの代弁の話。

- ・ 人間コロニーをドンドン増殖しているうちに、人間以外の生き物の存在を極端に嫌うようになった。それは絶滅への最終形態なのではないだろうか。
- ・ 生物多様性があるからこそ人間の多様性も存在するのだから、私たちと関わっている周辺をもっと知るべきではないか。
- ・ 生物多様性と人間の議論は同じはずだが、そう思っていない人も多いのではないか。
- ・ 生物多様性という深刻なテーマを深刻に訴えてもマスの人々への訴求力は生まれないのではないか。
- ・ 人間は無知でもある。
- ・ 違いよりも共通点を見つける力で自然と人のつながりが見えてくるのではないか。
- ・ 様々な生き物の言葉で今の世界を語るとどのようになるのか（賠償を請求されたら一体いくらになるのか）
- ・ 他の存在に気づくこと、人間の中の様々な存在に気づくことはとても大切だ。

最後に、このワークショップの感想を参加者全員が述べた。実施者からの「他の人が気付かない視点を持ち続けることが大切なのではないだろうか」という言葉で締め括った。

日本の森林環境教育と Project Learning Tree

実施者: 佐藤敬一・小平斐美・辻沙季子(東京農工大学農学部)
梅村松秀(ERIC 国際理解教育センター)



【概要】

1970年代からアメリカで森林環境教育として行われている PLT(Project Learning Tree)を紹介。PLTではまず子供に環境教育の入り口として森林を理解してもらい、森林や木が好きになり、環境を配慮する子どもたちを育む為に、様々なアクティビティや教育法が開発され実践されている。今回は2009年7月に、日本語版が完成した PLT Pre-K8(幼稚園前~中学2年生ぐらいまでを対象のテキスト)を中心に、アクティビティの紹介と実際のプログラムの実践方法を体験。また、日本における森林環境教育の事例も紹介して、日本における PLT 導入の可能性などを取り上げた。

【内容】

バードコールと名札の製作、アイスブレイク 14:00~

枝を加工した木材を使って、参加者はバードコールと名札を製作。木の材質や大きさにより、音が大きくなる場所や音が微妙に違っていたりするのを楽しみながら作り、それぞれに紹介した。

次にスタッフ紹介、スケジュール、PLTとPLT Pre-K8の紹介の後、アイスブレイクと「多様性のあるグループ」を作る方法として「人間逆K」法を行った。これは多くのデータから類似のものをまとめるK」法とは逆で、違ったデータを持っている人間をまとめる事でグループに多様性を持たせる方法。まず、用紙に自分を表すキーワード(好きな事・目標など)を3つ記入し発表。自分とは違うキーワードを持つもの同士で集まる。出来たグループの中で「好きな色」「出身地」などのメンバー間で異なる項目を見つけ出し、個数を競うゲームを行った。

バードコールハイク 14:55~

ヒバリの鳴き声を例にして、ヒナがいる巣に敵が近づいたら親鳥はどうするかなど、イラストパネルを使いながら解説。またネイティブ・アメリカンのフォックスウォークをみんなで実践しながら、五感について体験学習。

PLT Pre-K8の実演 15:25~

小学生向けの寸劇「トガチュウの森」。イラストとストーリーを日本向けにアレンジし、かわいいイラストパネルを使いながら実演。参加者も声優で参加。毎日が退屈な女の子「静香」が、森でトガリネズミの「トガチュウ」に遭遇。促されるまま指をトガチュウの背中にのせると静香もトガリネズミに。トガチュウに案内してもらった近所の森の中はファンタジーに満ち溢れていて。という内容で非常に分かりやすく森の生物多様性の理解を促した。

アクティビティ「多様性に満ちた惑星」 15:50~

これは参加者に仮想のDeevoid星の科学者になってもらい、屋外で最新式マニピレーター「割り箸」を使い、地球の生物調査をするというもの。寒空の下、短時間の調査だったが思いの外いろいろな生物が見つかり、参加者も楽しみながら報告し、生物多様性の体験学習をした。

アクティビティ「We All Need Trees」 16:30~

机の上に13個の「物」が並べられ、木から出来ているものとそうでないものを×で選ぶ。箸やコルク、段ボールなど想像しやすいものから、スポンジ、セロハンテープ、バニラエッセンス、メガネのフレームなど判定に難しい木の製品もあった。

PLTについての近況報告&解説 16:45~

PLT日本事務局及びERIC国際理解教育センター、PLTファシリテーター養成講座の近況報告と解説。

アクティビティ「緑の空間」

「持続的なコミュニティを実現していく為にどんな事をしていかななくてはならないのか？」を考えるきっかけを作るアクティビティとして「緑の空間」を体験。航空写真の上にランダムにプロットされた100個の点を書いてある透明なシートを重ねて「建物」「道路」「緑」などに分類していく。神宮と清里で比べてみると違いが明らかになった。

最後に全体のアンケートを取って終了。少人数という事もあり「PLT Pre-K8」の実際の運用と高揚感を全員で味わえたワークショップになった。また、「木」から環境教育を考えるきっかけに気づかせるアクティビティを紹介することができた。

どうプログラム化しよう？自然学校の「エネルギー」

実施者：遠藤 亮(柏崎・夢の森公園)

【概要】

温暖化問題で関心の高まる「エネルギー」を、どう自然学校がプログラム化するか？ その目的や対象、ニーズ、助成金、内容、課題など様々な視点から、「エネルギー」のプログラム化について「柏崎・夢の森公園」の実例をもとに考えた。また砂鉄から鉄をつくるインスタントたたら製鉄体験や、菜種から油をしぼる搾油体験など、「柏崎・夢の森公園」で実際に行っているプログラムの体験を行い、今後それぞれの現場で実施することができそうなプログラムや、実施する上での課題などについて意見交換を行った。

【WSのねらい】

1. 「エネルギー」をテーマにしたプログラムを実施する仲間を増やす
2. さまざまな立場から、自然学校のエネルギーとプログラム化について考える

【実施内容】

1. オリエンテーション

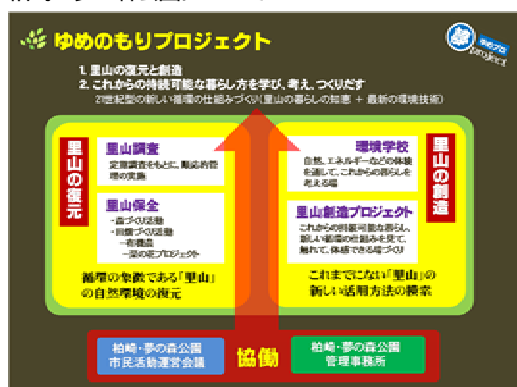
自己紹介(実施者3名 参加者5名 計8名)

自分のこと WSに期待していること

所属組織の主なプログラム内容(対象、時間、料金など)

現在、エネルギー教育プログラムを実施している主体とその特徴

柏崎・夢の森公園について



2007年6月に開園。持続可能な暮らし、里山の復元と創造をテーマに、里山の暮らしの知恵と最新の環境技術を組み合わせ、21世紀型の新しい循環の仕組みづくりに取り組んでいる。持続可能な暮らしを考える視点として、柏崎の地域性でもある「エネルギー」の体験プログラム化に取り組んできた。現在は、

首都圏の私立中学校、高校などがエネルギーをテーマにした2泊3日の宿泊プログラムを利用するなど、一定の成果が出てきた。ゼロからエネルギーをプログラム化、そして販売するまでの「不安」と「現実」について紹介を行った。

2. プログラム体験

エネルギーをプログラム化するといっても、様々な切り口がある。自然学校が得意とする体験型のプログラムとして、実際にどのようなことを行っているのかを体験していただいた。

地域性を活かした柏崎ならではのエネルギープログラム(古代の鉄づくり体験)

地域に関わらず、どこでもできるエネルギープログラム(なたね油の行灯づくり、搾油体験)

3. 「エネルギー」のプログラム化を考える

エネルギーは売れるのか？儲かるのか？=自然学校として持続可能なプログラム足りうるのか？

どんな人に売れるのか？ ニーズ・ウォンツのある対象は？プログラム化する際のパートナー、使える助成金は？自然学校が得意な「自然」と、「エネルギー」をつなげるツールや手法は？

自然学校がエネルギーをプログラム化する意味は？ そのそもその目的は何なのか？

エネルギー教育の段階的目標設定、取り組む主体間の連携・役割分担

4. 参加者からの感想

- ・エネルギーという扱いにくいテーマだが、人々との歴史と紐解いていくことによって身近なものに感じることができた。
- ・体験がおもしろかった。近代的な技術と歴史とのコラボレーションが「エネルギー」をプログラム化するひとつのアプローチだと知った。
- ・よく考えれば、たき火もエネルギーの一種であるし、鉄や油などからもプログラムの幅が広がると思った。身近なものからエネルギーを捉えていくことが大切だと思った。
- ・色々体験できると思わなかったので満足。これまでの活動の中では、エネルギーという視点がなかった。みんなで具体的なプログラムにまで落とし込んでいく時間があるとよかった。

風が吹けば桶屋が儲かる

生物多様性ゲームトライアル

実施者: 赤松良彦(株式会社アーバン・コミュニケーションズ)

金久保優子(社団法人日本環境教育フォーラム)



【概要】

午前のワークショップに引き続き、ワークショップ内容は変わらず、参加される方を入れ替えて実施しました。午前と同様に、生態系や生き物がいかに身近な存在で、我々の生活において切っても切れないものであるかを、その恩恵を考えながら感じていただくきっかけづくりになることを目的として行いました。

【内容】

まず4人ずつのグループに分かれ、各グループ内でアイスブレイクを兼ねた簡単な自己紹介。その後、実施者から自己紹介と共に、今回のワークショップについて説明を行いました。

最初に行ったゲームは、日本のことわざである「風が吹けば桶屋が儲かる」を6枚の絵に表し、それらを各人の思うストーリー順に並べ、ストーリーをつなげるための話をつけるというものです。このゲームは決してことわざ通りのストーリーを作り上げることだけが正解ではなく、自由で柔軟な発想も求められます。その後、各グループ内で発表を行ったところ、午後の実施でも一例の「風が吹けば桶屋が儲かる」のストーリーとは違う物語がたくさんできました。

次にこのワークショップの本趣旨ともいえる48枚のカードを使ってのワークに入りました。カードは生態系サービス(供給サービス・基盤サービス・調整サービス・文化的サービス)を主とした日常生活には欠かせないシーンで構成されています。

まずは手慣らしとして、1グループ1セット(48枚)の中からカードを一人一枚選び、残る全てのカード数十枚の中より2枚を選び、計3枚のカードでつながりや関係性を基に小話を作りました。

次のゲームは、グループでひとつのストーリー(関係性)を作り上げるものです。テーマに提示されたカードは「医療」のシーンが描かれたカードで、他6枚を前ゲームと同様に残るカードから選ぶストーリーづくりを行いました。その後、各グループの発表

を行い、擬人法を用いたものや少し暗い結末のもの、中には神頼みで話を締めるものといった様々なストーリーが出来上がりました。同様に今度は「文化」を模したカードから各グループでストーリーをつくりプレゼンを行いました。

各グループでカードを使う条件を同じにしていますが、それぞれのグループで一つとして同じストーリーにならないのが、このゲームのもう一つの醍醐味でもあります。

最後のゲームとして「海」のカードをキーカードに、すべてのカードを用いて1つのストーリーを各グループで作りました。48枚全部をつなげることは難易度が高く、各グループとても白熱していました。最終的には各グループとも曼荼羅のような形になり、グループごとの1枚1枚のカードの捉え方が異なっている点に、参加者全員が興味を示していました。グループ内では個人によってカードの意味合いの捉え方が違った点も新鮮であったようです。

ゲームを終えた後は各自振り返りシートを記入し、その思いや感じたことを各グループで共有しました。参加者の方々もゲームを通して様々なことを感じたようで、その時間もとても盛り上がっていました。最後に実施者からプログラムに関するコメントをし、このワークショップは終了しました。

【参加者の感想】

- ・普段は忘れていた自然とのつながりを感じたりできた。
- ・カードにすることでイメージがしやすい、自由な発想ができる。
- ・いろいろな人との価値観の交流ができる。
- ・自然といろいろな人の知識に触れられた。
- ・頭を柔らかくできた。
- ・コミュニケーションを通して考えられた。

【最後に】サポートスタッフ感想

ワークショップ中の各グループがとても楽しそうにつながりについて深く考えていたことが印象的である。ひとつのカードを取ってみても、各々が異なる捉え方をすることはまさに生物多様性につながるものだと思う。最後の感想会ではこれらのカードに経済に関するカードや、エネルギーに関するカードを加えても良いのではないかと参加者からの意見もあり、これから改良されてより優れたツールになるはずである。このワークショップは生物多様性について誰もが様々なことを感じ取った、濃密な時間となったことだろう。

日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす

実施者：新田章伸(NPO 法人里山倶楽部)、湊 秋作(財団法人キープ協会)

林 美由貴(南風舎)



【目的】

環境教育を生き方、暮らし方に結びつく段階まで深めて行くためには、私たちが生まれ住む日本の自然、文化、価値観に根ざした自然観を再認識し、活動として実践する必要があるというメッセージを伝え、共に考える。

日本の自然観を整理し、環境教育に活かす。

【実施結果】

はじまり 13:30～

CD 演奏「一輪の花」(大塚まさじ)

導入 13:40～

A4用紙に各自「名前」、「今の住まい」、「所属団体、活動」、「WSへの思い」を記入。後ろのスペースに移動「名前」と「今の住まい」で並び替えを行い、参加者の緊張を解きほぐす。

続いて「所属団体、活動」と「WSへの思い」を順に紹介、参加者同士お互いを知り合う時間を持った。

話題提供「日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす」 14:10～

11月はじめに開催された「田んぼ国際環境教育会議2009」の成果もあわせて、その実行委員長の湊秋作より発表。自然観は歴史とも深く結びついている。そして、日本やアジアは森と田んぼ、ヨーロッパは森と畑、という比較から見えてくる自然観もある。田んぼは様々な文化が生まれるところであり、生き物にも良い環境で、無限の可能性が広がっている場所である。これからもどんどん田んぼをフィールドにした活動をみんなで創っていこう、という呼びかけで発表を終えた。

活動体験「生き物のくらし」 15:20～

実際に日本の自然観を活かした活動を体験。野外に出て1人で自然の対象物(植物など)を見つけ、観察と詩づくりを行い、終了後に数人グループでお互いの感じたことの共有を行った。

その後、考案者の菅井さんの解説文を読み、ワークの理解を深めつつ、もう一度このような活動についてお互いの意見を交換した。

事例紹介「日本の自然観実践研究会」「里山キッズクラブ」

16:20～

まず、関西で活動している「日本の自然観実践研究会」を世話人の新田章伸から紹介。

次に日本の自然観の長期的な実践活動として「里山キッズクラブ」を紹介。日本の自然と暮らしのある里山で、様々な自然と、その自然と共生する知恵と暮らしを子ども達が体験する一年間の継続型講座。この一年間の活動を通して「自然(おのずから)」、「畏敬の念」、「一体感」、「季節感」、「直観」といった日本の自然観を体験的に学ぶというもの。

ふりかえり記入・まとめ 16:35～

日本の自然観は、決まったものが存在しているわけではなく、現在研究中。日本の自然観の捉え方は人それぞれであり、西洋との対比などから、日本の自然観を整理していきたい。自分たちの自然観をしっかりと自覚することで、自分たちの活動を地に足のついたものにしていきたい。

おわり 16:55～

CD 演奏「ここから未来へ」(BIGIN)

エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part2

実施者:好川治(J-POWER)、八尾祐美子(東京ガス)、浅井あかね(東京電力)



【主旨説明(好川)】

今年は第2回として、「人を幸せにするエネルギーの使い方」をテーマに、「エコとエネをつなぐ環境教育」として「次世代に何を伝えていくのか」についてワークショップを行う。エコ(環境)とエネ(エネルギー)を相反するものではなく「つながり」として捉え、エネを大切にすることがエコを大切にすることに繋がることが、実感を持って学ぶことが、日々の暮らしの中でエコとエネを大切にすることができると考えている。

【エネルギー企業の活動紹介】

(1) 東京ガス(八尾)

「エコな暮らしで HAPPY に」というテーマで東京ガスの取り組みについての報告があった。環境への意識を持ち、日々の行動を少し変えることで、いつもの暮らしがより楽しく、よりよいものになるようにという想いが込められている。内容は環境負荷低減を可能にする都市ガス利用のほか、リサイクル、環境教育、自然保全、食育等の項目に及ぶが、今回はエコ・クッキングに関して紹介があった。

詳細は 検索 [エコハピ](http://ecohappy.net/) <http://ecohappy.net/>

(2) 東京電力(浅井)

「次世代に伝えたいこと～エネルギー環境教育を通じて～」というテーマで東京電力の取り組みについての報告があった。東京電力の環境教育に対する取り組みについて、環境・エネルギー講座の開催実績、当間(新潟県十日町市)・尾瀬・発電所緑地の三つの自然体験フィールドを中心拠点で活動している「東京電力自然学校」の紹介があった。そして次世代に伝えたい視点としては、「自然のつながりの中で人間が暮らしている」という点を強調し、電力会社がエネルギーと生物多様性(「エコ」と「エネ」)をつなぐ教育を行い地球規模の課題を多様なステークホル



ダーと一緒に解決していくことが大切であると総括した。

詳細は 検索 [TEPCOのECCO](http://www.tepco.co.jp/eeco/)

<http://www.tepco.co.jp/eeco/index-j.html>

【ディスカッション】

初めに、「自分を(更に)幸せにするエネルギーの使い方」と、「日本の社会を(更に)幸せにしてくれるエネルギーの使い方」をテーマに、グループワークを行い全体で意見を共有した。

については、健康に暮らせること、アメニティを優先させること、インターネットなど情報を利用することや、自分の趣味(エゴ)を満たすための使い方などが挙げられた。今の快適な生活レベルを落とさずに、どのようにエネルギーの使い方を工夫することができるのか課題提起があった。

については、明るい未来を創造すること、エコノミーにおける使用、医療の場における使用などの意見があった。これから必要な事として、地域の特性を活かしたエネルギー供給システムや、太陽エネルギーの有効利用、炭から水素を作るなどの新技術、サマータイム制などの新たな社会システムの導入が挙げられた。また、「足るを知る」ことが大切であるとの意見がある一方で、規格・規制がなければエネルギーの使用量は増え続けてしまうという意見もあった。

続いて、「次世代に伝えたいこと」をテーマにフリーディスカッションを行った。「新聞などのメディアの役割は大きい、発言力・影響力のある人に伝えてもらうなどメディアの有効利用が必要」、「企業や政府はエネルギーについて、国民にもっと伝えるべき」、「エネルギー企業の協働も必要」、「先生・親がわかっていない大人に伝えることが必要」、「日本の学生はもっと積極的に」、「学生ならではの視点で気づいて欲しい」等の意見が挙げられた。これらの情報を共有するとともに、それぞれのフィールドに持ち帰って、今後の日々の暮らしや活動に活かすことを再確認した。

事故防止 ～ 注意を促すだけでいいの？ 実践的予防安全法 ～

実施者: 橋谷 晃(木風舎)

【はじめに】 13:30～

安全管理とは予防安全のこと。どんなに気を付けても事故は起こることもある。現場で気を付けること=デスクの上で気を付けること。

事例：あるプログラムで活動中滑りそうな岩場で言ったスタッフの一言。「ここ滑りそうなので、気を付けてください」確かに注意の喚起をしたが、フィールドで活動するプロとしてはどうなのか？例えば、ロープを携帯していてサッと張ればいい。サッとロープが張れてプロ！・・・プログラム参加者は、お金を払って安全も買っている。気を付けて下さい、だけでは優しいお兄さんになってしまう。

【ヒヤリハット体験から予防安全に繋げる】 13:55～

このワークショップは職場でも出来るヒヤリハット体験をシェアすると共に、WSを持ち帰ることが目的。

作業1：今まで体験したヒヤリハットの事例を書き出す。

作業2：事例を出し合い、カテゴリーごとにまとめて、ペンで囲む。今回まとめたカテゴリーは次の10項目。

<自転車、火、道具、落下物、ウルシ、植物、生物、迷う、身体的異常、飛び込み、水、滑る・転ぶ>

滑る・転ぶについては、どこの研修でやっても一番事例があがる。身体的異常、特にアレルギーについては増えていて、参加者自身が把握していない事が多い。

ここでどんな場面でそれが起きたのかをシェアする。いろいろと話しているうちに気づきがあるので、いろいろな体験をシェアすることが大切。職場に帰れば事例を出し合って、何日でも話することが出来る。

【滑る・転ぶを予防するには？のワーク】 15:00～

再びポストイットに書き出す作業。まとめたカテゴリーは以下の8項目。<下見、道具、現地整備、ルート、体調管理、歩き方、装備、人の補助>

下見：プログラム前は下見をする。ではどう下見をするの？チェックリストを作成し、どこまで共有出来るのか？リスクを10%まで減らそう。極力0%まで近づけることが大切。

気づき：参加者とスタッフの意識の違いがある。私たちの常識は通じない。

装備：両具と表記するのではなく、上下セパレートのレインコート(コンビニで販売しているものNG)のように、メーカー名や数字とか参加者の身近なものを引き合いに出して説明をする。ここでプログラムの装備で貸し出しが出来る物を用意できているのは強い。無い物をないようにすることが大切。

備品の管理をする 販売をする 参加費にレンタル設定をする 参加者は装備があるから、低価格で参加が出来る。とにかくやってみるといふように、体験の間口をひろげることが環境教育の一步につながる。

体調管理：その日の体調だけではなく、前日、もしくはその前からの体調管理をどうしているかが見えづらい。健康チェック表を同意書の形式にするのも一つの方法。ハンコを押すことによって、リスクがあることを知らせる。本人ないし、子供の保護者のハンコがあるかどうかで、もしもの時に危険があることを示したかどうかで、左右されることがある。

対象を替える：リスクを減らすという点では、指導者(主催者)が複数の選択肢を持っていることは大きい。プログラムは、天候や人数などにより変わってくる。特に、雨天時の雨プログラムを持っていると、パフォーマンスもアップするし、レポートリーも増える。雨天時に強行にプログラムを実施すれば、危険度も上がるので経営判断を差し込まなくてもいいようにする。**集中力**：危険な場所、場面では、集中をさせているが、その集中が切れたときに怪我や失敗をしたりする。集中ポイントが終わって、気が抜けるとそこで何かが起こることが多い。

【ロープを使った事故防止の紹介(野外)】 16:20～

野外で活動をするときにロープを一本持っていることはとても大きい。例えば、沢があり戻ったら8時間、やらなければという場面で役に立つ。そのためには普段から、道具の整備や知識、基本のロープワークを自分のものにしておく必要がある、ある物でなんとかする技術も大切。

【まとめ】 16:45～

予防安全はいろいろな角度からのアプローチがあり、今日やったことだけでは無い。予防安全は知っているだけじゃダメ、実践することがなにより大切！

【参加者からの感想】

- ・色々なシチュエーションが出てきて、自分の体験が無い部分、川や海の話が聞いて良かった。経験したような気持ちになった。
- ・事例を出し合ったときに、あるあると思うのは慣れが出ていることに再確認出来た。
- ・文章にすると、そうだなあと思うのは、自分の中にあることで、でてこない事は危険。このWSをプログラムとして子供にもやってもらおうと落とし込みができるのかなと思った。
- ・いろいろな人の意見があって面白い。帰って職場のスタッフとやれば、普段自分が思っていないところが出てきそう、これをぜひやりたい。

トランジションタウンとは何か？～都留での試み～

実施者：加藤大吾・杉浦ひろみ(トランジションタウン都留)

【ねらい】

イギリスから始まったトランジションタウンの取り組みについて知ってもらう。また、実際にトランジションタウンの運営の一部を体験し、自分の暮らす地域にも持ち帰って取り組みに活かしてもらうこと。

【ワークショップの流れ】

トランジションタウンとは何か スライド説明
トランジションタウン都留の活動報告
グループワーク

1. トランジションタウンとは

「安い石油の大量消費を前提とした社会」から「地域をベースとしたしなやかで強い社会」に移行しよう、という運動で、パーマカルチャーの講師、ロブ・ホブキンスが2006年に提唱。イギリスのトットネスという町で、テーマごとにワーキンググループを作るなどの取り組みが始まった。現在は世界3,000ヶ所の地域に広がっている。日本でも、藤野、高尾、鎌倉、小金井、渋谷...など、各地で取り組み始めている。

<トランジションタウンのスピリット>

依存から自立・共存へ
部分から全体へ(根本的解決へ)
除外からオープン、包括へ
分断から連帯・つながりへ
トップダウンからボトムアップへ
(身近なところから始める)
コントロールから自発性へ
GetからCreateへ
愚痴や恐れから実行へ(とにかくやってみよう!)

2. トランジションタウン都留の活動実績

2009年5月に、5人ほどで集まって設立準備会をおこなってから数回、準備会を重ねている。その他に、自主上映会や合鴨農法見学、天ぷら油号(廃天ぷら油車)づくり、トイレづくり、パーマカルチャー暮らし見学、ミーティングなど、活動を続けている。8月にはトランジションタウン・ジャパンのイベントにも出展。

今後は、合鴨農法の実践、移住支援などをしていく予定で、物質的・経済的・精神的にも、石油に頼らない暮らしの技術を習得し、自らの生活で実践し、地域を巻き込んだ活動にしている。

トランジションジャパン <http://www.transition-japan.net/>
トランジションタウン都留 <http://ttsuru.blog66.fc2.com/>

3. グループワーク

ここでは、教育・経済・エネルギー・食の4つのテーマに分かれて、それぞれの「石油に依存しないかたち」について話し合った。出てきた意見はグループごとに模造紙に書き込んでいった。一通り話した後、それぞれで話した内容は模造紙をもとに全体で共有し、メンバーを変えてさらに話し合い、書き足していく、このようなワークを数回重ねていった。

各テーマで次のようなことが話された。

- ・**教育**：子供から市民までを対象にした体験学習(農、昔の生活をもっと、教育のオープン性、地元学)
- ・**経済**：半農半X、物々交換、地域通貨、GNH(お金がたかさん動く=豊かさなのか?)、信頼の再構築
- ・**エネルギー**：売電のしくみ、非電化製品、薪・太陽エネルギー、行政の役割(補助金制度など)
- ・**食**：薪、物々交換、杉を雑木林に、自給させる法律?(いや、やっぱり自発性が大事)、虫を食べる(?)など

さらに次のワークでは、参加者の出身地域ごとにグループを作り、それぞれの地域でどんな取り組みができるか、どんなことがしたいかを話し合った。各グループで次のような話が出たことが、最後に発表で共有された。

- ・**東北**：雪と暮らす文化を見直す
- ・**都市部**：自販機より量り売りで雇用促進、レンタサイクル、コンビニ規制
- ・**千葉**：千葉の魅力を再確認しよう
- ・**山梨**：坂の多さを活かし自転車をもっと利用、登山電車
- ・**京都**：観光分野からのアプローチができないか

【最後に】

参加者からは“住んでいる地域で、出来るところからスタートする考え方がいい、やってみたい”との感想が出た。

また“T.T.はどうやって立ち上げるのか?”、“立ち上げ時の地元の人の反応は?”など具体的な運営への質問もあった。

“地産地消で独立するということは、トランジションタウンは閉鎖化していくのではないのか?”という疑問も出され、それに対して“完全自給はありえないので、ネットワーク化していくことが大事なのは”という話をした。

2 日目夜

JEEFの集い

司 会 :	(社)日本環境教育フォーラム理事 佐藤初雄・村上千里
JEEFについて	(社)日本環境教育フォーラム理事長 岡島成行
JEEFの現況	
グループディスカッション	環境教育の悩み、課題 JEEFへの要望

JEEFの集い

司会：(社)日本環境教育フォーラム理事 佐藤初雄・村上千里

進行役は、国際自然大学の佐藤初雄と持続可能な開発のための教育の10年推進会議の村上千里です。よろしくお願ひいたします。実はここにいる全員がJEEF会員なんですよね。これから約1時間お付き合ひいただきしたいと思います。

最初に、理事長である岡島から、ご挨拶とJEEFの経緯などについてお話をいたします。



JEEF(社団法人日本環境教育フォーラム)について

みなさんこんばんは。理事長の岡島です。3分の1くらいの方はもう理解されているか、お聞きになっていると思います。初めての方もいらっしゃる。簡単にJEEFというのはどんなところなのか説明いたします。日本環境教育フォーラムは1987年、この清里で生まれました。それ以来、私は大体1回も休まないで、この大会に出ていますけれど、23回目、飽きずにやっております。



今は、JEEFは環境教育の普及ということだけを目的としたNGO活動をしております。Non-profitのNPOでもあります。それから国で決めた財団、社団ということになりますと、社団法人になっております。これもお金がなくて、財団法人にはなれないで社団法人になった経緯があります。

そして、我々は今、環境教育を大きく分けて、都市型の環境教育といいますが、新宿で損保ジャパンと一緒に開催している市民のための環境講座。これももう18年続けております。その他、アサヒビールと協働したり、新宿御苑での仕事、環境省の仕事をしたり、一緒になってジョイントです仕事が多いですが、こちらはお金がありませんから、お金を出してもらって、こちらは頭を出すということで、事業を進めております。それを都市型で、都会の中でそういう活動すること。

それから清里で始めたときからの目標ですけれど、自然体験活動を普及する。日本中の子供達は、大人も含めて、世界の一般的なレベルから見ると、圧倒的に自然体験が足りない。自然のことについて知らない、感じていない、ということが痛切に感じられておりますので、何としましても子どもから大人まで、なるべく多くの人に自然を好きになってもらいたい。そのための様々な活動をやるというのが2番目ですね。

(社)日本環境教育フォーラム理事長 岡島成行

3番目はこの10年くらい増えてきていますが、途上国、中国やインドの環境教育の手伝いをしようと思っています。今のところインドネシアが中心ですが、世界環境全体を考えると、やはりインド・中国における環境教育というのは、地球全体の死命を制する非常に重要な課題でありますので、JEEFとしてはそこに向かって、これからも力を注いでいきたいと考えております。

私は環境問題の新聞記者を30年くらいしていましたけれども、20世紀後半、それから21世紀にかけて環境問題は悪化する一途です。長い間取材をしていましたが、一つもよくなっておりません。全部悪くなっている。モントリオール条約でオゾン層が若干改善の兆しを見せておりますが、全ての環境問題、特に地球環境問題といわれるものは、悪化の一途をたどっております。21世紀は非常に危機的状況になると思っています。鳩山さんがCO₂を25%削減すると言いましたが、個人的にはそれでも足りないと思っておりますけれど、とにかくかなり頑張らないといけない状況になってきている。そういう中で、やはり現時点でも地球環境問題の危険性について、まだまだ感じていない、よく認識していないという方がたくさんいらっしゃると思います。特に政治のリーダー、経済界のリーダーの中でもほとんどわかっていない人がいる。そういうことで、環境教育の普及といいますが、環境について正しい知識を理解していただくことは、まだまだ先進国にも必要だと思います。

そして、地球環境がどんどん悪くなっていくわけですから、どこかで歯止めをかけないといけない。歯止めをかけて、良い方にもってくる。そのためのキーワードはいろいろあるかと思っております。環境教育というのは非常に大きな役割を果たすのではないかと思っております。特に途上国においては、インド・中国。もうCO₂は中国はアメリカを抜いて、インドはまもなく人口で中国を抜く。そうなりますと、インド・中国だけで地球全体の許容量をはるかに超えるようなことは、もう近々出てくるわけですね。経済発展を遂げれば当然CO₂が出てくる。その辺のところをどうするか。我々日本人が、中国の工場にいちいち排煙脱硫装置とか脱臭

装置とかいろいろなものをつけていっても、あれだけ大きい国では間に合いませんね。やはりその国の方々が、自分たちでもって環境に対応してもらわなくてはならない。そのためにはどうしても基礎的なレベル、ハイレベル、いろいろな面で環境教育を普及しなければいけない。日本の役割でもあると思います。

我々の勝手な自負なのですが、日本環境教育フォーラムは政府でもない、企業でもない、民間の市民の集まりですけれども、そういう意味では地球のこれからの21世紀の最も大事な部分、なさなければならぬ部分を担っていると自負しているわけです。とは言っても、金はいつもないし、人も少ないし、苦勞の連続ですけど、志、立てる旗、これは世界第一線でやっていきたいという気持ちを持っております。

この参加費の中に会費が含まれてしまっているのですが、皆さん全員、今日から1年間は会員ですから、私の今申し上げたようなこと、人類の一員としてボランティア活動、もしくはプロとして、こういう道に進みたいという方がいらしたら、ぜひJEEFの中核に入ってきていただいて、働いていただければと思います。有給無給、理事、様々なことができます。我々は常にオープンですから、私が何をやりたいんだと言ってくれば、必ず窓は開きます。ただ理事などは年数が決まっているから交代しなければいけないのですが、基本的にはやりたい人を拒まないシステムになっておりますので、ぜひ皆さん、特に若い人、これから自分の人生を地球のために注ぎたいと、非常にピュアな情熱を持っている方などは、非常によろしいかと思えます。

これからJEEFの理念とか、どんなことをしているのか具体的なことをお話申し上げていきますが、私は最も大事なところ、我々の目指すもの、我々がしている活動の意味についてお話ししました。どうもありがとうございました。

司会(佐藤) :

JEEFには理念とそれから憲章というものがござります。これを作るのにけっこう大変だったという苦勞話もせっかくですから含めて、中野さんに説明していただきたいと思えます。

(社)日本環境教育フォーラム理事 中野民夫 :

理念検討委員会というのをつくり、広瀬さんのホールアースに合宿して、いろいろ知っている人からこれまでの歴史を聞いたり、いろいろな活動や今どんなことが起こっているかを出して、みんな

で作っていきました。本当に夜更けまで話して、それを翌朝こんな文章案にしました。

自然体験を通した環境教育、これはもう譲れないですね、JEEFがやってきたことです。環境教育にはいろいろございますけれども、自然体験を非常に大事にしている。人と自然だけではなくて、やはり人と人、それを通してみんな生き方を見直したりして、人と社会、地域に関わっていく。そして、この検討をしていた頃に明らかになってきたのは、やはり地域に根ざした生き方。どこか特別なフィールドでプログラムをして、また都会に帰るというだけではなくて、本当にそれぞれの地域に根ざした生き方、暮らし方を深めていく。そういうことを通して、新しい社会のいろいろな生き方を目指している方もいますから、ライフスタイル、そしてビジョンを描いて創造していくんだということが込められております。

また、より広い分野、ESDみたいなことも出てきていて、環境教育だけではなくて、開発とか平和とか人権とかジェンダーとかいろいろなことありますよね。行政も企業もみんな持続可能な社会目指して動き始めています。その広い分野との交流や協力を進めて、広範な環境教育の実践や推進のための仕組みづくりをする。やはり環境問題を解決していくときに、法や規制や仕組みみたいな大きいものと、環境技術と、人の意識の3つが必要だとよく言われていて、その中の人の意識を主に環境教育でやってきたのですが、環境教育や実践や推進をするためには、より大きな仕組みづくりというのが大事です。その仕組みづくりを通して、世界の課題である持続可能な社会を作っていくことに貢献するということが、込められている文章かと思えます。

- JEEF 憲章 -

私たちが大切にしている「自然体験を通した環境教育」は、「人と自然」「人と人」「人と社会」をつなぎ、地域に根ざした生き方、暮らし方を深め、新しい社会のライフスタイルやビジョンを描き、創造します。私たちは、より広い分野との交流や協力を進め、広範な環境教育の実践や推進のための仕組みづくりを通して世界の課題である持続可能な社会づくりに貢献します。

JEEF(社団法人日本環境教育フォーラム)の現況

<http://www.jeef.or.jp>

司会(佐藤) :

続きまして事業の方についてですが、JEEFのホームページを見ていただきますと、非常に多岐に渡った事業をしておりますね。その中から海外の事業でツバルにことについて、事務局のスタッフに簡単に説明していただきます。

(社)日本環境教育フォーラム事務局員 鶴ヶ谷優子 :

この「ツバル青少年友の会」というものは、小池百合子さんが環境大臣だった頃にツバルを訪問された時に、ツバルの学生をぜひ日本に受け入れてほしいという要請があったらしいのです。それを受けて、JEEFが事務局になって留学生を招致してくれないか

ということで、ツバル青少年友の会という事務局をまた別組織という形で立ち上げて、だいたい20社くらいの企業さんから会費をいただく形で支援をいただき、その資金をもとに、ツバルから中学校を卒業した女子2名を去年の4月から呼んで、日本に住んで、日本語や他の教科の勉強をしたり、今年高校に進学しまして、日本の高校生たちと一緒に高校生活を送っています。1人は体調不良でツバルに戻ってしまったのですが……。このツバルの留学生を通して、ツバルと日本がつながりをつくるということと、その子が架け橋となって、日本でツバルのことを情報発信したり、ツバルで日本の話をしたり、そういったことをできるように考えています。

司会(佐藤) :

そのツバルの留学生の受け入れをされている先生がこちらにご参加されていらっしゃると思いますので、どんな様子か手短にお話いただければと思います。

児玉芳郎さん:

今ご紹介ありましたように、ツバルからの留学生はティローさんといいますが、なんと来日したときは15歳。一年間JETという日本語学校で学ばれて、たった1年間でほとんど日本語マスターしました。日常生活はもとより、学校の授業もすべて日本語で行われていますが、そこで学んでおります。とにかく熱心で、ちょっと日本の中高生とは全然違ういろいろな意味で前向きなお嬢さんで、これから楽しみだと思いますが、なにせ日本との生活習慣の違い、いろいろなことでまだまだ彼女は悩んでおります。多分、これから大いなる飛躍をして下さると思います。何

よりもやはり自然が大好きで、私も実はそういうクラブをもっているのですが、そこへ真っ先に馳せ参じて下さいまして、自然観察会などにも随分たくさん参画され、どんどん吸収されているところです。また様々なかたちでみなさんにご支援いただくこともあるかと思います。ひとつよろしくお話ししたいと思います。

司会(佐藤) :

先ほど岡島さんの話の中にもありましたように、企業と連携した18年も続いている損保ジャパンさんとの公開講座があるようですが、若林さん、一言二言お話しただいていいですか。

(社)日本環境教育フォーラム理事 若林千賀子

「市民のための環境公開講座」18年続いていまして、岡島さん・阿部先生・瀬田さん・若林の4人で司会を担当しております。新宿駅西口にある損保ジャパン本社のビルで、火曜日の18:30から行っています。

明後日もまさに講座がありまして、多様性のテーマで3回目の2回目ですね。トキの野生復帰連絡協議会会長の高野毅さんをお招きして、トキの野生復帰は自然と共生の目標だということをやります。ちなみに司会は私ですが、もしお聞きになりたい方はJEEF事務局に1回連絡をすればよろしいかと思っておりますので、ぜひ来てください。JEEF会員は無料で受講できます。

来週は、昨日も今日も分科会でご活躍された湊秋作さんが、森との共生アニマルパスウェイということでじっくりとヤマネの活動と人間の共生についてお話をいただきますので、ぜひ参加していただければと思います。来年以降もまたありますので、ホームページ等で見てください。 <http://www.sjef.org/kouza>

グループディスカッション

司会(村上) :

今だいたいJEEFがどんな柱でどんなことをやっているかというのを聞いていただきました。こんな短時間で全てわかるわけはないので、この後の時間は、小グループになって、JEEFは具体的にどんなことをしているの?というようなことを聞いていただいたり、もしくはせっかくJEEFの会員になったのだから、こんなことできないか、こういうこともしてくれたいのになというように、会員の皆さんとざっくばらんに意見交換できるような時間にしたいと思います。

小さいグループを作るにあたって、事前をお願いしていたサポーターの方と、理事の皆さんに各人が関わっているキーワードを出していただきます。参加者の皆さんはキーワードで集まっていたり小さいグループを作ってください。で集まっていたら4~6人集まったら座ってください。これから皆さんに時間を約20分差し上げます。そこで話し合ってください。テーマは2つ。1つは環境教育で今こんなことが悩ましいということで、悩み打ち明け大会。そしてもう1つはJEEFに対してその悩みを解決するために、

JEEFにこんなことをしてほしいという要望を、ぜひ出していただけたらと思います。そのあと一部発表していただき、あとは記録として回収をさせていただきたいと思っております。

キーワード :

田舎暮らし / エコツーリズム / CSR / 公害教育
ビジョンと実践をつなぐ / 昆虫を通して環境教育を学ぼう
生物多様性 / 社会的起業 / 地域・異文化・日本 / 企業との協働
自然保護 / 生きもの / 限界集落で生きよう / 人材養成
海辺の体験活動 / 持続可能なライフスタイル / 日本の農業
ネイチャーレクリエーション&クープ / JEEF 学生会員
宿泊型の自然体験、キャンプ

梅崎靖志さん :

持続可能な暮らし方、ライフスタイルをテーマに話をしました。悩みはいろいろ出たのですが、生物多様性って何?ということが

なかなかわからない、わかりにくいという部分があります。やはりそれがわからないのはなぜか？ということで、日常生活の中で自然とのつながりというのがわからない。つながりが見えないので、生物多様性なんて言われてもピンとこなくて当たり前だろうというところがあって、どうすればいいんだろう？ということが悩みの一つとして上げられました。

JEEF にしてもらいたいこと、自分たちがすることでもあると思いますが、2つ。

1つは、生物多様性の必要性や重要性を端的に説明する、例えば先程のJEEF憲章のような、短い文章で一般の人に説明できるようなものがあったらいいんじゃないか。

もう1つは、多様性を守るとはどういうことか。これは“自然の質を保つ・上げる・下げない”ということとすれば、どうすれば毎日の生活の営みの中で結果としてそれができるのか。その必然性を持つ、そういう暮らしぶりというものはどういうものなのか、というライフスタイルの提案というようなことがもしできれば、生物多様性ということと絡めて、なにかプラスになるのではないかという話でした。

中澤朋代さん：

このグループは、長期の宿泊体験やキャンプをやってらっしゃる方3名、学校団体を受け入れている方3名という、ほとんど現場のインストラクター、インタープリターの方が多かったのです。その中で環境教育を宿泊も生活も含めた部分で一緒に指導していくのに、けっこう限界があるねとか、先生もそこまで求めてないねとか、そもそもそういう宿泊体験の中で、どうやって環境教育を表現していくんだらうという悩みがいろいろありました。

結局1つのところで全部やるのは大変だということもあるの、それぞれプログラムを中心に展開していく人、生活体験を見ていく人、それから例えば先生とインタープリター、保護者とインタープリター、子供たちも低年齢化が進んでいてなかなか高度なことは伝えられないけれど、それを送り出す人たちとか、いろいろな立場の人たちがこういう活動に関わるように広がってきているので、現場も対応できてないところがある。

できれば各組織・各人の立場のことが分かるような何か情報交換の場や、それからもう少し小さな地域での具体的なネットワークを推し進められるようなことを、JEEFへの要望というか、自分たちの活動でもありますけれど、もう少し細やかに進めていけたらいいなという話が出ました。

中野民夫理事：

こういう小グループの集まりを清里ミーティングの1日目にやって欲しいという、非常に具体的な要望をいただきました。というのは、ここでつながりの場を作ってくれるのは大変嬉しいのだけれど、この場はかなり内輪的に見える。初参加の方が4人いて、あちこちグループができていたり、久しぶりに会った人同士の親しげな様子を見たりすると、入りにくいということがあって、初参加の人がちゃんと声を聞いてもらったり尊重したり、お互いに境遇が同じだという人が話せるような場を、1日目の早い時期に

やってほしい。具体的な要望でした。

高野孝子理事：

1点目は、JEEFはスペシャリストだけではなくて、もう少しマネジメント関連の育成などもやってはどうか。特に言うならば、これから企業との協働が増えていくという予想のもと、例えば企業の方からNGO・NPOの協働をする担当者の人たちとか、派遣されてきた人たちに対する研修、そういったこともあってほしいのではないかと。

2点目は、地方にいるとよくわかるのですが、里山・地域・田舎ということで活動していると、やはり農水省がどうしても深い関係になってきます。組織としても、そういったところとの関係作りをしていくということが大事なのではないかということ。

3点目は、具体的にいうとわかりやすいのですが、ちょっと抽象的になります。いろいろな環境教育のテーマが私たちの身近なところでのテーマもあるのですが、わりと一方的なことだけ強調されていることが多いので、もう少し総合的な広い目をもった、バランスのとれた普及啓発の仕方というのをJEEFとしても気をつけて、これから研修などに活かして欲しいなということです。

小澤紀美子理事：

ここでお話し合いましたのは、JEEFへの要望。先ほど中野さんからの要望がありました。各テーマ別に話し合えるのは、今このような会が開かれている時だけなのです。先ほど理事の方、サポーターの方が出したような、各テーマ別に立ち上がる。そういうテーマを話し合うサロンみたいなものを1ヶ月に1回とか、やって欲しいという要望がありました。

佐々木豊志理事：

テーマは田舎暮らし。地方の若者が多かったので、要望だけ言います。要望は、JEEF青年部を作りたい！です。明日、設立準備会したいので応援してくれということです。

それから四国の方から地方ミーティングのことで、地方でもっと細かくいろいろなミーティングが欲しいので、四国ミーティングやります。今までまとまっていた地域ミーティングは中・四国ミーティングでしたよね。もう少し細切れにやりたいので、四国の事務局をJEEF応援して下さいということです。

村岸隆行さん：

チーム農業です。人と自然、人と人、人と社会、時代は農業です。簡単に言うと、農業やりたくても高い壁がある。そこで、時代は嫌なことにはNOということで、NO業委員会の解体をJEEFにお願いしたいと出ています。

司会(村上)：

様々なご意見ありがとうございました。すぐできることできないこといろいろありましたし、発表されていないものも紙でメモが残っていますので、あとでまとめたいと思います。

この場はいよいよお開きとなりますが、ずっと聞いていただい

ていた柘植係長がいらっしゃいますので、環境省はどう見ているのか、この辺をコメントしていただけたらと思います。柘植さん、最後に手短かに感想あるいは逆に提案で、環境省としてJEEFに要望したいというようなお話があれば、一言お願いいたします。

環境省自然ふれあい推進室 柘植規江さん：

お疲れ様でした。皆さんが一生懸命お話されているのを聞いて、現場ですごく頑張ってるのだなと伝わってきました。きっとJEEFではこれからこの場だけではなく、今後も皆さんの気持ちを受け止めて、悩みを聞いてくれると思いますので、会員の皆様も、ぜひいろいろ連絡をJEEFと取っていただければと思います。環境省としても、それを応援していきたいと思います。

司会(佐藤)：

素晴らしい、まとめの心強いお言葉をいただきまして、ありがとうございます。では以上をもちまして、会員の集いをお開きにしたいと思います。どうもありがとうございました。



ディスカッションを経て皆様からいただいたご意見をまとめました。

環境教育の悩み、課題

田んぼ(農業)は環境教育がその後に、結びついている感じがしない=体験にとどまっている
農業と田舎体験は手段であって目的ではない。プログラムを通して、気持ち、気遣いを感じてもらおう。
入りやすい入口がわからない(イベント?とか)。
環境教育を将来につなげていく道が見えにくい。
高齢化・少子化。地域の小学校の困りごとを知りたい。
若者がいないと集落機能低下。小学生がいない、交通の不便さ
発信力が弱い。
街のペースでやって来る人たち(BBQなどで)の思いと内容にギャップがあり、体験活動にどうやって来てもらえるのか?
楽しさ重視の中に大切さをいかに伝えるか。体験の続きがない。
学校の先生の意識の低さ、自然体験の低年齢化に不安を感じる。
公害教育をどう環境教育に繋げていくか。知らない世代にどう伝えていくか。今後どう起こさないようにしてゆくか。
循環型社会を都市部だけでなく、ローカルのレベルまで落とし込んでゆくことが必要。
CSRに対する消費者の理解が足りない、会社・職場のポスの理解が足りない、単なる広告になってしまっている。
環境教育業界と一般企業とのつながりがいい。
持続可能な企業活動につなげるためにはどうすればよいか?
環境教育と、今そこにある危機との溝
どう伝えればいいのか?実践的な研修をしたい。
体験がどれくらい日常におちているのか?もっと生活に近い所でできないものか…。
各地の国立公園の地域の過疎化
話すのが苦手中、コミュニケーションの広げ方
地方の環境への地盤が弱い、ネットワークもやや難。
自然度が高いと価値観として伝わりにくい。
都会の青年・社会人に環境に目を向けてもらうための周知はどうすればよいか。
地域によって活動の温度差がある。

地域のしくみをどのようにつなぎ、作るか。地道な対話、大学の先生など、実践者の推進力、巻き込み力。
学校プログラムとどう合わせるか?
生物多様性を継続的に考えていって、長い活動にしてほしい。
生物多様性と生業との関係を深めたい。
広報活動の強化。
昔の農業と違う。
農業問題は子や孫、将来性に影響有り。
温暖化によって今まで生らなかった農作物ができる。動物が食べにくる。
環境教育に関わっている人が、人類と生きものに関わっていることを感じて行動しなければならない。
高齢者への教育も必要。高度成長期に子供の頃の生活スタイルを忘れ、大量消費の生活が当たり前になった。
環境教育という言葉がかたい。
プログラムで気づきを提供して、参加者が持ち帰った後に具体的な行動に結びついているか、見えない。情報ばかりで行動に移せていない。中味が伴っていない。
企業にとって一度始めた環境教育をいかに継続していくのか?
自社の職種と環境教育がにつながるには至っていない。企業の活動と環境教育をどうつなげるか?
環境教育が個々に分かれてしまつてつながりが薄くなっている。善悪単純化しすぎている。
どうやって地域の人たちに入ってきてもらって運営できるか。
学生の田舎暮らし支援(仕事がなく農村に住めない)、雇用対策。
若者が地域に住める環境づくり。
ビクターセンターの人手不足=環境教育の人材不足(やりたい人はいるがお金がなくて十分な量が確保できない)。
田舎と都会の価値観がわかちあえたらいい。多様性、違いをどういう風に認めるか。
生物多様性とは何か、漠然と理解できても、日常生活とのつながりが見えないために実感が伴わない。モデル例があるといい。

J E E Fへの要望

もっと多様な分野に活動を広めてもらいたい。
関西、関東の土壌は違うので、関西など地域にも配慮を。
企業のCSR担当者に面接前に紹介して欲しい。
新人、企業人、起業人のネットワークを作って欲しい(NEC「森の人づくり講座」のOB会みたいな)。
ギャグのセンスを教えて欲しい。
若い会員を増やして欲しい。
J E E Fに窓口、つなぎ役(横の連携、センター的)をしてほしい。
地域のすばらしい素材があるから来て欲しい、ムーブメント紹介等広報の支援を！
各組織や立場の情報を知りたい。
小さな地域で具体的に繋がる方法を、つないでいて欲しい。
もう少し広い活動を希望。
他学会との連携をもっと持って欲しい。
子どもたちが自然に興味をもつために昆虫の役目は大きい。
JEEFはかつて虫屋がいた。
他の市民団体(ゴミ問題など)との交流、活性化。
ファシリテーター養成。
エコリーグ(学生環境関係団体)などへのJEEFの講師派遣&共同事業、交流会(例：青年ミーティングなど)。
閉鎖的な空気を感じる。
設立当初はもう少し「公害」について取り組んでいたが、現況「自然環境」へシフトしているのでは。もう少し「公害教育」に取り組んだ方がよい。
CSRについて企業に投げかけてほしい
CSRに関心がない企業に対して問題提起をしてほしい
第三者の評価をしてほしい、ベストプラクティスを出して欲しい、特に教育面で
何が本当のCSRか、を伝えて欲しい。
切り拓いていく人の育成、政治家向けの環境教育をしてほしい。
若手の「新しいムーブメント」とは何か、具体的に教えてほしい。
広報、マーケティングについて教えてほしい。
環境教育の人材がいることをアピールしてほしい。
ESD-Jのようなより積極的な社会への働きかけをしてほしい。
資金調達のノウハウを教えてほしい。
自然学校ムーブメントを作って欲しい。
地域ごとの単位でのネットワーク作り。
地域の環境への地盤が弱く、自然豊かな地域での環境教育むずかしい。打破するためのアイデアがほしい
テーマ別サロンを開催して欲しい(誰がどんなノウハウを持っているかが分からない)。
スペシャリストだけでなく、マネジメントの分かる人
外来生物問題、生物多様性など諸問題に発言していかなければならない！
会費、参加費を下げて欲しい、年会費6000円の内訳を知りたい。

学生割引をつくり、学生を呼び込む
農業生業との連携はないのか(農林水産省)？
JEEFにぜひ、農業委員会の解体を。なかなか農業に参入できない。
一般の立場の人への発信の仕方。受け手にわかりやすい言葉が必要。
子どもから高齢者への野生生物に関するプログラム作りたい。
他の生き物たちの事も考えるためには？関わりやすくする仕組みが必要。
企業と企業をつなぐ情報交換、環境教育を企業同士でコラボする手助けを！
JEEFの一般的知名度が低すぎる！もっと知名度を上げてほしい。
企業に情報を投げて欲しい。
清里に来てつながりが可能性を広げることを実感、こういうつながれる機会をもっと！
清里ミーティングは内輪的。立ち上げ当初の人が中心で、知っていること前提に話しかが進んでいる感がある。初体験の人が来年も来られるように。
使われる単語が難しい
繋がっている人に入るのは難しい。このような小グループの時間を1日目に！
環境教育業界、人材の雇用を集約して配分するようなシステムほしい(一般の雇用ではない世界) = 人材のマッチング(雇用まで面倒みる人材育成)。
JEEF 青年部創設。
地域ミーティングももっとたくさん開いて欲しい 来年、四国でやるので事務局手伝って！
ギャル社長を理事に。
特に若い人に向けて、メディアにセールスプロモーションして！
一般の人に広めるための共通語 ~ 文章で環境教育を端的にまとめほしい~
暮らしぶりとは？どうすればできる？具体的ライフスタイルの提案。
企業から派遣されていた人たちに対する経営研修。
里山といえば農水。組織として農水省等との関係作りも必要。
環境問題それぞれのテーマで、バランスのとれた総合的な啓蒙をしてほしい。



オプションプログラム

環境教育プレゼンテーション

1日目:11月14日(土)午後 / 清泉寮新館ホール、本館ホール、

清泉寮ハンターホール、アンデレホール

1日目:11月14日(土)夜 / 清泉寮本館ホール、ハンターホール、アンデレホール

八ヶ岳自然ふれあいセンター内八ヶ岳ホール

2日目:11月15日(日)夜 / 清泉寮本館ホール、ハンターホール、アンデレホール

早朝ワークショップ

2日目:11月15日(日)早朝

生物多様性を映像で感じよう～いっしょに生きる道～

映画「西の魔女が死んだ」おばあちゃんのお家ツアー

ゼロからの火起こし術

3日目:11月16日(月)早朝

生物多様性を映像で感じよう～いっしょに生きる道～

当日募集ワークショップ

3日目:11月16日(月)午前

環境教育プレゼンテーション

1日目：11月14日(土)夕方 会場：清泉寮新館ホール

屋久島集中講義で「自分と自然とつながり直す」試み

実施者：中野民夫（立教大学院兼任講師）

内容：立教大学院 21 世紀社会デザイン研究科の「ライフサイクル論」という授業を、屋久島での 2 泊 3 日の集中講義で行っています。「ライフ」を人生といのちの両面から捉え、深い森の世代交代の姿から持続可能な社会デザインへのヒントを得る試みです。

環境教育人材育成の限界と可能性

実施者：川嶋 直（財団法人キープ協会）

内容：環境問題解決のための環境教育。環境教育推進(普及)のための人材育成事業。この環境教育人材育成事業はここ 20 数年盛んに行われてきましたが、その成果は？環境教育人材育成の可能性と限界について考えました。

1日目：11月14日(土)夕方 会場：清泉寮本館ホール

環境教育研究 20 年目の到達点と課題

実施者：降旗信一（日本ネイチャーゲーム協会）

内容：20 周年を迎えた日本環境教育学会の歩みとこれまでの研究の蓄積と到達点について、学会誌 20 周年特集号の紹介とあわせてご報告しました。

新たな課題の解決 = 自然体験学習 ×

実施者：荒井一洋（NPO 法人ねおす）

内容：ねおすでは、自然体験学習と何かを組み合わせることで社会の課題解決に貢献することを目指しています。これまでの活動事例の紹介と、今後の は何か？についてお話ししました。

1日目：11月14日(土)夕方 会場：清泉寮ハンターホール

小学校の総合的な学習での森林環境教育

実施者：小平斐美・辻 沙季子・佐藤敬一（東京農工大学農学部）

内容：平成 21 年は多摩市立東落合小学校の 3 年生に自然体験や樹木や森林が好きになるプログラムを、稲城市立長峰小学校の 5 年生に自然体験や森林の機能、林業を理解するプログラムを総合的な学習の時間で行っています。

カリフォルニアの先生のための森林環境教育セミナー

実施者：佐藤敬一（東京農工大学）

内容：昨年のカリフォルニア州の先生のための森林環境教育セミナー(FIT)に参加したので報告しました。セミナーの内容は PLT やプロジェクトワイルドなどの教育手法、森林や環境問題、林業や木材産業などの理解など。

1日目：11月14日(土)夕方 会場：清泉寮アンデレホール

環境に配慮した暮らし方 建築～開墾～移住～就農

実施者：加藤大吾（アースコンシャス）

内容：妻 1 人、子供 3 人、開拓、建築、移住、就農の 5 年間の軌跡を報告しました。廃材を多用し自分で建築。地域に入り込んで土地を借りて就農。やったらできた！パーマカルチャー的暮らし方。

自然エネルギー、パーマカルチャーを活かした場づくり

実施者：黍原 豊（NPO 法人岩手子ども環境研究所・森と風のがっこう）

内容：楽しみながら地域にある資源を活かした循環型の生活が体験できる「森と風のがっこう」での取り組みから、自然エネルギーとパーマカルチャー をテーマにした環境教育を実施する上で大切な視点について考えていきたい。

1日目：11月14日(土)夜 会場：清泉寮本館ホール

旅行業をテコにした地域活性化戦略

実施者：山川勇一郎(ホールアース自然学校)

内容：社会環境の変化により、自然学校も環境教育や自然体験に加え、都市農村交流の中間支援のコーディネーター的役割が期待されています。第三種旅行業をテコにした地域活性化への取り組みとその展望について紹介しました。

報告！海辺の環境教育フォーラム2009in石垣島

実施者：大堀健司(海辺の環境教育フォーラム2009in石垣島実行委員会)

内容：今年3月、沖縄石垣島で第9回海辺の環境教育フォーラムが行われた。テーマは「海の未来・子どもたちの未来」。今回は地域の人も巻き込んだお祭りスタイルや、高校生力を借りたりリユース食器の普及にも挑戦しました。

日本の環境教育の実践報告「里山の夏休み」

実施者：新田章伸(NPO法人里山倶楽部)

内容：きっと「トトロ」も棲んでいる里山で、「千と千尋」の油屋のように一軒のお家に多様な命が集まって過ごした夏の一週間、里山キッズクラブの特別企画「里山の夏休み」を日本の環境教育の実践事例として紹介しました。

桂川ウェルネスパーク?里山体験の試み

実施者：島貫 陽(自然教育研究センター)

内容：山梨県大月市にある桂川ウェルネスパークは、今年度からアメニス山梨(桂川)グループが指定管理者として管理運営しています。4月から半年間の記録をご紹介します。

1日目：11月14日(土)夜 会場：清泉寮ハンターホール

里山+エネルギー=資源エネルギー庁長官賞 受賞！

実施者：遠藤 亮・金田裕子(柏崎・夢の森公園)

内容：持続可能な暮らし方を考える場として、2年前に開園した柏崎・夢の森公園。循環の象徴である里山をフィールドに、エネルギーという地域性をかけあわせた活動が評価されました。今回は、その裏側もご紹介しました。

長野・東京ガスの森と環境保全への取り組み

実施者：翠田 文(東京ガス株式会社)

内容：東京ガスでは長野県御代田町の「長野・東京ガスの森」において、植林や間伐、動植物の観察を通じた環境体験学習の実施、生き物の調査など、森を保全し自然を学べる機会を提供しており、その一連の取り組みをご紹介します。

J-POWERエコ×エネ体験プロジェクト

実施者：好川 治(J-POWER)

内容：J-POWER グループがキープ協会と協働で取組んでいる体験型エネルギー環境学習支援の活動です。今年も小学生親子と大学生を対象に開催した自然と水力発電所のつながりを学ぶエコ×エネ体験ツアーを紹介しました。

「トヨタの森」と環境緑化・教育活動について

実施者：池上博身・杉山時雄(トヨタの森)

内容：光と風を導入することで元気な森づくりを進めるとともに、豊かに回復した森で学童向けの自然ふれあい体験指導を行っています。今回は、その考え方や体験指導の実際を披露させていただきました。動を森づくりに結び付ける取り組みの中に森林環境教育への支援メニューを盛り込むことで企業との連携を促進しています。

1日目：11月14日(土)夜 会場：清泉寮アンデレホール

紙で出来たお箸<Papyrustick>のお話**実施者：宮内礼奈 (NPO 法人グリーンウェーブ)**

内容：使い捨て割箸の現状に少し触れ、紙で出来たお箸についてのご紹介をさせて頂きました。環境に配慮したお箸が様々ある中、「こんなお箸もあるんだ」と思って頂ければと思います。

ニホンミツバチで環境教育（蜂蜜を味わいながら！）**実施者：飯沼慶一（成城学園初等学校）**

内容：「ニホンミツバチ」は、在来種なので環境に順応している飼いやすいハチです。セイヨウバチのように薬をあげる必要もなく、セイヨウバチでは恐怖となる多様な生物との共存ができています。子どもたちが大好きなあまーい蜂蜜がとれる楽しい小学校での取り組みをお聞きいただきました。

川遊びのルールを広めよう**実施者：村井孝一（天竜川総合学習館かわらんべ）**

内容：「危ないから、川に行ってはいけないよ。」で終わってしまうのではなく、川のルールをしっかりと学んで、子どもの安全を守りながら、自然の魅力を引き出せる。そんなステキな大人になってみませんか？

森の木の实からつくるロウソクづくり**実施者：加藤春喜(NPO 法人白川郷自然共生フォーラム)**

内容：森とともに暮らしてきた白川郷の失われた文化の一つである 漆蝋 づくり。この冬、その幻の蝋作り体験を中心に、白川郷の生活遺産を訪ねるエコツアーを実施しましたので、その模様を紹介いたしました。

1日目：11月14日(土)夜 会場：八ヶ岳自然ふれあいセンター内八ヶ岳ホール

よそ者、若者、ESD～専門学校を核とした地域づくり～**実施者：田辺慎一（国際自然環境アウトドア専門学校）**

内容：農村地域のだ真ん中に建つ、田んぼに囲まれた専門学校。そこには、北は北海道、南は奄美大島から学生たちが集まってくる。旧妙高村の地域づくりを事例に、環境教育や野外教育を学ぶ若者のチカラとその可能性を考えてみたい。

遊牧民キャンプの「学生」と「子ども」**実施者：遠藤 隼（ホールアース自然学校）**

内容：キャンプに参加する子どもにとって親でもなく、先生でもない、一番歳の近い「大人」。それが「学生」です。遊牧民キャンプ(ホールアースの夏キャンプ)の中で「子ども」が「学生」と過ごし、「子ども」は、「学生」は、どのように影響があったのかをご紹介します。

ビデオ：高尾山にあつまる、愉快でステキな仲間たち**実施者：萩岡真美（虔十の会～ケンジュウノカイ～）**

内容：日本一の生物多様性を誇る高尾山に、トンネルが掘られようとしているのを知っていますか？「そんなの嫌だよ～」と思いついた愉快でステキな仲間たちが、高尾山の魅力を伝えようと【アノ手コノ手】で動き回っています。

「そうだ、京都に行こう」エコセンの実践より見えるもの**実施者：谷内口友寛（京エコロジーセンター）**

内容：「京(みやこ)エコロジーセンター/通称エコセン」。京都議定書発祥の地にある、都市型環境教育施設での取り組みをご報告しました。温暖化防止が叫ばれる中、現場で感じることは……。

2日目：11月15日(日)夜 会場：清泉寮本館ホール

日本の農業はどうなるのか？

実施者：徳永 豊（スリーヒルズ・アソシエイツ）

内容：日本の農業が心配である。安心安全が叫ばれ、街のスーパーで買い物をしている主婦たちが不安そうに品定めをしている。みなさんはだれがどんな環境で作っているのか知っていますか。

自然とつながるパーマカルチャー的暮らしのススメ

実施者：梅崎靖志（安曇野パーマカルチャー塾）

内容：環境教育の活動と日常生活をどのようにつなぐか、というのは大切だけど難しいところ。パーマカルチャーには、そのヒントやアイデアが詰まっています。安曇野パーマカルチャー塾の取り組みを中心にご紹介しました。

洗剤を使わない4泊5日 田舎暮らし体験キャンプ

実施者：多田由希子（国際自然環境アウトドア専門学校）

内容：環境教育プログラムではなく、もっと身近なところで出来る環境教育とは？基本的な生活を通して「感じる」「考える」「やってみる」環境教育。東京の小学生を対象に行われた、田舎暮らし体験キャンプの事例をご紹介いたしました。

おやすみスライド

実施者：財団法人キープ協会

内容：清里の四季を音楽とスライドでお楽しみいただきました。

2日目：11月15日(日)夜 会場：清泉寮ハンターホール

NPO・企業・地域力で推進する小学校の環境教育

実施者：寺田正伸（埼玉県越谷市立大袋東小学校）

内容：大袋東小学校(埼玉県)はNPOや、企業、行政、地域など、多くの方を招き、それぞれの立場で行っている環境への取り組みを、低学年でも実感できるように体験を通して学ぶ場を作っています。その様子をご報告しました。

地域と連携した水田生物モニタリング：奥能登での模索

実施者：宇都宮大輔（「能登里山マイスター」養成プログラム）

内容：人材養成プログラムの中で、今年度から地域の農家と連携しながら水田の生物調査を始めました。途中経過ですが、取り組みのねらいや方法、今の段階でわかってきた問題点、今後の構想などをご紹介しました。

見分けられるかな？さとの生きもの ～世羅での模索～

実施者：猪谷信忠（せら夢公園 自然観察園）、日鷹一雅（愛媛大学）

内容：生物多様性は、生きものを見分ける(分類する)ことから。でもやってみると案外むずかしい…。見分ける“技能”を伝えるには？農村の生きもの保全の現場で地元と一緒に、生きもの帽子のシマゲンくんが模索しています。

2日目：11月15日(日)夜 会場：清泉寮アンデレホール

幼児教育×環境教育＝回答困難？！

実施者：神田浩行（環境共育事務所K&K）

内容：幼稚園、保育園の子ども達、保育者と環境教育“らしき”ものに取り組んで10年。田んぼにどんぐり、ダンゴムシ...でもそれが環境教育？10年でうっすら見えてきた幼児環境教育。今回まじめに問いかけます？環境教育って何ですか？

子どもたちに大人気！貝殻掘りプログラム

実施者：桐原佳介（財団法人中海水鳥国際交流基金財団）

内容：米子水鳥公園で子どもたちに大人気の企画をご紹介しました。なぜ野鳥観察施設で貝殻掘りなの？貝殻掘りってどんなプログラムなの？貝殻掘りの何が面白いの？などなど。

繋がり！発見！！ワンダーシップ

実施者：綿貫里美・藤代勇貴・室橋久美子（東京ガス株環境エネルギー館）

内容：横浜市にある都市型環境教育施設の環境エネルギー館(ワンダーシップ)。そんな来館者やあんなゲスト！？実はすごい繋がりがたくさんあるのです。そんな繋がりを楽しくご紹介しました。

早朝ワークショップ

2日目：11月15日(日)7:00～

生物多様性を映像で感じよう～いっしょに生きる道～

実施者：萩岡真美（虔十の会～ケンジュウノカイ～）

内容：ホットスポットの現場ではいま何が起きているのか？生物多様性のホットスポットである山口県の田ノ浦を舞台とした、自主制作のドキュメンタリー映画「ぶんぶん通信 no. 2」(監督・鎌仲ひとみ、配給・グループ現代)を観て、知って、感じてみませんか？



映画「西の魔女が死んだ」

おばあちゃんのお家ツアー

実施者：新田章伸（NPO 法人里山倶楽部）

案内人：山本 真（財団法人キープ協会）

内容：映画化のためにキープ協会内の森に建てられたオープンセットを訪れ、その物語のところに触れ、ゆったりした時間を過ごしました。自然と調和したおばあちゃんの暮らしを体感しました。



ゼロからの火起こし術

実施者：遠藤隼・山川勇一郎（ホールアース自然学校）

内容：寒い朝に目が覚めて一番欲しいのは暖かな火。キャンプの朝は「焚き火」から始まります。マッチもライターも使わない古来の方法で体を動かしながら火起こしに挑戦しました。



3日目：11月16日(月)7:00～

生物多様性を映像で感じよう～いっしょに生きる道～

実施者：萩岡真美（虔十の会～ケンジュウノカイ～）

内容：内容は11/15と同様です。

当日募集ワークショップ

若者たちで語りましょう ~生き方の模索~ + J E E F 青年部決起集会 ~20代
実施者：河野格 実施者：初山雄太

2つのワークショップでコラボしました。

セルフガイドや展示教材をマジで考える ~その5

実施者：吉永一休

初心者のための時間「オーデュボンとアメリカの自然保護」

実施者：柴崎文一

オオバコずもうに勝つ方法+！理学研究室の自然体験

実施者：三浦憲人

研究はムズかしいと思っている人、私も??ていますので、研究のムズかしさを少しでも解消する方法を一緒に考えましょう。

環境教育業界人のキャリア形成

実施者：山川勇一郎

20代後半~40代くらいの人中心に求ム！ 今までどんなことをしてきて、どういきたいのか、そんな夢語りませんか？

大学生とつくるハンズオン展示

実施者：佐藤 洋

評価して下さい。アイデア下さい。お話ししましょう フィールドミュージアムの展示。
展示コンセプト：都留の自然・文化・歴史

生きものを見分けるおもしろさを伝えよう！

実施者：猪谷信忠

"むずかし~"という分類アレルギーをなくすには？見分ける"技能"を伝える工夫を模索しよう！

生物多様性の考え方(フレームワーク)を身近な日常生活にあてはめることから考えてみる。

『サラリーマンの職場編』

実施者：空野仁志

(1) 職場の多様性を大事にするってどうなの？

一人ひとりの多様性(個性、きらめき)

仕事の多様性(職種、役割、頼りがい、支え合い)

働き方の多様性(職場環境、居場所、居心地、にぎわい)

(2) 他ではどうかな？

企業のCSR 本業/エネルギー系 と生物多様性の関係について

実施者：国安俊夫

東ガス・翠田様、J-POWER・好川様、トヨタ・池上様と実施します。

3 日目

全体会・閉会式

司 会 : (社)日本環境教育フォーラム理事 高田研・佐々木豊志

全体会

全員参加型パネルディスカッション

閉会式

閉会挨拶 : (社)日本環境教育フォーラム専務理事 川嶋 直

3 日目 全体会

司会: (社)日本環境教育フォーラム理事 高田研・佐々木豊志

これから全体会を行います。イス取りゲーム型、全員参加のパネルディスカッションをします。これから皆さんに今回の3日間を振り返ってどう思ったかの質問をしまして、各グループで話し合っていたら、これは皆さんに発表すべき意見だというのが出ましたら、イス取りゲーム方式(先着順)で前に出てきて発表してください。



全員参加型パネルディスカッション

第1問: 今回のミーティング中に一番びっくりした事は?

食事がおいしい! 特にデザートがおいしい! 感動!

発表者: 赤松良彦さん

アーバン・コミュニケーションズの赤松と申します。ありがとうございます。我々のグループで印象的だったのが、何人かいらっしまったのですが、食事がおいしい。特にデザートがおいしい。これまでもおいしかったのですが、デザートに感動しました。

牛乳プリンのおいしさ! 夕飯の残りが多い

発表者: 南栄助さん

J-POWER 電源開発の南でございます。私がびっくりしましたことは、牛乳プリンのおいしさ。食事はおいしかったですけど、特にその中でも牛乳プリンを、この3日間で5個食べまして、なんとか風邪が治って、明日から仕事ができそうです。一方、夕飯の残りが多いというも指摘といいますが、ちょっと驚かれたという方もいらっしまったので、その辺も記載させていただきました。

清里ミーティングで出会って“結婚”

発表者: 大堀健司さん

エコツアーふくみみの大堀です。清里ミーティングは出会いの場だそうですが、私じゃないですよ。藤村哲さんと奥さんの中澤朋代さんも参加してらっしまって一足先にお帰りになられたそうですけれど、昨年この場で出会って、先月結婚されたそうで、皆さん拍手をどうぞ。おめでとうございます。

すごく尊敬していた方から、「そんな1年先のことなんてわかんねーよ」と言われたこと

発表者: 古川久実さん

イス取りゲームに鈍くさくて間に合わなかった古川と申します。そんなに発表することではないと思うんですけど……。すごく尊敬していた方から、「そんな1年先のことなんてわかんねーよ」と言われたことが、一番驚きました。この人でも、こんなすごい人でも、1年先はわからないんだ、というのに、すごく励まされる思いがしました。ありがとうございました。

温泉 特に露天でのミニワークショップ

発表者: 鶴ヶ谷優子

日本環境教育フォーラムの鶴ヶ谷です。私たちのグループで一番話題になったのが、温泉。特に露天風呂でのミニワークショップです。1日目の夜に、女性の露天風呂に17人くらい入っていて、何かずっと話し合いが始まっていたのが、印象に残っています。昨夜のJEEFに要望という中で、あちこちで小さい会合を開いたらどうかというご提案がありましたが、温泉はあちこちにあるのでミニワークショップの場にいいんじゃないでしょうか。

第2問:生物多様性について考えたことはどんな事?

畑にヤギを入れたい

発表者: 福田峰子さん

森と人のネットワーク奈良の福田です。実は私、本業は農家を
してまして、ブルーベリーの果樹3000本の畑を持っています。
最近自分の畑でやっているのが、防鳥ネットをしないで鳥をたく
さん入れて、循環させるということ、もう1つは、あまり自慢で
はないですが、草を採らないということ、それからスーパーなど
の残渣を堆肥化させたものを全部土の中に入れていくというよ
うな、全部まわす農業をしようと計画しています。話を聞いてい
て、草を抜かないといけないうのですが、毎回刈払い機で刈るよりは
これにしたほうがいいんじゃないかなと思いました。そしたら畜産
もできるよなと思って、それでまたくぐるまわせるような状況
にしていったら、土壌も変わっていくし、おもしろいことができ
るんじゃないかなと思いました。

生きもの パラタク帽の売り込み

発表者: 猪谷信忠さん

広島からきました、せら夢公園の猪谷といいます。今日は、こ
れを売り込みにきたいなあと考えたのが…赤とんぼの分類がな
かなか難しいというのでこの帽子を作りました。生きもの多様
性を感じる、生きものを見分けていくという楽しさを、何とかも
うちょっと突っ込んで楽しくできないかというアイデアで売り
込みました。数年後、いや来年には商品化しているかもしれない
ので、みなさんぜひよろしくをお願いします。

何だかわからない

発表者: 寺田正伸さん

埼玉県の小学校の教員をしています。グループのみんなの意見
をまとめると、真ん中のクエスチョンが何だかよくわからない。
基調講演を聞きましたが、終わったときにわからないと言ってい
る人が周りにいたということ。2つ目のクエスチョンは、どう広め
ていったらいいかわからない。環境教育とかいろいろな場面で、
あるいは社内に持って帰って広めていかなきゃならないのだけ
れど、わからない。難しいなあってみんな考えている。みんな知
っているんだと思っていたという人もいた。知らないということ
を知らない人もいたんだなあとというのがグループのまとめりでし
た。

2つの視点がある

発表者: 大川諒さん

明治大学の柴崎ゼミナールから来ました。7人で意見を出してい
る中で、2つの視点があるということが出てきました。最初に生物
多様性を考えたときに、自然保護、自然を全部保全するという考
えからの視点と、人間を中心に考えるという2つの視点があ
って、どっちが正しいのかというのは決められないと思うのです
けど、2つの視点があるということがわかりました。

生物多様性というテーマの中で人間の多様性を考えた

発表者: 藤村哲さん

自然体験活動推進協議会の藤村哲と申します。私のところで話
したのは、生物多様性というテーマ、その中で人間っていうのは
多様なんだなということでした。人間の多様性ってことについ
て考えた人が多かったということで、書きました。



第3問:生物多様性を言いかえれば?

ばらばらでいっしょ(一緒)!!

発表者: 藤代勇貴さん

環境エネルギー館の藤代です。僕たちの班は、生物多様性をこう言い換えました。バラバラで一緒。多様性っていうことはみんなバラバラ、先ほども人間もみんなバラバラ、意見もバラバラというところなんです。別にそれが悪いことではなくて、みんな一緒だよという意味です。

みんな生きてる

発表者: 石川紘平さん

富山大学理学部の石川紘平と申します。自分たちの班で出たのは、みんな生きてるという言葉です。生命って40億年の歴史があるって言われているじゃないですか。その中で今、ここに生きていること自体がもうすごいことじゃないかと……。そして人間同士もこうやって清里ミーティングという場で横につながっているじゃないですか。人間とか動物とかという、そういうのをバラバラにしないで、みんなってまとめてそれで生きてるっていうことを実感するっていうのが生物多様性じゃないのかなという答えになりました。

こんとんの秩序

発表者: 池田浩子さん

今年度の環境省のエコインストラクター研修生の池田と申します。混沌の秩序と書きました。生物多様性ということ自体が、先程もちょっと出ましたけれども、みんなわかるようでなんだかわからない。特に一般の人にはわからない。わからないんだけど、自然の理というような秩序に基づいて何が動いている。そういうわからないものに対しても、秩序がある、何かあるはず、といったアプローチをそういう意味で見えてはどうかという意味を込めて、混沌の秩序と名づけました。

ぼくらはみんな生きている

発表者: 堀川郁江さん

高尾の森わくわくビレッジの堀川と申します。私たちのグループでは、いっぱい出たのですが、結局言いたいことは、皆さんご存知だと思いますけれど、“僕らはみんな生きている”っていうあの子どもでもみんな知っている歌です。本当に一番シンプルなところですけど、その歌を全部歌ってもらえば、なんかそういうことなんかじゃないのかなと、単純ですけど思いました。

言いかえない!

発表者: 小平斐美さん

東京農工大学大学院1年の小平斐美と申します。私たちの班では、あえてちょっと反論をさせていただきたいと思います。あえて言いかえない。言いかえずに生物多様性という言葉そのまま貫き通して、生物多様性について、どう説明するのか。それは難しく説明するのではなくて、いかに簡単に説明するのかという方が大事なのではないかと思ったので、ここで反論させていただきました。

ストップ少種化

発表者: 加藤大吾さん

ストップ少種化です。

MISS

発表者: 伊藤公之さん

生態教育センターの伊藤と申します。僕は、生物多様性を言いかえるなら、MISS、M・I・S・Sですね。失うというのを言いかえればいいかなと思いました。MISSの意味に、失うと、寂しい、というのがあと思います。生物多様性の中でも生態系の多様性とか種の多様性とか遺伝子の多様性とか、なくなったら寂しい、なくなったら取り返しつかないよ、ということ啓発していくことも大事かなと思いました。

みんな いなくなると すごく さみしい

発表者: 梅崎靖志さん

今のMISSを聞いて、このMISSって略語じゃないかと思いました。M:みんな I:いなくなると S:すごく S:さみしい。

S-1

発表者: 大西かおりさん

私はK-1じゃなくてS-1と書きました。基調講演のあとの質問でも出たのですが、人間本位じゃないかという話もあったのですが、私もそういう感じがすごくあるんですね。なので、種類の戦いか、スピーシーズの戦いみたいな感じでS-1というのわかりやすいんじゃないかなと思います。

第4問: 来年のミーティングで、みんなで取り組みたい事

人間ちえのわ テーマの多様性

発表者: 浪崎直子さん

国立環境研究所の浪崎といいます。うちの班では、人間ちえのわというのが出ました。人間ちえのわというのは、もつれた人間関係をほどこように、人間が手をつないで、ぐちゃぐちゃになったものをほどこきたいなこと。もつれた人間関係があるのか、それをほどこくということを最初にやってはどうかという話をしました。

2番目がテーマの多様性。今回みたいに生物多様性というテーマをドーンと置くと、それに引っ掛からない人もいるのでは?ということから、こういう形で少人数で集まるテーマ設定や、あるいはもう少し大きくなった集まりが持ててもいいのかなという話になりました。

暮らしの学校宣言

発表者: 梅崎靖志さん

安曇野パーマカルチャー塾の梅崎です。僕らのところは、暮らしの学校宣言をしよう、です。自然学校宣言というのが今から10年くらい前にありましたけれども、今、暮らしに根ざした活動をしている団体が非常に多くなってきて、やはりこれからは日常生活にどう働きかけるのか、そこに直接環境教育の活動が、非常に重要になってきているのではないかと。ということで、暮らしの学校宣言をしよう!ということになりました。

農のある暮らし パーマカルチャー

発表者: 渡邊 剛さん

初めて参加させていただきました、神社本庁の渡邊と申します。神主でございます。うちのところは、農のある暮らし、あとパーマカルチャーということがありました。パーマカルチャーという言葉もいいのですが、循環型の本来ある日本の元々の農業、農のある暮らしということも、もう一度見つめ直した方がいいんじゃないかという意見がありました。

リメンバー

発表者: 河野 格さん

山梨県都留市からきました、やまっこ倶楽部の河野と申します。僕たちのチームではリメンバーということ。過去この清里ミーティングで芸術だとか音楽だとか、精神性とか、気功とか、そういうものの切り口で環境教育を捉えたという時もあったらしくて、そういうもっと活動的な、もっとアクティビティの多いメニューにしたらどうだろうかということが出ました。

サラリーマンの職場編 学校編 PTA編 就活編 考え方を生活にあてはめる

発表者: 空野仁志さん

パナソニック AVC ネットワークス労働組合の空野です。午前中に私が実施した「サラリーマンの職場編」というワークショップの話をしました。それは、生物多様性をそのまま伝えるのではなく、包括的な考え方をもう少し身近なことに当てはめようと、みんなで考えてみました。具体的には、個性を大事にされたらどうなるか、大事にされなかったらどうなるか、いろいろな仕事や職場で、職場環境がよかったらどうなる、悪かったらどうなる、ということを話し合いました。そういうことをみんなで話していてけっこうおもしろくて、最後に応用編というのをしました。例えば学校なら、PTA や人間関係の中にそういうものの考え方を当てはめて、いろいろ身近にやってもらうとおもしろいねという内容でした。そのことと、例えばこういうキープみたいなのところにきて、自然そのもののことを学びながら自分の生活をどう当てはめるか、そんなことを考えたらとっても楽しいんじゃないかなという話が出ました。

招待チケット交換

発表者: 山川勇一郎さん

ホールアース自然学校の山川です。僕らの中で上がったのは、ここにたくさんのプロが集まっていて、各地でいろんな楽しいプログラムやってると思うんです。だけど、自分は実施する側で、他のプログラムにあまり参加したことないよなというふうな思って、ぜひ、無料の招待チケットなんかを持ち寄って、交換したらどうか。例えばホールアースでは洞窟案内できるから、ねおすの山のプログラムに参加させてよみたいいな感じで、パーティーしたらいいんじゃないかな、そんなアイディアがあるとけっこう楽しくなるなあなんて思いました。

実践

発表者：村井孝一さん

グリーンウッド自然体験教育センターの村井と申します。実践という意見を出させていただきました。来年の清里ミーティングのテーマがどういったものになるかはまだちょっとわからないですけど、その上で、そこで決まったこと、出来上がったことに対して、早速実践をしてみよう。つまり、ここに来ているソフトクリーム待ちをしている方々、食べている方々、売店にいる方々に対して、何か即実践をして、活動をしてみようというのはどうでしょうか。つまり腕の見せ所をつけてみよう、というアイデアを出しました。

学生(若者)のプレミーティング

発表者：高見 滋さん

山梨県都留市から来ました、やまっこ倶楽部の高見です。学生や若者にプレミーティングをして欲しいなと思います。学びたがっている人たちに、もっと若い人たちに、さらにそういう機会が増えるといいなあとします。

合唱 We are the world みたいに

発表者：志村昌彦さん

東京から来ました志村と申します。私は個人的にミュージカルが好きなのですが、先程「手のひらを太陽に」の歌の案も出てきたと思いますが、これだけ揃っているので、みんなで合唱したらすごくいい歌になるんじゃないかと思ひまして。マイケル・ジャクソンがこの前話題になりましたけど、We are the world みたいに、We are the 環境教育みたいな感じで合唱できたらおもしろいかなと思ひました。



閉会式

閉会挨拶

(社)日本環境教育フォーラム専務理事 川嶋 直

3日間どうもありがとうございました。どうでしょうね、今回のテーマの「生物多様性」について、皆さん何か見えてくることがあったでしょうか？今回も多くの若い参加者・初めての参加者をたくさん迎えることができました。こうやって血が入れ替わるといふか、そういうことって僕はすごく大事なことだと思ひています。

来年も11月に開催をするように考えております。新しい施設での、新しい何か生まれ変わった1回目のミーティングだったかなと思ひます。いろいろ不備もあって、来年にむけてこういうふうに変えていこうということも今考えているところです。

最後に、特に今回たくさん来ていただいた若い皆さんに、僕56歳で、さっき並んでいたおじさん達も50何歳なんですけど、このおじさんたちから期待すること、ということをお願いして、挨拶を閉じたいと思ひます。

今回はたくさん、こういうふうにして欲しいという提案をしていただいて、ああそうだなあ、と思うことがたくさんありました。僕達が期待することは、こうして欲しいと思ひたことを、ぜひ

皆さんが始めていただきたいというふうに思ひます。厳しい言い方をすると、依存しないで自分で始めてください、ということです。今回の清里ミーティングでも、僕らはそれなりに初参加者向けの新しい案内を作ったり、開会式の前に交流できる時間を作ったり、それから前日からのイベントもご

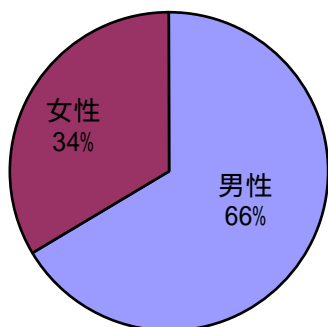
用意したりしてありますので、ぜひそういう材料を使っただきたいなと思ひますので、そんなのじゃ駄目なんだということであれば、ぜひ提案していただきたいと思ひます。皆さんが提案して、作っていただくということだと思ひますので、その点は、ちょっと厳しい言い方だったかもしれませんが、期待することでお伝えしたいと思ひます。よろしくお願ひします。



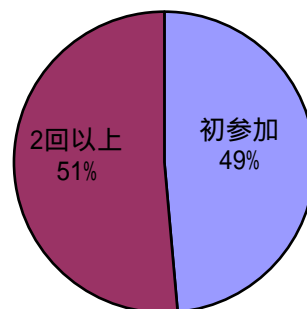
参加者データ

～ データに見る清里ミーティング 2009 ～

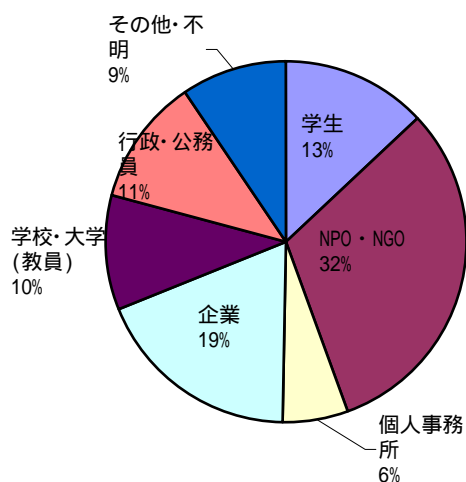
性別



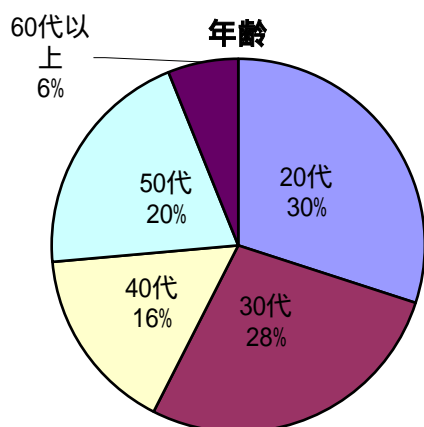
参加回数



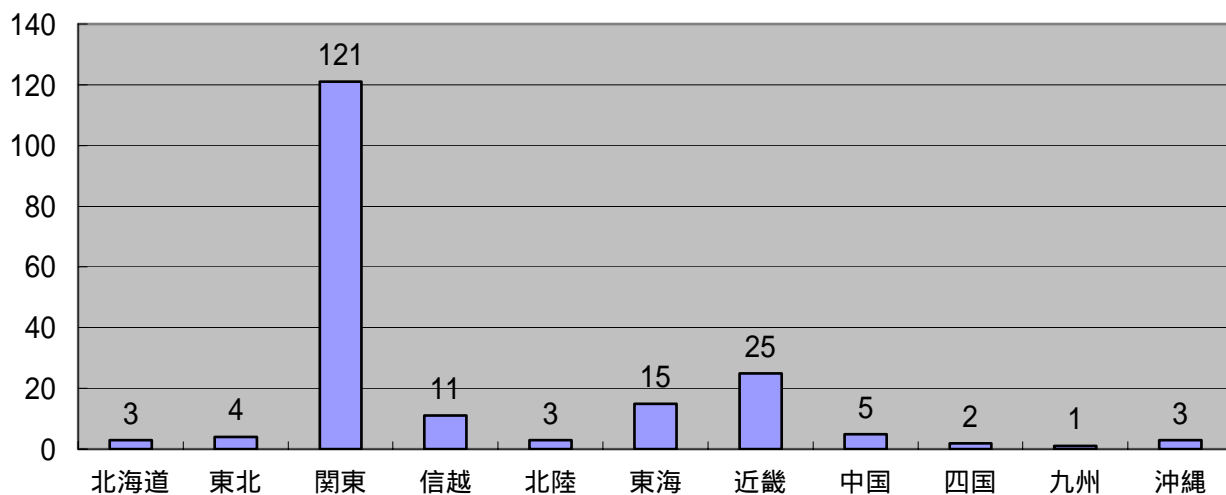
所属・職業



年齢



地域



スタッフ名簿

都道府県	氏名	活動団体	都道府県	氏名	活動団体
茨城県	久下 真希子	立教大学	山梨県	小野 千春	(財)キープ協会環境教育事業部
埼玉県	村山 敬洋	東京環境工科専門学校		加藤 アミ	(財)キープ協会環境教育事業部
東京都	李 厚槿	立教大学大学院		小玉 悠生	(財)キープ協会環境教育事業部
	金久保 優子	(社)日本環境教育フォーラム		齊藤 薫	(財)キープ協会研修交流事業部
	金子 直裕	立教大学		齊藤 園子	フリーランス
	京極 徹	(社)日本環境教育フォーラム		関根 健吾	(財)キープ協会環境教育事業部
	清水 雅紀	立教大学		高木 恭子	(財)キープ協会環境教育事業部
	鶴ヶ谷 優子	(社)日本環境教育フォーラム		竹越 のり子	(財)キープ協会環境教育事業部
	林田 悦弘	(社)日本環境教育フォーラム		鳥屋尾 健	(財)キープ協会環境教育事業部
神奈川県	市村 しの	立教大学		増田 直広	(財)キープ協会環境教育事業部
	川上 淳史	日本大学		宮崎 高虎	都留文科大学
	太刀川 みなみ	立教大学		本杉 美記野	(財)キープ協会環境教育事業部
山梨県	饗場 葉留果	(財)キープ協会環境教育事業部		山本 真知子	(財)キープ協会環境教育事業部
	家倉 舞	(財)キープ協会環境教育事業部		渡辺 笑	フリーランス
	石川 昌稔	(財)キープ協会環境教育事業部	長野県	畠山 桂	長野県白田高等学校
	岩淵 真奈美	(財)キープ協会環境教育事業部	愛知県	大島 京子	フリーランス
	潮田 典善	(財)キープ協会研修交流事業部	兵庫県	大竹 健太	神戸大学
	内山 歩	都留文科大学	山口県	畠本 翼	四国青年 NGO HOPE
	岡本 英里奈	(財)キープ協会環境教育事業部			



清里ミーティング2009を支えてくれたスタッフたち
みんな、ありがとう！！



清里ミーティング2009の仕掛け人
(社)日本環境教育フォーラム専務理事 川嶋直